皇都午睡

完

特
1曾5
664

特
門1曾5
664

戎改六丁

皇都午睡

初篇

上

746

皇都午睡上の巻目録

次

一表題の記原
一俗言の齟齬
一東都の地口
一浪花の口合
一川柳點
一折句
一尻取跡付
一山科の跡付
一札の立見
一鶴助の發句
一枕を碎く
一秀句の渉守
一似口行燈
一畫口合
一冠附
一もぢ〻笠
一粘頭續尾
一雜俳の品目
一二字段々
一物ハ付

西澤綺語堂李叟記

747

一何ゝ附
一考へ物
一字謎
一犬の足跡
一落首
一所俳諧
一画ゝ似あゝ文字
一古代の看板
一宛字讀
一落噺
一講釋
一玉川三吾

一何曽々
一古代の謎
一字謎の發句
一前句附
一戯場の落首
一金昆羅樽
一字ゝて畫を書
一畫噺
一鈍画
一好色合戦
一浮世物まゝ孫
一大人遊

一幼童の遊戯
一俄茶番
一所作拳
一十夜童謡
一地藏の勸化
一遠國の唱哥
一手鞠唄
一大盡舞
一鑄懸駱駝
一胡麻摺
一天王噺子天満巫子
一弄の名を異ゝす

一鳥指
一拳
一童謡ふれ〳〵小雪
一橋の下の菖蒲
一木遣音頭
一鞠のゝ市聲
一十二月万歳
一置銭壱銖
一おはちち
一四谷鳶阿波座鴉
一いろは譬
一寺子屋庵室

7453

一投壺投扇興
一餞宴會
一祭將棊
一佛像雙六
一早口抑〻里
一竹田機関
一輕業放下師
一馬藝
一力持
一おど弟開帳
一順禮歌
一伊勢音頭
一茶佳否記
一圍碁將棊
一むべ山輕多
一道中双陸
一大道具
一細工見勢物
一猿の狂言
一座敷影畫
一子守哥
一潮來節
一滿士唄
一臼挽田植哥
一船歌船頭歌
一豊後ぶし
一ちよんがもぶし
一歌景圖
一青葉の解
一謠曲を唱哥ふし
一淨瑠璃
一娘道成寺
一雪の唱哥
一釵簾の戸
一綾窪

百三ヶ条

749

宮城県図書館

皇都午睡上之巻

表題の記京、枕を砕く

或片鄙の相應ふ暮せる人すきゝ学問乃志を抱きど師と頼む人を形く彼の経典餘師と云る書籍を買ひて論語を大半讀頃京より来る旅人ふ逢ひ四方山の話ふ及ふ京の旅人を年を若くさまて身を持し躰とを見へぬふ何かと物語をすまバ贈答速り形まバ鄙人深く感ド足下の如く博識形るを年頃の学問を容易なるドと云京人打笑て我お生まゝより書物といふもの一冊を見侍らず兎角田舎の学問より京の畫寝を社存ドいと捨おくふおて去る鄙人國ふ居て学問せんより京へ往ゝ其畫寝社せん物と多

分の路用をて獨京ふ登つて三條の宿ふ着日毎ふ祇園下
河原ゆるひを加茂乳の茶店ふ晝寢すきどもさせる博識
ふを聞ふず睡ふを枕ふとするべしと耶郭枕を求てもを
どもさまで能を聞者をバ括り枕塗枕香爐枕箱枕奇種枕
船形枕張枕と枕のゆらん限りをあて晝寢をすきど能寢
入るゝ多まゝふを國の事のみ夢ふ見ゝ詮方盡手枕むぢ枕
をあて睡をども驗しあけもむ半年餘りの京登りもむだ
おとありと見限りて帰路の路銀をきふさぬうちふと今
迄求ゑし枕乃分を打碎きて捨我田舍へ帰りしとゆる昔
話をおもひ出皇都の午睡と題して今迄三都ふゝ晝寢朝
寢宵惑ふ聞ある種ゝの話ふ虛實を撰まゞ我僻案を打交
へ書集る事ふゝん是や宰予が晝寢形ふで日本人の寢言

とを笑ハゞ笑へと東都淺草に三とせが間假寢せし枕石
山人が戯言之
行水を浴湯とを唱へ違へ浴湯を湯を浴ると書バさまで
忌を志き詞ふをゆゝず死行人ふ湯水をうけ棺桶へ入る
ふをバ行水をいまゝしとを云ん丁灯と行燈を混じ多
る行燈を往來を通行の時ともす丁灯を居所ふ置べきと
提灯挑灯の文字を後ふ書多る物と聞けり牛馬の止動を
止をとゞまをと云詞ある畜生の悲しさふを是を聞く
動動ハうゝけと云詞ふるふ是を聞て止る鑿と烟管の名
を取違へ烟管を煙草を呑む具形るゆへ是をのみと云鑿
を金具ふて木をせる物ゆへ木せると云とを滑稽者の云
出せる詞なるべし

秀句の渉守渡

○今云口合と云ものも往昔秀句と云く謡曲の狂言記ふも秀句乃渉し守と云ひ旅人船渉しを渡るふ賃銭なきを歎く一人是ふ無銭ふく渡る工夫を教ゆ其渡し守も秀句を好めバ薩广の守之といふべし心もと尋たゝバ多ゞの旨之と申せよとゝ別る旅人教の如く渡し船ふ乗り薩广の守と云船守船を川中ふと発く心を問ふふ忠度の詞を忘まて彼是云延す中船向ふの岸ふ着く旅人心も青野乃旨といふて逃る船守やるまじ拵くと追ふて入ル是則口合乃もとふして秀句とも云ふ

○東都ふて口合を地口と云近世出たる三養雑記ふ地口ハ土地乃口合と云事ふて假令も地酒地卵ふど云類ひふく地とも江戸をさしていへる詞之とも可ゝゝゝず是似口ふく似かゝ旨たる詞を云があつく扨似口口合ふ種々の旨かち有三養雑記ふ出たるも天神の姿ふて口をおさゝたる繪ふ〔多〕まの天神（鉛の天神）團子三串書るふ〔團子十五（三五十五）〕今も四文銭ふて商ふがあいふ四ッざしなまど以前五ッざしふく五文ふ賣りし頃なまバ百年跡の口詞之

東都の地口

○又地口行燈（似口行燈）とゝ初午ふどとゝす行燈ふも繪を半もゝせたるゝ〔達〕磨大師乃茶釜乃姿〔図〕ゑび多ちかしく又句を長くいひはゞけしも〔精〕霊のまさとと棚経の坊さま見まバゝ物萩露ゞ垂る（女郎乃誠と卯の四角乃まバ晦日ふ月ゞ出る）〔君〕ゞ射姿的場で見まバふだん尺二を射んなさる（君ゞ寝姿窓かゝ見まバ牡丹芍薬百合の花）〔小〕田原挑灯細くかゝなゞみ印の定紋（今川了俊愚息仲秋お多い〜て制止の條と）ゝど又通例の地口と云も〔繪〕馬ゆげ願ほどき（胡ナ乃げ厂もどき）〔梅〕ハ見

てさ〳〵醋と屠申ス（爰ふ見てきく よいとや申ス）〜雪見ふ出さる三谷船（サンヤ 一冨士 二鷹 三茄子）〜年乃若ひのふ白髪ゞ見えるる（沖乃くらゐのふ白帆ゞ見える）〜玄関ふ席を改〳〵口上を聽（林間ふ酒を煖て紅葉を焚く）〜銅乃鍔（渡辺の綱）〜撥校喧嘩杖ゞ澤山（天上天下唯我獨尊）〜娘ち琴よ里三味の太と（戦ハもとより波の音）是らハ江戸の似口之

○京摂ふての口合を画口合と〳〵下ふ繪を書上ふ文句有〳〵

浪花の口合、画口合

安永天明頃の草紙ふ有〜利の暗ふ戸を明〳〵（此浦船ふ帆を上〳〵）振袖の娘羽子板を持て門松立〳〵門の戸を明いる圖之此画ふ〳〵句の餘情をきかせる事先画賛の心之繪ふ勘平簑笠ふて火縄の火をかす曽我の五郎朝戻りの姿ふ〳〵煙草の火をかるを書〜時宗勘平馴染ふ（時ふ蛇蠱ふきに地獄焔）主乃前ふ〳〵牛頭馬頭仙人の目をかけ居る圖〜仙人かけ目

形〜（現銀ふけ直なり）鞍馬天狗牛若ふ誤り居る圖〜鼻杉の根ふ付ふけ里（早住の江ふ著ふけり）是ちハ画ふてきかせたる句ゐへ画口合と云も佳之又画ふ〳〵とを解きける巧里〜赤き襷の紅屋との（浅きたくみの 地谷ゞの）〜本堂涼〜さ團扇捨（本藏若しき打里すも）〜袖萩勘當ふ有悲〜（集佐之木ふ形りかるを）〜反橋（ちぶ〜ふ形里かゝ里）（全題）〜天神質屋へ自身ふ法座る（天神七代 地神五代）ゐど之近世段〳〵巧ふ有同字を嫌ふと見へ〳〵口調一変志為〜（金壹銖と銀壹朱と吹替の頃）〜金で見馴〳〵又銀で（死んで生まれて之 又死んで）〜仙臺高雄を目ふ刺て（現在母ち）を手ふ（ろけて）杯と題の詞ふ新奇を工夫〜〜濱辺の蜑人（山辺の赤人）〜垣の外の四斗樽（柿の本の人丸）杯を古風ふなり〜〜ちんずより梅ゞ安ひ（ちんどるより 青ゞ安ひ）杯を愈古風と志ま〜〜似口ふ似て異ふる事語路之語路を自然と語勢の通ひく

夫と聞あるを云〻九月朔日命をおしゝ（餞ハ喰ふ命ハ惜し）〻お漆久松廣ひ様でせまひ（遠州濱松廣ひ様で狭ひ）又一種異なる有〻氣がもめの吉祥寺〻堪忍信濃の善光寺〻有がたゝ屋の貞柳さん〻おもふを左迂堂の不動さん〻あゝと頂戴鏡玄〻空を築地の市門跡〻恐入屋の鬼子母神杯之是を口合の源ともいふべし

○

東都の川柳（柳点）浪華の冠附（附筆）ハ其土地ハ附たる物ハ〻他國の人の真似るべきを可ふ如業之川柳のうがちハ世人の結ある所ありまゝども一二をいまゝ〻拜領の頭巾梶原鎌縮め〻由解村へ勅使より先山師たち〻惚藥佐渡かゝ出るがいつちき〻〻其手代（ぢ）の下女畫をゝのいまゝず〻此の番産盃も單簡の鈍が鳴る（なゞ）杯寔ハ人情をよくうがちたる物之今此口調を古〻とて廢り近世を〻蜻蛉の出臍駿河の冨士の山

冠附

○

〻誰が廣く志さと女房利屈云〻関取を女房むかゞ小さがゞ杯変まり時〻の流行可ふ〻是も古く形ゞ〻ん

○

浪花の笠附も寛政ゞゞ文化の頃を流行ハ隨ひ月〻ハ句集出たりしが近頃を甚廢りしと見へ句集も出板なゝ〻ぐ人口ハ膾炙する句を盡たりと見へたり

○

以前を屋ゞし折句を端奇の唱哥ハ讀込可きバ今ハも廢らゞ〻舞の盛りをにくし迎ひ駕（アサム折）余處でと〻常ともを〻ゞ絆て居る（ヨヲク折）是らハ其頃乃折句之浪と云題ハ〻〻芥子乃花さゞらバ落ん下心（ケサシ折）〻まぬ〻〻と云題ハ〻〻皆空の突仕舞あり寒山寺（ミツカ折）か樣ハ有〻ものゝ口調今時の樣ハ鄙陋ハ無ゆへ發句かとも心得るゝの有り〻詳を思案乃外乃誘ハ水或を又〻山吹や傾城ハ子ハ有形がらと作せる

754

もぢり笠

尻附跡附

×

○端寄を俳諧乃發句より出たり〽傾城乃晝寝ぬ程に思ひ詰
と云ひ出す〽ケヒヲの句より出勢ると志る盧し

○一種もぢり笠と云物有中の詞を上下に讀入ときかす之
〽御祖師様何がさかさし爪の皮〽百性もおのがさま風するも好
〽何ぶり餅もがしやかと成る摩耶夫人など之

○又江戸にても尻取附廻しと云京攝にても跡附と云有句
の下乃詞を次の句の上に置事あり江戸上略〽六ど屋の口をの
がも多る〽多るも道連世も情〽成さけの四郎高綱で〽ほんで
かく縄十文字略下上方〽稲荷の鳥居に猿の尻〽の志りしくと上
下で〽下の関までおゝせく〽お関が弟ハ長吉で〽長吉く何
むゝにほもりてんく〽天ゝ天満乃躲巫子〽みこが戻ろう住
吉参り〽参り下向の足休め〽すめの判官盛久を〽久松様こに

粘頭續尾〽山科の跡附

かゝ冷ろろ〽多ら語る松頭の松右衛門〽恵さん繕ひ正座する
〽するがに淺間冨士乃山下略などゝ之

○今浪花稲荷祭禮に御輿太鼓を舁掛声となるハ〽近江に石
山秋の月〽月に村雲花に風〽風の便りを田舎から〽唐をかく
せし淡路島〽嶋の財布に四五十両〽十郎五郎を曽我の事略下
是ら安永頃に忠臣藏山科の文句のみにて跡附書たる板
行を見し事有暗記なかに爰に何ゝらん〽扱山科の住所〽
所おなじき女どし〽ごし星之をさしたる大星が〽星がる所を山と
の〽山とちづせむ直に居間〽今ハの本藏眼を開き〽ひらき見
まばたハ〽かに〽りらにと底意ハ奥庭の〽庭に雪つむ奥座
敷〽座敷之座敷の案内いちくに〽いちく立関奥と口〽と口のんで跡
を明〽明ていろも無謎詞〽詞の埴茶汲むお石〽石をむらひに

片男波（お浪）をすくまして器量人（ようふどん）嚴敷師直が（師直）
どふまと下女の淋（ようん）きすぬとおつ〳〵やつさ（ちやりさ）
切ゑと言ちふ〳〵（ちぬ）〳〵きめで多き捨の中ふ（中ふ）法母法
娘（娘）を父のちかん藏（本藏）苦〳〵き打忘も（忘も）忠義の武
士と武士（武士）なる女の不義因前（せん）石違ふを合点で（）
がてんで力弥が手ふかゝる（かゝる）親子の縁深き（ふかき）契
りの新枕是唐山ふ粘頭續尾の戯と同じ趣之
都て此種類甚多くて其時〳〵流行〳〵世ふ流布せる板行ふ
も遺らず詩哥連俳ふ心を碎（く）き右ふ云句どもに心を盡す
を同〳〵隙を費すぬまバ其當座ふ〳〵云捨るハふと惜きを
乃ゝ此惣名を只雜俳と云是ふと捨き〳〵の点者有て業と
する者少からず然ども其句者をもとより點者乃名後

二字段々

雜俳の品目、札の立見

世ふ傳ずゝ心と本意ふ〳〵
○爰ふ雜俳の点者程ふ〳〵き業を行るまゝ世上乃流行を
能く志りて昨日をどふ店開き行て彙ふハ彼所ふ喧嘩
行て〳〵ど委く知らざるを句者を銘〳〵新奇を吐人乃志
らぬ珍説を吐く持來るゆへ其流行を知らざるバ判者と
を為て雜〳〵先年西口合集ふ札の立見〳〵て四天王寺再建
其外刷帳乃建札橋詰ふ立たるを往來群集〳〵て見居る図
を書り点者飛彈の内匠之と思ひ取天王寺再建ふを思ひ
合せ〳〵秀逸と世て句者を鮒のさ〳〵みの口合ふ〳〵案じた
る物を点者深く考と世て〳〵思ふぬ手柄をさまりと云
東都ふ一字附二字段〳〵〳〵今ふを流行するいるバ尻取
跡付の類ふ〳〵て藏主との二字行るを前ふ二字有て藏王

と地主權現の心ゝ多べ〳〵是を親子と付あり折節泉岳寺に開帳始る度ゝ〳〵時節といゝ点者よゝ聞て秀逸とも称〳〵り又七夕との二字ゝ借伊と付るを夕霧伊左衛門七を借る狐泪ゝ孕扱とも女を狐んで子を孕泪金ゝて扱ふと聞り又夏中のよ勢ゝ西行ゝ傾盥と付る是を日を西ゝ傾き盥ゝ〳〵行水すると聞く抜井ゝ秋葉是を東海道荒井を抜て秋葉廻りをする事よゝ聞〳〵り又点者云山を抜く子葉乃句と井の端の秋色の句とを聞々るゝど前の二字を的〳〵て附る中ゝ誠ゝ流行を盡〳〵和漢の故事を云とすまバ思ひとゝゝゝぬ食物の名高きを入又高名の藝者の名を出す是を聽聽点〳〵て句者より點者をた〳〵ゝめる事有點者を机を放すやいゝ東都の市中を欠廻り新奇の雜

鶴助の発句

物は何

何に何

談珍説を聞歩行とゝ戯場遊里ハ森羅万象乃雜説早く聞ふる物ゆへ点者かゝゝゝゝ此両處ゝ求つ〳〵遊ぶと云

○文政中ゝ俳諧乃師宗月夜庵三津人と云有其身膝行の疾ゆきとを流行をよゝ知りて御霊乃芝居ゝて中村鶴助（中村歌右衛門成駒屋觀雀の事）七化九化の所作事を〳〵て大入せ〳〵頃の句ゝ田植乃や鶴助が事云ひ合ふてと詠〳〵が當時三都の俳優の長とゝふるをよゝ流行ゝ云當たると云る處〳〵

○又一種物を附と云有東都ゝ以前ゝやゝ〳〵と云見へゝ扱ふで見へぬ物を富士山より駿河町と有り

○又もゝを乃一體ゝ奚様のお寝間へいつり扱ゝ這ゝと這ゝりてくる蕣乃花と云有是浪花でを何といふ物と類せゝ昔の流行哥ゝ娘ゝ多かる母親まゝゝとさせて見ようがる 孺

何曾々々

子の茅長と云きを短かひと云るをお侍乃腰の物是何と
いふか奇と思ひたり〔ひも多を乃ひもぬのも乃る物歟〕
アふ〔茶碗屋の店抔ゞ〕云ふゞ謎の類之

考へ物

謎こハ以ち古きより〔乃抔ぶ物と見へ〕徒然草ゞ
ふと見へ近くハ文化中東都より謎とき坊主ゝて即席
ふ謎を解大ふ流行し事有其頃人口ふ膾炙せ〔虎屋饅
頭とかゝて天王寺〔心を五十で十〕誰ふても抱きる男乃子
とかゝく芳野の花〔心を云と見せん坊抔有〕も今を掛尽
し解尽したるゝん絶く佳謎を聞ず

○考へ物とゝ紙〔ゝきゝふ題と詞を書て配り跡より心を解て
銭を集る事なやまり是を一通りの事ふても早く心の志
まる物から遠掛ゝるを善とゝ名高き考を以ゞ銭五百

文ふて長尺の木綿一疋大丈夫〔是を武者の名一ツの考〕
六せりの半貫為よし〔子守女〕是を大名の名三ツの考〔毛利
ふも乃秋田丹羽きと〔海老藏の心〕魚の名三ツの考〔勢鰹かきふ乃ひ鮎鯛
ひ是ら謎こよりも一変ゝ多ゝ

○往古の何曾こゝを今とすゝ〜〜異こ〔こゞとゝつくゝ
へ〜て七月半を〔ゝゞゞ盆〕雀が利を持ながら目を抜きさ
きどゝ子をゝ羽の下ふ有を〔硯ゞこ〕乃ゝ〔ゝつてハ乃たゞ参
りを〔ゝゞまゞ是らを上古の謎こと云

又字謎と云有〔三人ゝ日を踏一人ゝ日を戴き日月相並ん
で袖を貫く是〔春日大明神こ又〕有節不〔于竹三星繞月宮一
人居〔日下弗與衆人同〕是節の竹冠を除ゝバ則即の字こ〔
星の如く三點〕て下ふ半月を置ゝ心といふ字こ〔日下と

字謎

古代の謎

書て下ふ一の人と字を置バ是の字と〔弗〕と人と同すもバ

字謎の発句・犬の足跡

佛の字と〔卽心是佛〕の四字を大覺禪師の字謎の詩と

○又渕の一字の賛月と風槲ふ〔つく〕相撲〔う〕ふ是らも字謎の發句ふるべし

又是ふ似て異ふるも雪鋪満地雞犬踏成竹葉梅華といへる絶對の句より出して〔初雪屋犬の足跡梅の花〕と云句もふまり五元集ふ雞去畫竹葉犬走生梅華と云聯句ふよもまと云是らを呼でふ物真の雜俳とも云べし今時冠附ふどの鄙俚ふる物ふ混ぜる事ふかるべし

前句附

○以前流行し前句附も誰も知たる句ふもど〔切〕たくも有切度もふしと云題ふ〔盗人をとふへく見もバ我子と〕といふ句を附る〔已ガ使ひふ已ガ行事〕を抔を前句附と是其項の

753

落首

一體ふして俳諧連哥の附句ふ〔ふ〕ふ〔ば〕或人宗祇ふ云〔事〕ツふる物三ツふ見へ事〔多〕ぐひふき小袖の襟のほころび

てと祇答ふ又〔三〕ツ有物四ツふ見へ〔り〕〔月〕と日と入江乃

水ふ影さして祇答ふ又〔五〕ツふる物ひとつ見へ〔り〕〔月〕ふ

さ〔ら〕ぬの〔ま〕びかを〔ふ〕ふ〔ま〕てと祇の付らをふ其外

安倍貞任ガ衣の袖梶原景季ガ鞠子川ハ上の句を詠うち

直ふ下の句を詠是二人ふて一首と〔ふ〕ふ和歌ふ〔ふ〕ふ〔ば〕

連哥と云ふ〔ふ〕ふ〔ば〕贈答の一首ハ〔ふ〕ふ〔ば〕前句附乃原〔本〕と也

いまんろ

妄ふ又作者の名を呼ぬ〔ま〕ものも落首と〔も〕多くハ人

の悪口を誘たる物〔ま〕へ句者の名をかゝ〔ば〕譬ハ〔ば〕我詠出

たりとも人傳ふ聽たるふりふて云又昔も我〔ま〕跡をかへ

て幼童の手跡ふく書るさま〳〵て市中の街ふ落〳〵置がゐ
へ是を落首と言よ〳〵扨まい天下の政事をあぢり公役
乃私を披傍せる物ゐへ姓名をあるさぬも尤あきども以
ゑバ戯場の評判ふと卑賤の事を落首をるふ多何の遠慮
りなく打出〳〵て作者の名も書〳〵べきふ其事あきま多
善事ハ賞ゞ悪事ハ以多ぬゞ善と思ふゞ故ふ遠慮あるべ
〳〵近く聽え〳〵一二を出ゞ或大儒の供部屋より失火せ〳〵
時焼跡へ張たる落首ふ大学も孟子訳ふきあゞふく珍
事中庸論語同断又賣薬屋の店出〳〵ふ夜分墨黒ふ書て張
〳〵と聞〳〵多五龍圓ろく志ゐの壁で質置て八朱のゐひで
肉ハ九へまひ是ら多其商賣敵ふどの族の詠あるべ〳〵
戯場ふ多毎度ゐる事ふて文政中璃寛芝翫の両座昇負〳〵

戯場の落首

の落首看り度毎ふ木戸へ張〳〵事有り思ひ出る侭爰ふ記
す（角璃寛達大木戸始金花山と云看板を出〳〵改る中芝翫繁夜話切に化始めて出せ〳〵時ふて當まり）出〳〵物ハ尻
かゞ兀る金花山人が多ら以で達の大木戸（中芝翫一谷然谷角璃寛小野通風）
（然谷が夏の道風ふ當らまて行多ま丸めゞ京へ市隠居（中璃寛薄雪角芝翫伊賀越）（璃寛大膳仙堂銭角が行るゐへ通用せん（中璃寛然坂角芝翫）（長範ふ四翫まゞ多ゞ欲古糸門堺宿院堀江出ゞ非人
權八（芝翫堺宿院へ行堀江へ戻り又角へ戻り仕まの錦）（欲古糸門中の餘りを平井
ふあつて角ふう泡〳〵（中璃寛小倉色紙角芝翫先代萩）璃寛（此度多不座と
取ゐへず手向山小倉の色紙角ハまゞ〳〵ふど昇負〳〵の
爭ひ喧かり〳〵も三十年の昔とありて道頓堀の槃昌も其
頃果をらりこせ〳〵ふやゐぐん近世多此落首立べき両座
乃賑ひハ稀ふ非多多り

所俳諧

前ふ云冠附を始時こそやまの惣名を江南ふてハ所俳諧と云く他國の耳ふも通せぬ心こ是ふ各高手有て點を定る金幼き頃志きと物尽しと云を聞し事有井戸堀ハ段こ天ふ遠くある此餘ふ一二句をきく多きど外ふ忘き多り又角の芝居の横手西側ふ地藏堂有て其寶前ふ奉納の額ふ面口合書有しを思ひ出すふ（詞の題菅原詞の種忠臣藏）ふく凡せ句斗り有て句者乃名ふ志ふ〜所ぶ其頃毎年失火して地藏堂きへ所がへせ〜ら今ハ見へず此額の中ふおかしと思ふ志今ふ忘ず面ハ勘平を母財布ふて打擲の圖ふ勘平死ぬのじや（何で死ぬのじやさらきるのじや）母氣強のじや權羽と印せ（是幇間の弟一鶴井權八之）其餘の句覚へぬ思ひ出俳眼ふちらつき其頃爰ハ何屋彼所ハ誰この住家と思ひ出しぬきバ今ハ

金毘羅樽

又後の世の昔こ敢ふべしとあつらしき物之其頃又一種（別行）の金昆羅樽と云ふのきやりしふハ東都の拵樽の口調ふて淨瑠理歌舞妓の穴捜を云之忠臣藏と夏祭とハ其頃番附ふ板行しこ今稀しふ遺る金ぶ著述の傳奇作書殘編ふ出す見べ〜都て樂屋内ふこ月並ふ編集して外題二ツ宛三ヶ年をかぎふ數十題集り一小冊とふぎ亡父より珍藏せ〜ぶ或友ふ借たるを友失ふたり惜ぶど乙甲斐ふし其内おかしきと思ふを爰ふ出すゑふかふ盛衰記（義盛ハ其翌出陣病氣する（景高ハ呑ぬ藥禮たんとする（駒若ハ樋口ぶ跡の仮名前ぶ谷嫩軍記（江南の梅よぎ先ふ山橘（敦盛の馬いつの間ふ逃て去ぬ義經千本桜（梶原ハ奇人と聞くふまめ句する（静をバ万歳の娘かと人ふ云ひ双蝶こ（長吉ハ

異見の後を殘さりのら時折々ふませでお早呵らるゝ伊賀越乗掛合羽其後ろ雪隠ふ若を病む武助和田の三語ゝふや己ゝ助拍子ぬけ菅原其頃ろ廿五日ふ休ゝ形ゝ蜘駕で時平の大臣還御ゝ竜田の前焦付ゝたり玉子酒あど當狂言ハ大約言尽ゝ果ゝろ三國志を題ゝ孔明を鼻紙代で先抱ゝ孔明周諭一文摺かと手を風き戯きふ関羽胡弓を髭で摺赤壁ふ今度解解解所ゞ出来黄巾の賊掩花の直ゞ上りあど有ゝゞ此中ふ樂屋の通言ひまゝ有て病氣する鼻紙代きめ匂する抔ろ他所の人ふ通せゞ樂屋の穴捜ふゝて呼俳諧最弟一あるもの〻

画に似たる文字

○昔よゞ何人の作り始ゝとも志きず文字ふて自然と其容形ふある物有傘鼎筆臼あどを始古篆の文字ふ鳳龍の容ふ書有り多く兒童の弄ふのみ成もり数種ひ里て文字と画を交へたるを有文字斗りを有画斗りも有先文字ふハ

字にて画を書く

円横井傳内口田中十内是らを先ふ云字謎の類なるべゝ

穴を三山通る
児のさかづき

同是を野馬臺詩ふ類ゝ和歌の回文輪田躰ともいふべゝ銭の容を書中央の孔を口と見る吾唯足知といへるを共ふ浮屠氏の書る〻

○梅と云字の例たる所へ梅の花を四五輪書人丸と文字ふて書人丸の肖像と見へ山水天狗のしゝ山花と云字ふ山岡頭巾を着せ花盗人とす へまむし入道を古き物ふや山の井ふ繪ふ似たる貝や半の月雛や立圓の

如此善心を起ゝ悪止一心ふ悟をバ佛心ふ

一悪同善心起佛止悟

異見の後を殘さりのら時折々ふませでお早呵らるゝ伊賀越乗掛合羽其後ろ雪隠ふ若を病む武助和田の三語ゞふや已ゝ助拍子ぬけ菅原其頃ろせ五日ふ休ゝ蛸駕で時平の大臣還御ゝ竜田の前焦付ゝたり玉子酒ふど當狂言ハ大約言尽ゝ果ゝろ三國志を題ゝゝ孔明を鼻紙代で先抱ゝ孔明周諭一文摺かと手を閑き戯ふ関羽胡弓を髭で摺赤壁ふ今度解解船町が出来黄巾の賊拖花の直ぐ上りふど有ゝが此中ふ樂屋の通言のまゝ有て病氣する鼻紙代ふめ匂する抔ろ他所の人ふ通せぐ樂屋の穴捜ふゝて呼俳諧最第一ふるもの〻

字にて画に似たる文字

○昔よゞ何人の作り始ゝとも志まず文字ふて自然と其容形ふふる物有傘鼎筆臼ふどを始古篆の文字ふ鳳龍の容ふ書有り多く兒童の弄ふのみ成もり数種ふ分て文字と画を交へたるを有文字斗りを有画斗りも有先文字ふハ円横井傳内口田中十内是ら ろ先ふ云字謎の類なるべゝ

同是ろ野馬臺詩ふ類ゝ如此善心を起ゝ悪心を止一心ふ悟をバ佛心ふゝ銭の容を書中央の孔を口と見ゝ吾唯足知といへるも共ふ浮屠氏の書るゝ

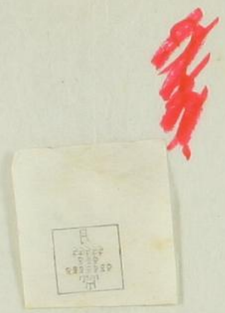
字にて画を書く

○梅と云字の例たる所へ梅の花を四五輪書人丸と文字ふて書人丸の肖像と見へ山水天狗のしらゝ山花と云字ふ山岡頭巾を着せ花盗人とす〻へまむし入道ろ古き物ふや山の井ふ繪ふ似たる貝や半の月雛や立圓の

異見の後を殿たりのら時折々おませでお早呵らるゝ伊
賀越乗掛合羽其後ゝ雪隠ふ若を病む武助和田の三語ふ
ふや己ゝ助拍子ぬけ菅原其頃ゝせ五日ふ休ゝ所〻口
駕で時平の大臣還御ゝ竜田の前焦付〻たり玉子酒ふ
當狂言ハ大約言尽〻果〻ゝ三國志を題ゝ〻孔明を鼻紙
代で先抱へ孔明周諭一文摺かと手を閑き戯まふ関羽
弓を髭で摺赤壁ふ今度解解所が出来黄巾の賊掩花の
が上りふど有〻が此中ふ樂屋の通言のまゝ有て病氣
る鼻紙代まめ句する抔ゝ他所の人ふ通せぬ樂屋の穴
ふ〻て所俳諧最第一あるもの〻

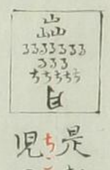
画に似たる文字

○昔よゝ何人の作り始〻ともあまず文字ふて自然と其
形ふある物有傘鼎筆臼ふどを始古篆の文字ふ鳳龍の



字にて画を書く

ふ書有り多く兒童の弄ふのみ然もり数種ふ分て文字ゝ
画を交へたるゝ有文字斗りを有画斗りも有先文字ふ
円横井傳内口田中十内是らゝ先ふ云字謎の類なるべし



同是ゝ野馬臺詩ふ類し〻和歌の回文輪田躰ともいふ
一銭の容を書中央の孔を口と見る吾唯足知といへるゝ
ふ浮屠氏の書るゝ

○梅と云字の別たる所へ梅の花を四五輪書人丸と文字
て書人丸の肖像と見へ山水天狗のしら〻山花と
字ふ山岡頭巾を着せ花盗人とす〻まむし入道ゝ古き
ふや山の井ふ繪ふ似たる貝や半の月雛や立圓

句有り正保の頃之又葉室大納言の自畫自賛とゝ世の中を繁ふゝまむしよ入道ゆきをゆる侭ふくりや其ぶん（ヨシ入道）らを思へバ後世のものとゆゝまじ

古代の看板

○糊屋の看板ふ丸き曲物を張りゝのゝと印たるハりが細ひとゝいふ謎ありゝ畑州屋の看板ふも余幼き頃ゆゝ（ヨシ）印たる物ゆゝと爰ふ有しが今ゆゝ絶ゝ見ず爰ゆゝ仮名一字ふ一畫ゆゝつて三字ふ通ゝすかふふゆゝひふど一字を直ふ二字ふ渡るゆゝ書法ゆゝ草行の文字ふと此類多く有事之

畫噺

○文化の始山東京傳奇妙図繪と云小冊を出す是ふゆゝ人丸の文字ふゝ人丸の容を書梅の文字のゆゝ絵たる所枝とふゆゝ梅花をゆゝらひ（ヨシ）道を始ふ書ゝ発とかふふて書て発の容とゝおいらんとかふふゝ傾城の容を畫り其

762

後文化六七年頃亡父画噺と云事始たり一二をゆゝバ鴻池の主（其頃能名我江と云ゆゝ）の主「やうふ髷ふ（こゝう髷とてゆゝ）ふ髷ふゝ東り向ふゆゝ辰巳屋の主「やうふ髷ふゝ譯入挨拶ふ及び丸ふと云ゆゝ加島屋のゆゝへ元の如くふ納つゝ（作ら）○と書組銘ゝ新奇の画噺を巧出ゝ月ふ両三度の會有て画噺當時の梅と題ゝて三編まで出板せり此中ふ朝早ゝ内を出て本海道をずつゝ住吉へ参つゝが野街道を戻つゝふ云作書て足が　つゝ又さる所の娘の居間へ忍び込ふといゝ所が　こふ障子が志まつゝ明ゆゝ庭ふハ（こふいふ堀ハ有又こちらから忍び込ふとすゝバ　ちふちまつて有とふゝ（縄不入も入らず）と書き

句有り正保の頃之又葉室大納言の自畫自賛とて世の中を樂ふへまむしよ入道ゐをゐる侭ゐりや其ぶん

道 是らを思へバ後世のものとゐひまじ

古代の看板

○糊屋の看板ふ丸き曲物を張りて の と印たるハりが細ひといふ謎ゐるよ〳〵烟艸屋の看板ふも余幼き頃ゐ 印たる物ゐと爰ふ有しが今ゐ絶て見ず爰むゐ仮名一字ふ一畫ゐつて三字ふ通ずすかゐふゐひゐふど一字を直ふ二字ふ渡るゐ書法ゐ草行の文字ふと此類多く有事之

畫噺

○文化の始山東京傳奇妙圖繪と云小冊を出す是ふゐ人丸の文字ふて人丸の容を書梅の文字のゐ孫たる所枝とゐて梅花をゐ 道 ふとを始ふ書て禿とかゐふて書て禿の容とおいらんとかゐふて傾城の容を畫り其

後文化六七年頃亡父画噺と云事始たり一二を以ゐバ鴻池の主 其頃熊名鷲江と云がこう髷とてをやもり 「 ふ髷ふて有り向ふが辰巳屋の主 「 やうゐ髷して行合喧嘩とゐる真中へ加島屋の主 「 かやうゐ髷ふて譯入挨拶ふ及び丸ふと云ゐ 伊 〇と書ゐへ元の如くふ納つと 〇 是を画噺の記原として社連を組銘て新奇の画噺を巧出て月ふ両三度の會有て画噺當時の梅と題して三編まで出板せ 年ゐ 中ふ朝早く内を出て本海道をずつと住吉へ参つて 阿倍野街道を戻つて云 ふあつと又さる所の娘の居間へ忍び込ふといと所が こふ障子が志まつて明ば庭ふハ〈こふいふ塀ハ有又こちらから忍び込ふとすきバ 井 ちふちまつて有とふ〳〵ゐ 蝿不入 と書き

句有り正保の頃之又葉室大納言の自畫自賛とゝ世の中を樂ふへまむしよ入道ゆきをゆる俗あゝりや其ぶん道是らを思へバ後世のものとゝ以ゝまじ

古代の看板

○糊屋の看板ふ丸き曲物を張りゝのゝと印たるハりが細ひとゝいふ謎あるよゝ畑州屋の看板ふも余幼き頃を印たる物なと多ふ有しが今を絶ゝ見ず多むゝ仮名一字ふ一畫なつて三字ふ通ゝすかあふを比あゝ一字を直ふ二字ふ渡るふ書法ゆゑ草行の文字ふと此類多く有事之

畫噺

○文化の始山東京傳奇妙圖繪と云小冊を出す是ふを人丸の文字ふゝ人丸の容を書梅の文字のを添たる所枝とあゝ梅花をゆゝ道あとを始ふ書ゝ禿とかあふて書て禿の容ゝおいらんとかあふゝ傾城の容を畫り其

762

後文化六七年頃亡父画噺と云事始たり一二をゆゝバ池の主（其頃能名鵞江と云が こう髷とてをやもり）のまの主「やうふ髷ふゝ譯入挨拶ふ及び丸ふと云ふ髷ふゝ来り向ふゆ辰巳屋主「かやうふ髷ふゝ譯入挨拶ふ及び丸ふと云ふ髷ふゝ来り向ふゆ辰巳屋の加島屋ゆゝへ元の如くふ納つゝ○是を画噺の記原ゝて社連を組銘ゝ新奇の画噺を巧出しゝ月ふ両三度の會有て画噺當時の梅と題ゝて三編まで出板せ中ふ朝早ゝ内を出て本海道をずつと住吉ゝ参つゝが野街道を戻つゝ云ふ阿倍野の娘の居間へ忍び込ふといゝ所が こふ障子が赤ゝ明ゝ庭ふハゝこふいふ塀ハ有又こちらから忍び込ふとすゝバ ちふちまつて有ゝ蠅不入と書ゝ

763

宛字讀

鈍画

終る是ら一時の戯まとハ云あゞらゝとおゝしき遊戯ふ
らすや

○假名ふてとゞ書てへちまと續すほへとへとちとの間ゝ
是字謎の類ゝ中無角紙取の名ふいと一字書てかふ頭京
と書て假名ゞめ九十六と書て一字九十六と讀すゝ上
総の九十九里村の文字を白里村と書一を足せバ百ゝふ
るゆへ白を九十九ゝ讀すゝ皆字謎ゝ近江國小六月村
ハ子育村の書損を改めゞ書来るゝ

○字直ゝとゞ矢ゝ片假名の一字を題ゝて是ふ書於へて
画ゝふすの遊戯ゝ又一種鈍画と呼以前ゝ炮禄頭巾
ゝ向ふふ幕を釣 厠ふを入ゝ抔ふて有
ゝを其後段ゝ巧ゝふりぬ隨ゝ解ゝ難きを書バ点者ゝ於

落噺

ゝをよゝ見出す事ゝふりぬ

浄藏貴所ゝと上座ふ撰むふどよゝうがちたる物ゝ祖中
村慶子俳名冨十郎鉤鐘岬の嫉妬娘ふて書ゝる
十ゝ藤ハ字直ゝ画直ゝふ通ひて字謎の一種異ふるべゝ
世ふ落ゝ咄といふる事ゝ古きよゝ有と見へ曾呂利新左
衛門井ノ上新左ゝ門ふど頓作の咄有て多くハ秀句謎ゝ
の類ふゝ狂言記又醒睡笑ふどゝ出る寛文延宝の頃の
落ゝふゝの冊子両三部ゝ見ゝる事有近くハ天明頃の
扱行ふ三都の落ゝ話の佳ふる物を集めゝ旧觀雜話ゝ題
ゝて序ゝ坂東岩子俳名道外坂東岩五郎書て三都の咄を三冊ふ
ゝる物有其後追々新作出来て東都ふゝ橘川慈悲成無樂可
樂ゞ三題咄ゝて即席ふて来客ゝ得ゝる題の趣をもふ

宛字讀

鈍画

絡る是ら一時の戯まとハ云ながらふとおろしき遊戯ふ
らすや

○假名(かな)ふてとを書てへちまと讀(よ)すほへとちりぬへとちとの間ニ
是字謎の類ニ中無角紙取の名ふいと一字書てかふ頭(がら)京
と書て假名どめ九十六と書て一字(じ)九十六と讀すよ〳〵上
総の九十九里村の文字を白里村と書一を足せバ百ニふ
るゆへ白を九十九と讀ます〳〵皆字謎ニ近江國小六月村
い子育村の書損を改めバ書ふるよ〳〵

○字直〳〵とを多く片假名の一字を題〳〵て是ふ書於へて
画とふすの遊戯ニ又一種鈍画(じゑ)と呼以前を〔炮禄頭巾〕炮
〳〵を其後段ニ巧とふりぬ隨分解〳〵雑きを書バ点者を於

非

柱乃向ふふ幕を鈴〔天狗の厠ふを入〕抔ふて有

落噺

ものをよく見出す事ふ酢吸〔是を
浄藏貴所ニと上座ふ撰むふどよくうがちたる物ニ祖中
村慶子(俳名冨十郎)鉤鐘岬の嫉妬十〳〵藤(ふじ)い字直〳〵画直〳〵ふ通ひて字謎の一種異ふるべ〳〵
世ふ落〳〵咄といふる事を古きよを有と見へ曽呂利新左
衛門井ノ上新左衛門ふど頓作の咄有て多くハ秀句謎ニ
の類ふ〳〵狂言記又醒睡笑ふどより出る寛文延宝の頃の
落〳〵ぶふ〳〵の冊子両三部も見ニる事有近くハ天明頃の
扱行ふ三都の落〳〵話の佳ふる物を集めニ旧觀雑話と題
〳〵て序を坂東岩子(ガンシ)(俳名道外坂東岩五郎)書て三都の咄を三冊ふ〳〵
たる物有其後追々新作出来て東都ふく橘川慈悲成無樂可
樂ゞ三題咄ニて即席ふて来客より得ニる題の趣をもふ

宛字讀

終る是ら一時の戯まとハ云あゞらいとおゝしき遊戯ふ
らすや

○假名ふてとを書てへちまと讀すほへとへとちとの間こ
是字謎の類こ中無角紙取の名ふいと一字書てかふ頭京
と書て假名どめ九十六と書て一字九十六と讀すよ上
総の九十九里村の文字を白里村と書一を足せバ百とふ
るゆへ白を九十九と讀すよ皆字謎こ近江國小六月村
ハ子育村の書損を改めゞ書来るよ

鈍画

○字直〜とを多く片假名の一字を題〜て是ふ書捨へて
画とふすの遊戯こ又一種鈍画と呼以前を〇炮禄頭巾
〜を其後段こ巧とふりぬ隨分解〜雑きを書バ点者を捨

落噺

ゑをよく見出す事とを〇酢吸〇〇是を
浄藏貴所こと上座ふ撰むふどよくうがちたる物こ祖中
村慶子（俳名冨十郎）鉤鐘岬の嫉妬
十〜藤（フヂ）ハ字直〜画直〜ふ通ひて字謎の一種異ふるべ〜
世ふ落〜咄といいる事を古きよ有と見へ曽呂利新左
衛門井ノ上新左衛門ふど頓作の咄有て多くハ秀句謎こ
の類ふ〜狂言記又醒睡笑ふどより出る寛文延宝の頃の
落〜ぢふ〜の冊子両三部も見こる事有近くハ天明頃の
扱行ふ三都の落〜話の佳ふる物を集めこ旧觀雑話と題
〜て序を坂東岩子（俳名道外坂東岩五郎）書て三都の咄を三冊ふ〜
たる物有其後追々新作出来て東都ふく橘川慈悲成無樂可
樂ゞ三題咄こて即席ふて来客より得こる題の趣をもふ

す浪花ふくさ松田弥七辻講釈の如く市中の軒ふくさ高き臺の上ふ楽前ふ臺を置て拍子木を鳴らして聴聞の頤をちづきせ桂文治ち別ふ咄小屋を建て日ゝ新奇を咄出して一派を立たり後ふ道具鳴物を入此道の名誉を賞す文治作の咄を冊子とし数種出板せり中ふも臍の宿替名高し別ふ薄物の経本ふ著せし道具太平記蚤乱人間體道中記大閑好色合戦ふどを出せり此好色合戦ち甚鄙陋之といへども以前閑し事有て其文のおかしき所を思ひ出て爰ふ書つく（根新考中好色合戦の一章故ありて削る）

講釈

○講釈師といへち古くハ志道軒の辻講釈よく人口ふ膾炙せ里京摂ふ多吉田一方名高く近くハ吉田天山老人之是を講釈の師とち云爲し其後三都ふ誰彼と云も所を〻天山ふ及ぶべからず今や豆蔵講釈ちて戯場の狂言身振声色ふ類し て咄家ふ異ちる事なし諸藝ちも昔ふ衰へる事流弊の習ひ是非ふ

765

浮世物まね

玉川三吾

又輕口物真似とく姓もおき馬鹿口をたゝき頤をまゞさせ戯場俳優の物真似をするを東都ふゝ豆藏声色と云浪華ふゝ忠七の身ぶり物まねと云豆藏忠七を小屋主座本の名こ寛政文化中ふ吾妻清七と云者身振物まねふ妙を得て野郎帽子を當て芳沢いろは（俳名巴江）帽子を脱ぐ浅尾為十郎（俳名奚山）おどをまねるふ其者爰ふ顕を出しかと怪しむむかりよく似たり昔唐士函谷関ふゝ孟嘗君の客鶏（鶏）の声をつゝひ関の戸を開き〳〵といへを今浮世物まねとて牛馬鶏犬諸鳥のまねをする事和漢共ふ古き事と思ふる

○

亦清七と同じ頃三弦胡弓の曲（きくびき）弦ふ妙を得たる玉川三吾と云盲人ハ竹の皮ふゝ胡弓を摺一挺の三味線ふて二挺三挺の連弦ときかせ放屁の音おどをむくふ妙を得ゝり

大人遊

幼童の遊戯

此者没して後かゝる曲を聞ば

○文化中出抜乃草紙ふ大人遊と題して松好齋の画ふて座敷の遊戯のみ挙て書有「棒捻」「枕引」「正直聖天様どさらがよかろ」「畳の縁踏んだり縁ふまずふどを始「白髭明神法」「鬚の掃除」「蛇の尾とろ」或ゝ帝のさまふて目鼻口を拵へめんふい衙をさせ〳〵眉毛耳ふどゝて一ツ〳〵ふ渡す爰と推量ふて

か様ふ置を是ゝする戯こ

○多くハ鳴物停止の折の慰ミふして遊戯数種有浪華ふゝ幼童のつらまへぶくらと云を東都ふて鬼ごつこと云浪華の白眼ごくらハ江戸ふゝあぶめくゝと云ふ浪花ふゝ座敷遊戯ふ字治ゝ茶所と云ハ人数ふ合せ椀のかさ或ゝ小皿ふの中へ酒茶菓子煙草ふど座中ふ有る物を書て中

鳥指

ふゝ抜書ぬを入是ふ當る物ゝ我思ふ勝ふふ遊ぶ休の印〈紙〉各前ふふせ〳〵扱三弦ふ合せ宇治ゝ茶所茶ゝ宴所娘やまたアヤ聟ほ〳〵やと訊ひ乍座中車座ふ成つて廻〳〵て各前ふ廻り〳〵器を所希る酒の字ふ當り〳〵ハ呑煙草ふ當り〳〵ハ呑又追ふふ右ふ通廻す事こ

○鳥さ〳〵と云遊戯よ〳〵似ゝり酒席ふて輕文の札ふ殿さま用人鳥指と三枚の外ハ鶴雁鴨雉子ふど鳥尽〳〵の繪札人数ふ行ゝせ裏むけてよ〳〵札を切配るゝ殿の札ふ當りたる人殿の札を出〳〵て用人と呼用人札持〳〵者前へ出〳〵て何の法用と問ふ殿々ふゝ鳥をゝふ〳〵て遊ぶと思ふ鳥さ〳〵を呼べ用人鳥さ〳〵と呼鳥指の札の者ハツと答て札を向ふへ出す用人鳥さ〳〵ふ殿の法意をのべ殿の好の鳥を

俄茶番

云付る鳥指雑子とゝ鶴とゝ仰の物を其座中ゝ持居る者
をきく〳〵違る時ゝ罰酒一盃呑又外の者ゝ云當ら如時
ゝ又一盃呑三盃呑てを得たりて如時ゝ改て札蒔直すゝ廓
中居續ゝどゝゝかゝる遊戯など仕尽して遅日を暮を以
と興ゝ

浪花の俄と云遊戯ハ原謡曲の狂言より一變ゝゝる物と
思ゝる東都ゝゝ茶番と云く俄ゝ相似ゝゝゝ共又異ゝ口上
茶番ゝ何ゝまゝ我慢りゝ題ゝ合せ地口口合ゝく落す茶
番狂言と云ゝ京摂の俄ゝ諸ゝの形きを云ゝゝゝバ豆藏め
き〳〵素人狂言をする〳〵上方の如く流〳〵俄の類を江戸吉
原の俄とゝ云ゝ京摂の俄ゝを教種有て文化中ゝゝゝ袖岡
繁兵連湯桶草履吉ゝど老練の輩有て夏祭の頃ハ二人三

人宛の仕組俄有〳〵祭禮ゝ日ゝゝ所望ゝ任せ店先ゝて仕
又座敷へゝ往てせ〳〵ゝゝゝゝゝ素人の俄ゝ多く流〳〵俄とく
異ゝる姿〳〵て物賣の声又ゝ流行唄の口合ゝゝゝゝゝて
落せ〳〵ゝゝゝ其頃ゝ五十戈以上の者色黒く或ゝ老人大
男の隨分色氣のゝき人を俄男ゝど賞多るゝゝゝゝ近来村
上淀川本虎ゝどゝゝる老練ゝ輩新作の俄を教せ〳〵ゝゝ
連を結び俄師と呼び〳〵ゝゝ素人俄黒人俄と二流ゝゝゝゝ
ち今や三喜新懐南玉ゝんどほとんど歌舞妓役者の心と
ゝゝ給金ゝゝゝ程と定め芝居ゝゝ小屋ゝく道具鳴物を入場
桟敷ゝく見する事とゝゝゝゝゝ是幇間牽頭とゝゝ〳〵く忠
七豆藏ゝ類とゝゝゝゝゝ嗚呼浪華ゝ名物も廢りたり文
化中ゝ俄選といゝる双帝二編有て天保中ゝゝゝゝゝ做つく

拳

俄天狗と云書も出板ふ及べり

○拳ハ原長崎へ来泊人のもて来し物ふや此道ふ達人多く文化中ふ浪華の義浪名高く松好齋畫を交て拳會圖繪二冊を著し拳會ふを土俵を鍔り手ふ拳褌をもめ角觝ふ倣ひ名乗りをなぞり五人拾ひ十人ひらひ抔云有虎拳狐拳虫拳ゑど出来もバ其後拳のかゝるふ種々の所作をし打やゃ斬せや太鼓ふ鼓ふ大鼓とヤリテン〳〵チリンか〳〵コロリンシヤン〳〵大名公家お上人ふ山伏ちゃちく座頭の坊屋根屋ふ大工ふ乗差船頭馬方四ツ手駕頼ませよく〳〵ぜでセイ跡狐拳ふあるゝ

所作拳

○又菊〻猴〻豆〻と云拳を有近頃東都ふくもやりしハジヤン拳ゝ酒を拳酒色品ハ蛙ひとひよこ三ひよこ〳〵蛇めゝ〳〵ジヤンジヤカジヤカ〳〵ジヤン

童謡

十夜童謡

763

童謡九れ〳〵小雪

ケンナ婆ゑふ和藤内が呵らもて虎をハウ〳〵ツテトロラン赤めくでサア来ホセヘ跡を狐拳ゝ是より色〻の趣向をつけとゞハ三國拳ゝて天照太神孔子釈迦有たもどもやらゞ余此上を樽次底深ゞ酒戦の時の盃を思ひ出蜂龍蟹の拳より趣向ゆるもゞくと思ふ蜂ハさゝ龍ハ呑蟹ハ肴を狭むと是ふ甲乙を附〻ふバおか〳〵からん

○童謡俗謳ハ古く傳ふる物なもバ字音の轉する事多く言誤る事ゑ〳〵徒然艸ふ鳥羽の院幼くおゝ〳〵ませ〳〵時雪のふる日仰らも〳〵ふも〳〵こゆきたんむのかゆきと云ハ米の粉をふるふふ似たもバ粉雪を云たんむとゝたもたまも粉雪かきや木の股ふとうゝふを聞誤まるゝ

○俗謳と云を京師ふ例年十月六日より十五日迄十夜とて

橋の下の菖蒲

浄土宗の寺ふ法會有洛中町々の子供鉦を叩き夜毎ふ門々へ来て米を乞ふて曰ふむ阿みだ〳〵おうづるてん阿の人行ゑぐ地獄を遠かゝぐ毎年よ祈んをおらふふ〳〵いちの盃釵の山おうさてさうきて其時涙の暮六ツ觀音勢至ハ蓮のまんげふ打乘ぬひあまいだと訊ふを何ら訳もなき事と聞居しが南無阿弥陀と申する間の人を弥陀地獄を遠からば愛念餘念を外ふとふ〳〵道と嶮岨劔の山追立々其時涙ふ暮六ツ觀音勢至を跏趺の蓮花ふ打乘ぬへと云べきを兒童の言誤りへと佛足を組く端座するを跏趺といふと我俗ふ藏六かくと云事へ

○

鎌倉頼朝時代ふ俗間の謡歌へときくるを橋の下の菖蒲ハ折どもおらもず刈ともとも刈らるゝ伊藤殿土肥殿土肥ぢ

地藏の勸化

娘梶原源八助殿太郎殿是蒲の御曹子の御連枝ふまど弱きふと強ふを何の用ふ立ぬハぬを菖蒲の折どもおらもずと云伊藤殿より下を大名權柄の人ふ〳〵もてはつりひし事と云心へとぞ余幼年の頃浪華ふを此童謡を專ら訊ひし事有其時の文ふ木杭隱し九年母橋の下の菖蒲刈ども刈もぬゝ殿仝鯛の虫ハ輕業味噌ちはくを酒ちはくり呑でもお腹ハくちやぬあやと云しが何の事を云しみやと思へバ鎌倉時代の童謡の遺しへ

○

國〻ふての童謡ふと多きもの〻其内ふ國〻の訛方言ふ言誤りて愈他國のものふを解すべかゝず京摂と東都ふを其物ハ異ふしてやゝ似たることまゝ有浪華ふ七月廿四日ふを子供持遊びの地藏菩と鉦を土ふて案したるを

木遣音頭

丸盆ふのせ地蔵の勸化米ちと多んせと近隣の門こふゑ
ち米をこふ東都ふて二月初午ふ土細工の狐をふさき西
馬ふのせ稲荷ゑふ十二銅をおひげと子供口こふ云こ門
こふ立賽銭をこふすす時ふゑ珍重〳〵と云こふせぬ内ふゑ
貧乏ヤアイと高声ふ云て汝る春秋と時候ハかりをど大
約相同じ

○音頭掛声木遣りの類と種こゐる物こ上方ふて物を運ぶ
掛声ふゑいさやちよふさと云京建仁寺の榮西長老鴨川
ふ今の陀羅尼の名鐘を寺中へ運ぶ時榮西や長主（チヤウス）と云し
より發る又京の大佛造營の時大石を運ぶふ勢州路より
大津迄引来る折の音頭ふ杭坂越へこやはさと云しより
遺ると云船歌馬士歌小室節の類いちく数ふるふ際限ふ

遠国の唱歌

かるゑ〜

○中ふを一種おかしき浪花の七夕より八朔迄童女の一連
ふ並びこおんおくといふる物を訊ひ市中を歩行いつの
頃より始まりしと云事を不知是童謡ふ類して歌数種有
一二をゆるバ遠國（ヒナ）ふハハハハや遠國ふさヨイ〳〵船を
出こ行帆かゝて走る茶屋の娘を出て招こハリヤヤアトサア
こ爰ハ松坂越へこやつさ踊りをアリヤ〳〵サアこよふヤサ
抓思へバ音頭より出こる童謡ふるべし一置（イチヲイ）こまりゑ屋
コチヤ市立ぬ天満ちりやこ拵市立まする二重こまりゑや
コチヤ庭をかぬ丁雅ふりやこ拵庭掃まする三重こまりゑり
やコチヤ三味弦（弾）ぬ藝子ふりやこ拵三味ゑきまする四重て
まりゑりやコチヤ鼓よふぬこよりゑふりやこ拵鼓よります

る五五〻まりやコチヤ碁をうたぬ能立ちりやたち〻碁を
打まする六五て廻りやコチヤ鱈をおさぬ船頭ちりやたち〻
鱈をおーまする七五て廻りやたちや質五ぬ貧乏ぶりや
たち〻質五きまする八五〻まりやコチヤ鉢ぶぬ蕎相ふ
ぶやたち〻鉢割破まする下略さなてサテ〻 扨横堀の饂飩屋の
子ぐ心中をたとふ〻母屋男ハ誰〻や男若ひ者米屋
の手代下略扨と艶〻や蛍の出ハ艸の小影ふ身を焦すバリ
ヤリヤきぶきよひ屋きふど此数数種有

○中ふを京師を又是と同じふ〻て異ふるハ男子のみふて
竹螺を吹拍子木を首ふかゝうかゝの面大きなる丸面を大
勢謡ひ連歩行事之其文句ふを数種有盆の十四日ふ廿日
鼠へきへ〻元服きせ〻髪結て牡丹餅賣ふやつきゝバ牡

鞠のかけ声

丹もちや賣ひと書寝〻て猫ふとふきて寝んよふふよゝ又
昆布屋の喰ぐ一枚紙情んで昆布で開ふい〻ぶまつ〻や
〻ふど謡ふ又浪華ふて童謡ふお月様いくつ十三一ツ
おまつゝまぐ若ひふんど京へ登つてと謡ふを東都ふてお
月様いくつ十三七ツと云何ぶぐ是なりや不知

○東都ふて羽根突折一子ふ二子三つ〻〻嫁子ふつつやの武
蔵七重の薬師九ツ十ヲ浪花ふてを一ヤ二ヤ三ツふ四ツ
やと云手鞠を突ふ一ころ二ころ三ぶ四ごろ五ぶ六ごろ
七ごろ八ごろ九ごろ十ごろ十で豆腐屋のお内義ぐ三ツ
子を産ちやつて一人の子を木綿屋へやつてモメン〻〻
ヨまひとりの子を茶屋へ屋つて茶〻〻ヨまひとりの子
を帋屋へやつて帋半帖もろて爺ぼふ半枚母ぼふ半枚跡

ふ半枚遺つゝいろはと書て左義長へなげてとんどの道で喧嘩が有てくるけ〳〵ヨと謡ひあがゝ手鞠をつくあり又ハリヤ一反ハリヤ二反と突有是を蹴鞠のアリヤウの掛声より出るものゝあらん

手鞠唄

十二月手鞠奇の唱奇を鄙陋あるものゝあもどこハ天和貞享の頃浪華新町の廓中繁昌の節太夫天神ふ行義躾方を教ふる師の作せしものとて紋日名寄ふて一ヶ年の年中行司を集めしものゝ百七十年の今ふ廢らず行るゝを のゝ三絃ふ弦唄ふも正月より四五月迄ふくすへを唄ふものゝ稀ゝ忘つと手ふ手を七五三の内として嗚呼よゝ弥生ハ指で悪晒落懺とつゞりゝの節旬卯月々も後ふや廣く釋迦も生誕生道鏡増りの幟棹立迺を失ふ萩月又とも

置銭一銖

十二月万歳

かゝる二度めの彼岸あどよく此長くしき文句を色文句ふよせての作を手際ある物あり

○京ふ京土産とも十二月萬歳とも云物有是を色文句あゝす只年行司のゝふゝ初春の壽祝ふ松飾表ふさゝ〳〵新袴モノ大黒屋徳右ゑつ年始の礼禮参ひ禮者の外ハストントン〳〵手鞠屋拍子と訊ひ出〳〵ちよど三百六十豆の数皆禮者の車ふ拵目出さゝもと経る迄いと無ふる物ゝ

○抑廓の始りハと訊ひ出ハ東都の大盡蘇を近来流布隨華ふ委しくゝもバいゝゝ此三ツの欲を三都の風義を点るふ足るおもゝろき物ゝ此余時ゝ流行のものやり奇も佳作の物を後ゝ迄遺るふもどゝ多くゝを其節うゝふのゝふゝ廢る物ゝ是ゝ其時ゝの人情を述ものやり詞有て幼稚の時を

やり〳〵歌あどフト歌へバ昔慕しき物も有ておかしき物ゝ流行詞を其當座のミふして後ゝを何の事を云しふや解せぬ物多し〳〵余幼年の頃より段〻変化せしを亜銭といふ事ゝ誰〻を相思ふと云男女の中を亜銭と云しが多くハ幼童の辞ふ〻是をいふるゝと赤面ゐたる物ゝしを段〻人氣賢〻〻相ゐて今時十歳未満の小童たりとも恥るゝきゐくありたり亜銭を幼童の遊戯ふ六度穴打あどふ銭をもつゝ銭を打時我をうゝずと銭を亜人ふ打せゝ勝敗を論ずるの詞ゝ又沖ふ漂船のごとく戀の心の切あるをり常〻沖船あふんとも云り

○前老夫婦土瓶焼鍋の鋳懸〻〻市中を歩行職人有しを見〻男女連立歩行を土瓶の鋳懸と異名を附天竺より渡り

鋳懸駱駝

おつこち

〻〻獣牝牡の駱駝を見〻より男女の連立を駱駝と呼変たり天保年間江南の妓家ふ〻我思ふ恋路の話を云時を聴債受債を取る金を銖の定ふ〻是のたまり〻時芝居行或を食悦ゐどふす是を市中へ移つ〻男女の色を吉銖〻と異名せり

○又ヲツコチとも云東都の方言ふ都ての物を落さる事をおつこちと云是口説落〻〻と又口説落さとを古くいへる詞ふ〻出家ふどの墮落せ〻を坊主落と云嵯峨野の女郎花ふ遍生乃我落ふきと人ふ語るふ是落さと云詞の往昔よりとゐへ来る詞とすべき物ゝ何の女ふを落と何の男ふを落さと云心よりヲツコチト変名せり遠ふ他邦の人の耳ふをさぐ解すべからず

胡麻摺

四蒼鳥阿波座鴉

上手を云とを口上手ふ云事ふして油を云ともいへり東都ふてをヲベッカを云と云近来是さく胡麻をると云此名義委敷余が綺語文草ふ出たるべ〜流行詞をふと多く〜て中〜際限ふかるべ〜昔の詞ふいふてもおくをふ小夜嵐何でいふてり幽ふ聞へる中無をやを〜ハ楚んあふ楚ふ猫ふやん（チヤカホン）よふいるまと事ドや何でと至つて近きを放子ドや熟〜（アロ）あどふり形る事より言出〜り解らず此道の識者ふ問ふ度〜

東都乃俗四谷鳶と云浪華の阿波鴉（座）と云能對句ある〜べ〜奴僕乃藤巻柄ふ手をかけ白眼いる空ふ初鰹を搔たる鳶乃図有是四ツ谷鳶ふ〜て阿波座鴉を銭もとゝずと新町へうせく買〜と啼との俗謡より發るぞめきひやり〜の異名ある〜べ〜 松本五粒（能優祖松本幸四郎）幡隨院長兵衛のせりふふ藪鶯ハ京育阿波（座）鴉を雑波鴻吉原雀を羽がひふ附と連孫詞ふ云たるハ何の心とふく三都乃枕辞ふ冠〜たるふらめ大聲ハ俚耳ふ入らぢ論高ゝきバ俗ふ通ぜぢと聖賢乃辞のむつか〜きと詩歌連俳の雅言の通ドがさきも一度戯場乃俳優のせりふふ以ゝ世浄瑠璃端歌の文句ふ入く耳ふ觸るゝ時をいつゝ聞則言則て何の事とも弁へぢかゝこと交りふも云ゝもの也君子危ふきふ近よらぢ甚罪を憎んで其人を憎ますず前車のくつがへるを見く後車のいま〜めを説或を愛別離苦の會者定離の唱ふ事を思へバ戯場も道をあらせるの近徑ゝ

天王囃子天満巫子

いろは譬

○爰ふ賤しき業ふるものあまど古画（浮世画之）ふ遺りて今姿を見ぬものを東都ふ天狗の面を頭ふ戴き扇ふ〻小さき板行をちらし居る図有是天王様を囃すがお好と云物貫ひふ〻浪花ふ裸身ふ苫木綿の前垂をして女のおて髷を着テン〻天満のお神樂堂からお巫子が参りましたとて物貰ひの有しも世年此方見へぬありぬ近来或好者家古画の懸想姿の姿ふ出立正月元旦の朝夜深きまを出てけ於う〻〻と壱歩行しが買物ハ壱人もなく古雅ふる見付ぬ容ふ犬ふほへつうも五足七足ふ取まかまて困しに果て逃返ると図しがさも有べし奇を好むべうゞゞ異ふる容をすべうゞゞ

○古き諺の中より撰出し幼童弄の軽々ふ画を摺いろは譬

弄の名を異にす

と云物有是ふ数言有く〻ふゞバ石の上ふと三年、否〻三盃
手盃まと三盃鯨の頭と信心から石原を樂鑵一寸先を闇
乃夜あどゆきバ壱組ふ違ふる有東都の譬又異ふ針
の穴か〻天覗くを江戸ふ〻を葭のずいより天象を見る
惣領甚六（大前髪ゆびをくいへ〻画是江戸道外役者ふ浪花ふ云十五の頃ふ）京の爰大坂の夢あど云
譬ふ幼童の弄ふさく出す程の事あまバ常ふ譬ふも云事
ふ
言語を勿論此餘幼童の弄ふと呼名の変りし有上ふてせ
バ貝と云貝を江戸でを金砂子（キンシヤゴ）上ふてむくろゞ取と云を
椋取（クラトリ）ふ手鞠セッを取るを上ふく勘弥手鞠（モト江戸森田勘弥所作事ふてとを）
しゐこ江戸ふ〻を手玉取（縮緬の小裂ふく二寸斗の袋を製中へ小豆を入と縫ふ七色の製ふ）弓矢球（キヤヅ）
打（ウチ）を弓（ユミ）破（カヤ）ア羽古板ふく羽根を突を二人ふく突をおよバ

寺子屋庵室

ね又やりをご突ぎねと云後ふ幼童の弄物ふきへ名の異る事ありべし

東都ふく手跡の師へ幼童の手習ふ行始いろはを習ふを

かるふず跡りを文章江戸往来ゥ孫めと云ハ遥ふ後ふ習

るす婦童ふを都路とく江戸より京迄五十三次の名所く々

を書しるものを学ぶす京摂ふての京名所を習るすふかへ

たり上方手習の師匠男子ふを九くの割声或を小謡女子

ふを百人一首女大学ホをよませとを東都ふをよませず

男女とを幼童を育てるふを甚やりむ敷しふる所あり

附て云和州奈良ふく手習の師の家を所おちと云愚考ふ

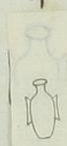
所おちハ是庵室の略語ふく三都ふく寺屋お寺と云と同

じ唱へふるべし高野の麓学文路を是ふ似たる名義ふる

投壺投扇興

ん欤

漢土より渡りし投壺といへる弄



ハ如きの壺

へ箸の如の竹をほふり附壺の内へ立ツ上ふ乗るふ各名

有て高手下手の遊戯有我朝の投扇興ハ是より出たるふ

るべし文化中大ニ流行して今稀ふ遺る源氏の巻この

名ふ准らへ五十四帖の香の図ふ思ひよるしふや風流ふ

る遊びこ余以前ふと是を五十三次ふ転じて譬ハゞ

直ふ扇乃ちたもく時を原とを吉原とを富士の容と見爰

の浮橋ハ瀬田ゥ矢剣と見立く草津とを岡崎と呼扇の柄

もく山越残念といふべきを亡命残念といをんと戯もく

事有可笑

茶住否記餅嘗會

○大内の鶏合を闘鶏ハ蛸を蛸合菖蒲合菊合とてやん事ふ

寺子屋庵室

ねゝ又やりたゞ突だねと云徐ふ幼童の弄物ふさへ名の異る事ありべし

東都ふゝ手跡の師へ幼童の手習ふ行始いろはを習ふを かゝらず跡りを文章江戸往来ゝ紙めと云ハ遥ふ後ふ習ふす婦童ふゝ都路とゝ江戸より京迄五十三次の名所ゝ々を書しるものを学ぶす京摂ふての京名所を習ふすふかへたり上方手習の師匠男子ふゝ九ゝの割声或ゝ小謡女子ふゝ百人一首女大学ホをよませとゝ東都ふゝよませする男女とゝ幼童を育てるふゝ甚やりぶ敷しるる所あり附て云和州奈良ふゝ手習の師の家を所おちと云愚考ふ所おちハ是庵室の略語ふゝ三都ふゝ寺屋お寺と云と同じ唱へふるべし高野の麓学文路を是ふ似たる名義あり

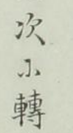
投壺投扇輿

茶住否記餘嘗舎

ん欤

漢土より渡りし投壺といへ箸の如の竹をほふり附壺の内へ立ツ上ふ乗るふ各名有て高手下手の遊戯有我朝の投扇輿ハ是より出たるふべし文化中大ニに流行して今稀ふ遺る源氏の巻ゝの名ふ准らへ五十四帖の香の図ふ思ひよそしふや風流ふる遊びゝ余以前ふと是を五十三次ふ轉じて譬ハヾ直ふ扇乃ものゝ時ゝ原とゝ吉原とゝ富士の容と見爰の浮橋ハ瀬田ゝ矢剣と見立ゝ草津とゝ岡崎と呼扇の形もゝ山越残念といふべきを亡命残念といゝんと戯もし事有可笑

此図の如きの壺



○大内の鶏合ゝ闘鶏（トウケイ）蚌ゝ蚌合（ガッカセ）菖蒲合菊合とてやん事ふ

寺子屋庵室

ね又やりをご突だねと云徳ふ幼童の弄物ふ〻〻名の異る事あるべし

東都ふ〻手跡の師へ幼童の手習ふ行始いろはを習ふを

かゝらず跡りふ文章江戸往来ふ紙(ママ)めと云ハ遥ふ後ふ習

ふす婦童ふを都路と〻江戸より京迄五十三次の名所〻〻

を書しるものを学ぶす京摂ふての京名所を習ふすふかへ

たり上方手習の師匠男子ふを九〻の割声或を小謡女子

ふを百人一首女大学ふをよませとを東都ふをよませず

男女とを幼童を育てるふを甚やりぶ〻しふる所あり

附て云和州奈良ふ〻手習の師の家を所おちと云愚考ふ

所おちハ是庵室の略語ふ〻三都ふ〻寺屋お寺と云と同

じ唱へふるべし高野の麓学文路と是ふ似たる名義あり

776

投壺投扇興

ん歟

漢土より渡りし投壺といへ

此図の如きの壺へ箸の如の竹をほふり附壺の内へ立ツ上ふ乗るふ各名

有て高手下手の遊戯有我朝の投扇興ハ是より出たるふ

るべし文化中大に流行して今稀〻ふ遺る源氏の巻〻の

名ふ准らへ五十四帖の香の図ふ思ひよそしふや風流ふ

る遊びと余以前ふと是を五十三次ふ轉じて譬ハ

直ふ扇乃もたゝ時ふ原とふ吉原とふ冨士の容と見爰

の浮橋ハ瀬田ふ矢剣(刺)と見立て草津とふ岡崎と呼扇の柄

を〻山越残念といふべきを亡命残念といふんと戯も〻

事有可笑

茶住否記餘嘗舎

○大内の鶏合ふ闘鶏(トウケイ)卉ふ卉合(クワアハセ)菖蒲合菊合とてやん事ふ

き方の戯弄ふ〳〵草箪笥といつるふ入〳〵闘す事之闘茶ハ
近来煎茶の流行せ〳〵析専ら弄〳〵闘香の式に倣ひ花月の
式茶住否記ふどせ〳〵ば果ハを新奇を巧〳〵き〳〵茶を止め
土俵の内へ茶盌を仕ふみ天地人と三枚の札ふ〳〵行司双
方へ茶をつぎ唐團を上〳〵表徳を呼び茶組ハ正面の壁ふ
張有左右の人を頭ふ禅を耳より望然呑より早く三枚の札
ゝ内是と思ふを出す行司勝の方へ團を上員の方ハ跡へ
ひ〳〵勝者を五人ゐら以十人びゝ以ふも及ふ是を古〳〵と
て餡喰會と云事を思ひ付たり以てハ虎屋駿河屋東雲堂
太手饅頭 銭屋丹後 ふど菓子ふ名高き家の餡を求め無目何程ふ
水何程と定煮〳〵吸物椀ふ盛常分〳〵一二三四の式ふ當る
當日の床ふを菊咲屋蕊を家内の常る程と書〳〵月居の軸

177

物を熱杯ふ〳〵戯も〳〵ゞ長〳〵〳〵てハ飽易く一ふ度ふ〳〵止
たりきゞ〳〵痴ふるかふ腹のみ張〳〵ゞと苦〳〵き戯もゝか
〳〵

○琴碁書画を貴人の戯弄ふもバ卑賤の者のすべきふゞ
孫ど中ふも碁を本因坊碁を大橋と〳〵家元有て賤〳〵き者
も此業ふ達〳〵る時段を免さを姓名を記さるもの之摩迦
羅大々将棋大将棋を名のみ聞〳〵いまゞさ〳〵たるを見ゞ
中将棋すゞさす人ふ少ふ〳〵只世上ふもてもやすを小将棋
之是を幼童ふも〳〵せバ指方いく〳〵も有て何の書ふも遺
らず十六武藏を別ふ般ふ盤ふもゞ〳〵先王詰もゝみ将棋駒の
山崩都詰三挺並三枚飛廻り将棋ハ道中雙六ふ似ひ〳〵物
り三挺乃駒をふつ〳〵賽ふかへたり

き方の亂弄ふ〻草簟といへるふ入〻闘す事ゑ闘茶ハ
近末煎茶の流行せ〻折專ら弄〻闘香の式に倣ひ花月の
式茶佳否記ゐどせ〻ゞ果ゝを新奇を巧〻き〻茶を止め
土俵の内へ茶盌を仕ゐみ天地人と三枚の札ふ〻行司双
方へ茶をつぎ唐團を上〻表德を呼び茶組ハ正面の壁ふ
張有左右の人を頤ふ禪を耳より星然呑より早く三枚の札
ゑ内是と思ふを出す行司勝の方へ團を上員の方ハ跡へ
ひく〻勝者を五人ゑら〻ふ十人びゞ〻ふも及ふ是を古〻と
て餞會と云事を思ひ付たり〻ふ〻ば虎屋駿河屋東雲堂
大手饅頭 錢屋丹後 ゐど菓子ふ名高き家の餞を求め然目何程ふ
水何程と定煮〻吸物椀ふ盛嘗分〻一二三四の式ふ當る
當日の床ふを菊咲屋露を家内の嘗る程と書〻月居の軸

二つ

777

碁將棊

物を鉢杯ゐ〻戯も〻ゞ長〻〻てハ飽易く一ゐ度ふ〻止
たりきゐ〻痴ゐるかふ腹のみ張〻ふと苦〻き戯もゑか
〻

○琴碁書画を貴人の亂弄ゐきバ卑賤の者のすべきふ可ら
ふゞど中ふも碁を本因坊碁を大橋と〻家元有て賤〻き者
を此業ふ達〻る時段を免さを姓名を記さるものゑ摩迦
羅大々將棋大將棋を名のみ聞〻いまゞさ〻たるを見ゞ
中將棋すゞ〻すゞ人ゆゐく只世上ふもてまやすを小將棋
ゑ是を幼童ふも〻せバ指方いくゞも有て何の書ふも遺
らず十六武藏を別ふ盤可きゞ先王詰をゝみ將棋駒の
山崩都詰三挺並三枚飛廻り將棋ハ道中雙六ふ倣ひ〻物
り三挺乃駒をふつ〻賽ふかへたり

立ハ十

椿を

俗

祭將棊

五 逆立ち廿表ハ一裏ハ無十二詰とを十二枚乃駒ハ〻王を囲ひ外ハ餘り〻駒を揉つく囲ひ乃内ハ打之駒讀五挺並ハど種〻の手段有さまどを勝負ハかハるもバ深〻を樗蒲攤打ハ似かゝるく野鄙ハるべ〻俗ハ浪花ハを別行

祭將棊とく〻せる高手ハ行ぬど〻此勝敗ハ食事を忘き少〻く勝の手ハ〻るく時を高声ハ鼻歌一口淨瑠璃ハど出るを最上の樂みハるべ〻是ハ限り地口合云アリお手ハと向を銀桂町の夜店角銀一歩銀桂船子ハ力を合せ中飛のうるめ仇ハもし歩のちら〻書おも白〻頭も白〻尾長鳥まゝ待の鋼ハハど〻現ハ為つて云ものゝ此道を好ぬ人の口ハを親の死目ハも得行うまひと悔らるも此道の失ハるべ〻

7773

故軽多を淺松と云く貝覆とおハどく古く上々女謁方乃弄物ゝむべ山軽多を見立繪ハ書多るを何人の作ハ左ら祢ども中〻卑俗のせ〻物ハく〻非ざるべ〻恐ハる事のようりも拙ずるの画ハ石川五右衛門ハ恐術の図を書人こ於ハ〻祢かくくまと那〻ハ下女くる巻ハく井の水を汲図ままでも未ハ行ろんと於思ハお千代半兵衛の中ハ八百屋の婆立いる図ハどもく俗ハ近く婦女子の目ハ附易き様ハ書り古き軽多ハ謡曲の次第をフシ付ハて書画ハを仕手の姿を書〻有古きもやり故の文句を文字ハ書合せく書〻物も見たる事有唐山の水滸傳百八人を画〻物革ハく製〻札三枚斗煙草入ハ製せ〻を先年長崎の俳友より見せ〻事有珍奇物ゝ

佛像双六

雙六と古き弄物ふ〳〵て今廢りたりとそいへど時代の蒔繪志たる盤所々ふ有るを見ても以前流行せ〳〵事思ふべ〳〵公卿補任官位昇進双六有佛像地獄極樂雙六有共ふ廻り雛と混じたる有此佛像雙六の中ふ餓鬼道の苦〳〵みを書て血の池劔の山を廻りとゞハ極樂淨土ふ入く蓮臺ふ衆佛とふるを上りとす此中ふ泊りといふべき所ふ永沈(ナガシズム)として爰ふ當るバ長く沈むとの意ふく止りもとの者そ賽をふつく極樂へ行ど永沈そ其供落る事を云未來永〻奈落ふ沈むと云心ふく此双六ふ限り永沈と云詞有りて佛書經文ふ見へぬ語ふるを淨瑠璃の文句ふ〳〵やよふちんふ通ふたるのとゞふと卧す軍法冨士見西行江口の里写西の愁ふど是雙六の詞ふるを佛語と思ひ誤る物こ

道中双六

早ろくり

○今幼童のもてあそぶそ東海道五十三駅或そ都名所ふど〻廻り雙六の中ふ飛所有く東海道ふそ大井川留として一順廻る内見合有京名所ふそ嶋原出口の柳桶伏(ヲケフセ)有泊り と同じ道中双六そする條ふもバいと古きよ望の弄こと ふる生三吉双六をする條ふもバいと古きよ望の弄こと ふる〳〵

世ふ早口ぢ〳〵ものと云ハ晒落淨瑠璃の新関(シンセキ)ふく小田原外郎賣の長〳〵せ〳〵文を早口ふ弁じる事こ端歌ふ言興寺(ゴンコウジ)として有そ此早口ぢ〳〵ものを集〳〵物こ先一二をいてバ天王寺の塔々念佛十(ジウ)申〻〻ふ佛ふふるといふ是を息ふ〳〵ふ十遍いふこ客一人ふ柿一ツ客二人ふ柿二ツ是を又息ふ〳〵ふ客十人ふ柿十ヲ迄云法性寺の入道前の関白太政大臣

さん法性寺の入道前の関白大政大臣めといふとお腹を立あさるよつゝ今から法性寺の入道前の関白大政大臣さんと申ませふあア法性寺の入道前の関白大政大臣さんと是も息継ばゝ云事ゝ孫兵衛後家〳〵是を合せゝ三孫兵衛後家むつゝき長へき于もゞかみゝさ豆摘蓼粒山椒野撫子野石竹菊桐〳〵三菊桐是を合せゝ六菊桐向ふの長押の長鉾矩刀ハ誰ゞ長押の長長刀ぞ兵部ゞ屏風を刑部ふかゝせゝ刑部ゞ持ばハ刑部ゞ坊主の屏風ふゝよ殿様の長袴若殿様の長袴武具馬具三武具馬具是を合せて六武具馬具のゝ如来〳〵三のゝ如来六のゝ如来是を合せゝ十二野等如来まゞ拵きを合せゝ廿四のゝ如来蛙ひよこ〳〵三むよこ〳〵合せてむよこ〳〵六むよこ〳〵向ふの溝から

竹田機関

大道具

○鮒ちよつとによ沼ヲと書續きバ實ふ際限ゝかるべゝハテたゝはをゝ

○機関ハ竹田近江の戯場ふゝ例年春毎ふ見せ阿蘭陀人来朝の時ゝ見物させる事ゝり其頃の機関と云ハ唐児の人形ふ筆をもたせ繪の上ふ紙を置バ口上ふ隨ひ福壽ゝど の文字を書或ゝ大き形る力士乃躯木偶ふ階子差乃曲持をきす又ゝ鼓を改見せゝ箱ふ入宙ふ真紅の紐ふゝ釣口上ふまかせ天鼓乃謠ふ合せ箱の中ゝて打ゝどゝて有〳〵此機関の前藝〳〵て子供乃役者ふ狂言をさせる是を竹田狂言とゝ呼たゝ之

○世年此かゝ機関一變〳〵て小さき木偶乗たる臺有少〳〵間を置て岩山ふ樹木ゝど飾りたる臺を居て淨瑠璃又ハ唄

ふかうせ木偶の働き有て樹木折〻橋とかる木偶此上を傳ひて岩臺ふ移り放ち業を見せる事を專らとし其臺碎て檀尼鉾乃類ひ又ゝ神社の鍬り附とかゝる是らを前藝とし〻次ゝ巖島の回廊又ゝ高野山の名所或ゝ都の名所廻りとゝ号ゝ〻羅上せ下大道具を見せしも今ゝ雜波新地模堀新築地おゝ〻見世物小家をかけ見する事ふゝかりゝ

輕業放下師
細工見世物

○輕業ゝ多〻宮寺の境内ふゝ放下師乃輩往來ふ錢を乞ひ住たる物之獨樂廻しあどと手妻ふゝも今ゝ小屋を建高小屋物とゝ敬奉妓所作事ふ似せ〻見世物の第一とゝかゝゝり余り幼年の頃ゝ見せ物といへゝ駱駝猿猴人魚の干物海亀抔を云たりしが近世駱駝の後ゝ見世物の名ゝ

猿狂言、馬藝、力持
細工見世物

細工物ふ混せ〻

○文政の始天王寺外ふゝ一田庄七籠細工ふゝ涅槃像ゝ見世物とせしより羽二重細工貝細工瀬戸物細工ふど大きかる細工ものゝ見せしより果ゝ梅細工菊細工と四季の草木ゝ細工ものふかしけり余が幼年の頃ゝ雜波の鄙躅野田の藤浦江の杜若三番の萩菊ゝ高津の綿鉄天満の大源ふど四時の花ゝ相觀せしも今ゝ見世物ふ位ゝ奪ゝ〻風流日々ふ衰へたり

○以前馬藝とゝ野村柳吉女の馬のり播宮丸ふ馬ふ乘て道成寺松風此兵衛ふどの所作ゝ雜波新地夕納涼ふゝ見せたるが是も今ゝ廢りて近世樋口矢多丸ふて一変ふたり

猿の狂言女と然の角力ふど古風とかる葛籠抜ゝ始まバ

座敷影画

隣の小屋ふ壺抜釜抜の看板を出泥と清水の吹分を見すまじバ摔呑刀呑を始る歯ぶ〳〵と号て揚枝乃先ふ数十貫の重石を付〻噛上まじバ眼力とく両眼をむき出して十貫の銭をかける山産ふ歌軽多をとゝせる様ふもあるたり

木村與五郎土橋久左郎とく数百貫の重石を曲持して米の俵を足ふ履腹持中ためとく種々の曲持して関角觝此

まけじ威を張り〳〵をいつの間ふゝ廢り田舎の八幡天王の社前ふ貫目を彫たる石のみ遺まり

○昔より廢らぬ物ハ産業遊ひふ用ゐる影画あり硝子の画板を逆ふまぬく人物花鳥の働らき近江八景宮島金閣寺天神祭りなど古風ふく品よき弄びへ是も近来鳴物雛子を入写画と呼く四ツ谷怪談などをす甚下陋たり座敷手

おどけ開帳

子守歌

妻産業影画など古風ある所を愛まぐきものへ

文化中一心寺ふく嵯峨清涼寺乃出開帳有て宝物の内牛の華曼の會説僧ふ呑龍と云弁者出て大ふ群集せ里抜き

より呑龍墮落せ〳〵りおどけ開帳と号てこけもおき細工物ふく佛像の作り物して防坊陀羅経として数ぐ〳〵と自作

経文を唱ふ昔乃志道軒ふ倣ふかとあゝ孫太黒を滑稽噺

家ふ混じて道楽懺悔の顔人坊ふ類す惜ひゝ

○年〻歳〻流行ふ移り替る是世の習ひおもども古風を失

ふ〻ぬ物を幼童の子守歌へ「寐ん〳〵ころ〳〵ん寐んころ座

寐たゝか〻屋つつもて行起たゝおかめふとつくかま抜

松訊ひよふふゝ國〻の訛を出ぬもども唄の唱歌ハかゝ

らず「大坂道頓堀竹田乃芝居銭を安ても面白ひ」お市こけ

順禮歌

てふひ菜種の中でサ菜種折らぬよふふふ赤くたひ門〳〵
ぐちいさふときやお亀といふとがサ今ハ七村の庄屋の
嫁とかく古風ふまバ聞よ〳〵平の忠盛白河法皇より懐胎
の后を下さまと出生せし〳〵清盛ふまバ幼稚の時院の子〳〵と
云て育〳〵とを誠〳〵かふず思へども天神七代地神五代ふ
も子守歌いふくて叶ヲど

世ふ西國卅三所の觀音を廻るふ順禮哥として詠歌と唱ふ
物世三首何人の作とも志まず文雅ある人を是を拙と笑
へども歌のよ〳〵ふふかゝるふず古へよ里訊ひ来りて一
文不通ゝ人とおふど弟ふゝ訊ふを聞を経文を唱ふるた
ゝ海ゝ畿内近國を廻るを西國と呼ぶを東國の人乃詞ふ
〳〵第二番紀三井寺の歌ふふるさゝを遥ゝ爰ふ紀三井

潮来節

伊勢音頭

寺花の都も近くふるらんとを関東の人乃詠ふるべ〳〵と
云人も有里秩父坂東の外ふと詠歌といふ物有まども順
禮の唄ゝ歌ふから順礼歌を西國卅三所ふ限るべ〳〵たと
へ歌を連続せゞとを順礼歌ハ古風の訊ひ物と悟まバ間
違乃ゝゞ

○角力取節といへバおゝせおせ〳〵下の関迄ハと訊ひ新浮ぶ
〳〵といへバ新浮出さ時や泪で出たゞ今ハにがさの風を
いや潮来ぶ〳〵と聞とまきいかふる古風ふる唄もやと余
香島香取を遊歴の時扱子ふ遊びくもと歌を聞ふ門大きふ
陽堂の質流もいくら待ても受ゑゞふ乃ヤツトセヨイ〳〵此唱歌
ゝと聞て愛想盡たり

伊勢街道の音頭といへバ大坂出〳〵から早玉造笠を買ふ

ら深江ゞ名所深江菅笠ハ古き名物ふ〳〵て万葉ふ古歌有り
余ゞ著述綺語文草ふ出す　奈良より青越山田松坂津椋本窪田関より大津
迄宿場驛ふ音頭ゆきども委く訊ふ者ふ〳〵よふ〳〵伊
勢乃豊久野銭懸松よ下略坂をてる〳〵鈴鹿を曇る下略ふど人
口ふ唱へり

馬士哥を賀りやナアエまくる程ナアエ長持や輕ひ富士のナアエ
白雪ア旭で解くるナヨヽ娘ナア嶋田ハ寐てとゝるナヨヽそふ
どう〳〵是を才領哥とも云木曽街道の馬士ゞ訊ふを小諸
節又追分節とも云又訊ひ方一流有木曽ふ桟大田の渡〳〵
和田と碓井ゞあけやよかろふど訊へり

○船哥といへを将軍家浦船法成の時又を大名の住座船ふ
訊ふてめでと〳〵の和歌松きまよヽ〳〵ふど謠ふふど古

船歌
船頭歌

陸士唄

風を遺せり小豆島の船頭とを妥をとふべ屋とふア船頭唄
ふと〳〵ゞ妥を須磨の浦敦盛の石塔ヨイ〳〵と淀川下船ふ
謠ふと睡を誘ふよき伽ふるべ〳〵

田舎ふを臼挽哥田植唄を其國々の訛有りて以と風流ふ
る物から翁も奥の田植哥とほめ東山もよぶまぬ物や哥
おかをとを詠せを

○都會ふ名のみ傳ふるを薩ゞぶ〳〵豊後ぶ〳〵ふどゆて其餘
國名を呼ぶを受領せ〳〵太夫の人名多く京摂の宮薗宮古
路國太夫東都の市中加東肥前ぶ〳〵ふど今ハ廢りて謠ふ
とのふ〳〵

○淨瑠璃の東越前西筑後と今ハ混ドて義太夫と惣名ふ呼
冷泉表具を節の名とふり東都ふ常磐津富本清元とて中

臼挽田植歌

豊後節

淨瑠璃節

734

ちんかれ節

奥より發り是と惣名を淨瑠璃と唱へり京摂ふてゝ是を
其後と云是ら委敷を採年代記竹豊故事ふ有常盤津の事
ハ近世出版の書聲曲類纂ふ出たるを略して爰ふもらせ
ず

歌祭文説經も古き物ふく聞く鬼門の角を爰とお染久松
の頃ハ添行せしものあるべし説經かゝるとして今を節ふ
遺りてちよぼくれちんがれふ日ぐちちんがれハふ春紙治
の帝盡し鎌倉山の佐野の隱を家ふのゝ語りて女盗賊笠松
峠尾張源内明石鉄炮順禮殺ハ鬼山峠ふどちんがれぶし廢りて
聞事を得ず六歌仙の長撰法師の唱哥ふヤレ〳〵愚僧ぶ住
家を京の巽の世を宇治山といハ人を云也下略是のみ幼女
の訊ひ物ふ遺れり

娘道成寺

歌哥園

○娘道成寺の唱哥ハ元祖中村慶子始て今ふ廢せぶ是もと
一ツの唱哥ふぶ昔よりふしのよふしき文の佳ふる物
を此時集めく並べたる物ゝふつゝり情氣せまゝ樓との
條を三勝半七長町の場の院本ふ有てお園ぶさを望の文
句ゝかく當り文句のみ類聚ふせし物ゆへ此唱哥ふ添削
ふふとゝふるべし

○歌景園として京摂の撿校達調端哥の作者を誰々と表德を
ふふるせし書有中ふも大石浮赤穂宰人内藏助雅名晋其角元祿俳人柳里
恭柳沢權大夫ふの作せし物數文ふ今時無學の人の訊ふ物から
語路の違ひふ歌葉の誤りを論せぶ弦もし訊ひもする物
から譯ふき事を訊ふさを作調の故人達今弦所謳ふ所を
聞ぶ歌ぶし悲しむべし

雪の唱歌

○近世北部地ふく奇三弦ふ大関とゝ関脇とゝ云るゝ妙々乃者九州地へ遊歴し糸竹を好める人の座敷へ請招せゝ主の好を聞くふ雪を望まる点する人を罪深くと嗟ふ者もバ主大ふ感ゝて拾もさゝ人聞ぢよし道浪華ふ名を得たる人ゝと雪のみ弦弾て数金を恵まもたりと道にの好人をゝ有る物ゝ遠國片鄙の人ゝありとて侮るべからぢ点しき人を科乃望とを迷ふ身からを見めべからぢ待宵農朝をかもつゝ点乃情ゝ悪きる人を罪深かまさもバとて袖をかぎしてて夫しやといふてとハ実ふ古まて無ゝふぢ片敷袖を褄と見しゝ心ふく謡ふべし紫女清女ゞ古き物語のみやび詞を婦女子ふ謡ます物から齟語のみふく聴もうるさし

以下前文と意義同世す

分任

青葉の解

○青葉と云唱奇々六條の廓乃比何都とて盲人有て日ゝ廓中へ出稽古ふ行勾當ふふるべき官金ふくて苦しむ何基の抱へ女青葉太夫も年〻親方ふ借財のみ多くふる歎き の余り此盲人と密ふ契り共ふ死ふんと廓を抜け出樫木原より丹波地さして走りしゞ女道ふく心更りゝふ勤の身乃苦しきとく名もふき盲人と情死せん事好まし からず夜明ぬうちふ返るふふりゝと情ふくと盲人を捨て廓へ返まり盲人かゝる事と露ふく孫バ夜盛山中ふく青葉くと呼ども答へず良く夜明〻もバ往来の人ふ道を尋孫京ふ帰り密ふ青葉が事を問へバかゝらぢ廓ふ居ると聞怒りふ堪兼しかど盲人の詮方乃く其薄情を演て作まる奇ゝふ々情ふの仕業やふさのみ人ふをつらかふで悲し

謡曲を唱歌にす

綾鶴

ミの泪まなたふ〳〵ぎる〳〵青葉〳〵と呼べども濱の濱乃
玄風中略聲をかゞ里をよとなかゞ里の便もがあと恨ぶくぶ
哀をなる吐寄廓中ふえやま〳〵青葉を大ふ迷惑〳〵其行方
をたゞすと云へり

○端寄を謡曲より出〳〵もの数多有海士八嶋鉄輪放下僧葵
の上岳の音を松虫より出〳〵西行橋石橋邯鄲の類ひ皆謡
曲の文を潤色せ〳〵ものゝ道成寺を語りを一直せ〳〵もの
ゝ東都山田撿校を琴唄ふ熊野を其侍ふ調ぶと聞兼てさ
乃琴曲を聞〳〵思ふのミふ〳〵今ふ縁あ〳〵ふと遣り惜〳〵

○綾鶴といへる唱寄を新町槌屋の綾鶴といへる太夫放庇
せる事を訊ひ物ふ作らもも音を籔世乃浮世ふ響くと賦せ
ま鳥辺山と時雨の松を心中道行の文のみふ〳〵情死せ〳〵

鈎簾の子

ふ〳〵ぶ依〳〵祝義乃席ふも弦けり是ふも席ふよりて嫌
忌ふ〳〵新艘船氣の酒席ふ八島を弦かず袖香炉ハもと
追善ふ作せ〳〵寄ゆへ弦初又を婚姻振舞の席ふてを弦ず
ともあるべきものふも

鈎簾の戸の唱寄ふ辞に思案の外乃誘ふ水底ゞ浮世ゞ浮
世ゞ底ゞ下略此訊ひ出〳〵の文句を由平の發句あり此後乙
由の發句ふ辞やゝふを向ふの岸ふ咲くと云ハ馴染重ね〳〵
遊女と中を裂き田舎乃親類ふ預けらも〳〵うちも女の事
のみ案じて一年ぞかりの年月を送る親もとよ迎ひ来
つ〳〵ふゞ〳〵の勘氣をゆるさも吸宅のよ洲ふびふ親類と
をふ芝居見物ふ行機嫌ふ居て向ふの機嫌を見もバ死ね死
ふふと言かゞせ〳〵女客の膝ふもゝを余所の見る目も恥

弾 弾 弾 弾 弾

7338

皇都午睡

中

げ千話の躰乙由ハ遠目ふ是を見て賣女の薄情を憎めど
も今更かへらぬ人の心の飛鳥川をかたち色情のかさま
しきを悟り此句を扇子ふ書て向ふ桟敷の女ゞもとへもた
せ遣ゞ女鉄面皮ある身ふもきすゞ恥かしくや有
ゝん桟敷を辷り出たるとゝ鈎簾の戸乃唱哥其比の口調
ふして形まりと云

皇都午睡上の巻 終

739

皇都午睡中之巻

目録次

一萬歳の唱哥
一女達ゞの畫賛
一正五九月
一孫の手竹奴
一粹と通と程乃鮮
一文七元結
一八百屋お七
一三井の家景系
一鼓為帽子裝束
一七艸蕣を囃詞
一男色影間
一松蟲鈴蟲
一金岸の發句
一曾呂利の畫賛
一懸鈎引墨
一妓王妓女
一假面打の作名
一扇子の指方

浪花西澤綺語堂記

一卅六町一里
一伏見の里の考
一庖丁刀
一兵庫の蕪
一二月堂の茶釜責
一飲酒十徳夏日七快
一鷹掌
一向嶋乃狸囃子
一蝶番
一折助亡六
一水尾盡
一宗鑑の物數奇

一鯉鮒の地名
一甑落月の客
一燧袋
一定家家隆
一遊女町の街
一肖柏ノ貫賊ハ逢
一太平の腹鼓
一山科のノ貫
一陶淵明の菊
一文室の石
一無藝の大食
一竊香

一金春の太鼓
一小人の閑居
一瓢金者
一醫者の看板
一杜鵑の蘓生
一木曽の猿酒
一鵙の草莖
一蛸と蠅ハ灸をすへる
一熊野の大樹
一閑間の御遊
一六憎
一謳曲乃發明

一宗禪の笛
一隱居一枚起請
一木端の火
一煮染
一雀の隼人
一飛彈の篠魚
一鵙鮨
一鯖の鮓
一北野の連歌
一茶人への風諫
一鍋磨の搗染
一太郎餘一郎

一曽我兄弟六代御前
一慶庵肝煎
一上米刎る
一反物麁物
一手枕の歌
一板倉の明断
一梓巫子
一安德帝忌
一兜軍記
一辻能狼籍

八十五条

一猪口太郎
一四方田四方八面
一七里ハつむい
一日披露
一燈臺元暗
一富士の裾野
一日想觀
一大雅堂霞樵
一天明京大火

791

七艸薺を囃詞

皇都午睡中之巻

萬歳の唱歌

○萬歳ハ正月十四日男踏歌十六日を女踏歌とゝ大内ふゝ節會有殿上地下乃輩催馬樂をうゝひ舞かゝるよを発り末の代ふ千秋萬歳といひゝ餘風遺きり今江戸ふてハ参河萬歳京摂ふゝ大和萬歳とゝ早春ふ来きり唱歌ハ無住國師の作のよゝ云へり

○正月七日七種乃若菜を囃すハ都鄙とゝふする業ゝ六日乃夜七種を叩くもやゝ詞ふ七草薺唐土乃鳥と日本乃鳥と渡らぬ先ふ七草薺と云ゝ七度叩て四十九敲ゝ是ゝ七曜九曜廿八宿五星と合せゝ四十九の星を祀ありと有

女達磨の讃

職の人申さまし〳〵と我〳〵

○何九年苦界十年花衣と云祇空乃句ゐる女達磨と云畫ハ英一蝶書始〳〵と云こハ新吉原中近江屋の抱ふ半太夫と云遊女有〳〵ゞ後ふ大傳馬町の商人へ縁付〴〵其家ふ朋友集りて物語の序ふ達磨の九年面壁の事言出るるふかの半太夫聞て九年の面壁乃座禪ハ何程乃ちとかハ浮女乃身の上ふ於て数日もの日乃心遣ひふ畫夜店をそるふと面壁ふかゝる事ふし達磨ゝ九年我〳〵ゞ苦界ゝ十年ゝ比ハ達磨かゝ悟道ふ成りとく笑ひ事ふと我此話を一蝶ゞ聞〴〵やゞて半身の達磨を傾城の顔ふ繪き成るゞ世上ふもやり女達磨乃源と我市川柏莚ゞ畫讃ふ於てさんろ是ふ於ゝんハ誰と前書〳〵て九年毋と粹よりいで〳〵ゐま

男色影間

みゝ形といふ句をよみ成りしと我〳〵

○男色ハもと天理ふ於むゝる邪淫ふ〴〵在家出家の分ふく皆いま〳〵むゝ禁し大明律ふ云以陰莖放入人之糞門者杖一百此刑の放とゝ無理ふと云事無理業をすゝバ杖一百と乃義若衆ハ男色を賣相對ゝゝバ杖ふ不及ゝ中富郎祖慶子富十郎と云男色暫時を金千疋の價を以〴〵春宵を壓たり暫時ふ千疋を臭淵ふ投る者必杖一千と淡々ゝ云り俳諧師半時庵

近世迄東都ふ〴〵葭町京ふ宮川町浪花坂町ふ有て若衆野郎新部子世外子影間抔多名有成長ふ及びくゝ俳優乃若女形とゐる娘方の内を新部子又制外子とゝ云〴〵いまど舞臺ふ出ぬを影間といふ他國を飛めぐるを飛子とゝ呼ぶ〳〵

正五九月

松虫鈴虫

孫の手竹奴

○正五九月を三齋月三長月一切諸佛神通月三神変月共いひくもと佛家の詞ふを正五九月を何事ふも忌〻屠殺を禁ずるを今世俗祝ひ月と心得たるハ僻事ふるべし

○松蟲乃鳴聲を知呂林古呂林といひ鈴蟲の鳴聲ハ鈴を振うる如く里〻林里〻林と云世俗蟲の名を取違へ松虫を鈴虫と云鈴虫を松虫と呼ふ〻んと云り松虫の音を松風の凛〻と響ふちんちろりと鳴を鈴虫ふり法師のふる鈴の音ふ似たもバふり

○痒を抓の具を孫の手といへど麻姑の手とて麻姑と云仙人の手の爪を鳥の爪の如く形もバ皆痒を抓ふまし〻と云又一名を木童子と云夏日閑具ふ用る抱籠を竹婦人とも竹奴とも云的對と云べし

金岸の発句

粹と通と程の解

曽呂利の書画賛

793

○彼岸と云をもと佛語ふ〻到彼岸と云事〻春秋分の名と一暦ふ書くなへる事とも形を抜晋子其角石摺の句帖ふ金の岸とうさひ侍もど金岸の二字諸經ふふ一さふでを渡るかの岸と訊ふ時をたが祢とも彼岸ふ至る形るべし

と前書して渡し船武士をたゞ乗る彼岸哉此帖の跋ふ元禄十丁丑年重九應山其尾需而温飽醉裏漫投毫晋其角と有俳諧師の墨帖珍らしれもバ爰ふ出せり

○遊里ふすゝと云を推量する心ふ〻粹と書万事ふ委敷人と云義ふり東都ふ〻通と云も万事ふ通達する義あり近世又程と呼ふ有り程が結ひ程を賣る形ど云出せを粹通とお形ど所よを云出せ〻ふらん

○曽呂利新左衛門自画賛と云との世事百談ふ縮寫せを上

文七元結

懸鈎引墨

々様いかゝ有る
倉や勢んきなちゝくゝくの山ゝ泳ぎと有珍らしゝもバ爰
ふ出す

○文七元結とて東都ふゝ専ら用ひるゝ彼浪花の五雁金の侠士雁金文七を賞ゞて強きを云ふと思ふふ文七をもと元結ふ製す杉原紙の乍乃名ふして至つゝ古くよゞ云よ
し隱し賣女を地獄と云ゝ清左ゑつと云者始しめ箱根の地獄清左ゑつふ思ひよせ地獄と云ちよき船ゝ船頭の長吉を約語せし事ゝ余が綺語文草ふ委しゝもバ爰ふ略す

○詩歌連俳ふ點を加へ又回文乃書面ふも點を懸る是を點と云ゝ當らず懸鈎とも引墨ともいへり懸鈎とゝ故のか

八百屋お七

たち翠黛の鈎の如くゝ〜すべしとゝ又引墨とゝメタ書狀のおゞめふ書をいふと歟

○八百屋お七い湯島の天滿宮へ松竹梅乃額を自書て奉納ふたりと世ふ云傳ふもゞど実い谷中感應寺の祖師堂ふ常在吳鷲山法華最第一と云額をお七が十一歳の時書て延宝四年辰春二月と落款せしを傳へ訛きり
扨罪を得し事い十六歳乃事ふて天和二年戌二月ゝ葬所を駒込吉祥寺といへど実い小石川指谷町南縁山圓泉寺といふ天台宗の寺ゝお七が法名い秋月妙榮天和二戌三月廿九日と石碑ふ彫ゞ天和笑委集と云書ふお七が事詳ふ印せり

妓王妓女

○城州嵯峨往生院の開山妓王妓女ゝ江州野洲郡永原村の

三井の家系

北中北村の出所ハ〻恵那九郎時長の娘ニ妓王法尼の往生を建久元年七月十五日と中北村の妓王堂ハ印せり盛衰記ハよりバ妓王妓女ガ遁世を治承四年ハて妓王廿一歳妓女十九歳閑四十七佛十七と有然るバ建久元年を妓王卅一歳ニ妓女廿九閑五十七佛廿七ハ誤るべし往生院ハ有る四人の木像ハ古作とを見へず中興三響利貞比丘尼宝永年中ハ彫刻させしものなるべし

○三井越後守源高安を越後守高次乃男ハ〻伊勢の國安濃郡一色村ハ住し高安ハ男子四人有長子三郎助高時次男治郎兵衛某三男傳藏某四男則兵衛高俊ニ高俊の長男三郎左衛門俊貞京ハ出て賈ハ服し三条室町ハ住す四男八郎兵衛高利も亦京ハ出て新町角ハ住す高利ハ男子十三人

假面打の作名

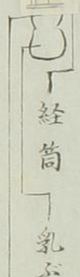
女子五人有勢州松坂ハ及京江戸ハ三井と呼越後屋八郎右衛門と有るを此高利ハ〻世産を治る術ハ妙を得たるなるべし然るハ越後の国國松坂ハ〻虚家ハ宿し庭ハ三ツの井戸より金銀錢の精出く往事を告る回國是より三井と呼越後屋と名乗るを鼻祖とする歟どハ後人出る使の説をもハけし車ハく論ずるハ足らぬと志るべし

○假面工ハ日光弥勒夜叉と云を承平元年ハ翁三番叟を作次を山城の住人文三と云長元四年ハ没す次を大和竹田住小牛清充永德二年ハ没す次を越前大野住赤鶴吉成法名を一透平安城四条住龍右衛門志重政應永十九ハ没す次を越中日氷宗忠氷見と許も稱せず次ハ和泉貝塚住越智吉丹次ハ鎌倉住德若忠政と云寛正二年ハ没す次ハ三光法師もと越前平泉寺の住僧のち叡山ハ移り住是出目助左衛ハつが父ニと

かや日光より三光迄を十作と云又実作とも云又越前一乗住福来正友暦應四年没ス平安城住増阿弥久次文明十一年没ス徳若春若ハ忠政の甥ふゝ鎌倉ふ住ス文亀元年没ス大和住人石翁兵衛享禄四年ニ没ス室来千種と此六人を六作と稱す出目助左衛門ハ大永七年没ス産ス元和二年九十歳ふゝ没ス其五代を洞雲康隆八代を洞白正徳五年ニ没ス九代を洞水満喬十代を洞雲満志と云今ハ十四五代ふも當るよ

鼓烏帽子裝束

○鼓の胴の名所



「経筒」「乳ぶくら」「如孤」といふと云

○烏帽子の前へ靡たるハ平礼うゝ波へ那びきたるを梨子打と云裝束の袖ふ忘だをとるを搔といふゝ古き物語乃書に袖搔合せとゝるを是を云ゝ

扇の指方

○扇子を隨身するふハ常ふを手ふ持ゝ懐中乃時を柄の方を懐中へさゝ入るゝ右の方の腰ふさゝを笛指と云後へ指を矢筈指と云左の腰ふさゝを那き事ありと或有職の人申さゝゝと侍

三十六町一里

○卅六町を一里とする事を鯉乃鱗尾頭かゝゝ卅六枚有鯉を里那るとバ是ふかたゝゝ卅六町を一里とするとを附會の説ゝ天ふ廿八宿有地ふ卅六禽有地霊の数を表ゝて卅六町を一里とするふや又周易ふ一三五七九を天の陽数ゝ二四六八十を地の陰数とす六を地数乃最中那きバ地数ふ用ゐ六尺を一間とゝ六間を一段ゝ六十間を一町ゝ六々の数三十六町を一里とす

鯉鮒の地名

○川魚ふ鯉鱒鮒といへを鯉を司ふゝて三都ふ表ゝ駿府甲府

伏見の里の考

甑落月の客

乃府中の符を書く鰐ふ當るうこハ余が杜撰の癖考ふと
志ふ孫ど是ふつぐきく津と文字を書所ハ蔡邕の稱ふる
べし摂津安濃津(藝州)大津(江州)皆入津乃賑ひを賞ず草津(江州上州)駿河
那どハ入津の地那ら孫ど旅人の往来多きを賞ず沼津
那ども是ふつぐ識者ふあじすべし

○城州乃伏見を平安城を遙ふ伏拜の和訓ふして大和菅原
伏見が岡も那らの都乃項帝都の方を拜せし所之雅波乃
伏見の里を今の三津寺八幡の辺ふく高倉の帝都を伏拜
し所之と云り中仙道の伏見を伊勢両宮の遙拜所ら八幡
乃ふし拜ミ那どく古書ふ見へたるも此類ふるべし

○禁中ふく月水のつる女を手那しと云と彼御調度ふ手を
ふるゝ事あらざもバ手有てもふき如くふもバかくいふ

燧袋 797

庖丁刀

ふや世俗ふ手桶(テヲケ)番と云も穢を洗ひ通しふすると云心
ら侍客と云を須磨の俚言ふく月の侍客と云謎ふるよし
因ふ云徒然草ふ出たる侍産乃時甑落(コシキオト)と云を侍胞衣乃
滞りし時の呪と有も腰氣(コシケ)落しと云事之東都ふて手ふし
を猿猴坊とそいかふる所よ呼ぶら其謂を志ふず

○丁の字をよぼろと訓ドて下部の者の事之仕丁使丁の類
之火丁と云を一隊の飯をかしく者之俗ふ飯焚と云又庖
厨の下部を庖丁と云其者の料理ふ用ある刀を庖丁刀(ホウテウガタナ)と
云俗ふ庖丁とのみ云ら又料理する事をもいふしへより
庖丁と云ハ古き物語の書ふも見へたり

○燧袋を三角ふ縫もの之三角を火の形之火打ハ旅行ふを
必らず持行又餞ふも送りし物之神事火を改るふよりて

穢れたる火なりとも燧を用ひ火を打かけて清浄にする専用の物なり又紙服(カミコ)に火打と云物を付燧袋乃形ハ三角なる物ゆへ其所容を摹せしなるべし

兵庫の蕪

○慈鎮和尚蕪菜を貰ひにやられたる折の狂哥に武士の射るやひやうづの蕪菜をよろひきためて十五束らくあらむ屋うづの蕪とは兵津は土佐の地名にて蕪菜乃佳なる所のよしヒヤウズは矢の辞なりきつしと立ちとと當るへいふつと射るなど皆箭の詞なり

定家家隆

○或人話の序に定家(サダイエ)家隆(イエタカ)と云ことのなくて定家(テイカ)家隆(カリウ)とのみ稱するハ何のゆへぞと問たらしき老人の答に古人を崇るにまかせて名を称せず夫ゆへ訓を除て音を用といへり然らバ何とて人丸(ジングワン)赤人(シヤクジン)とは称せざるやといへバ老人答るに詞なかりし迚跡にて一座腹をかゝへぬ

二月堂の茶釜賣

○奈良の二月堂にて昔は青竹にて麁末なる茶釜を賣り老若男女詣たる印として求かへり是をもて茶を立客をもてなすことと南都の風なりしを今ハ此茶釜絶てなし青竹乃茶釜の麁なるに茶を立て老を養ふことならはせとせしを今は價貴き器にて茶をして心を労し壽を縮る人少からず昔の人今の人と懸隔ある事かくの如し

遊女町の街

○遊女町をくつわと云は文字に亡八と書て所謂孝悌忠信禮義廉耻の道を亡ふよりの名なりと説あれど又一説に昔吉原の淺草に移されぬ前は今の傳馬町に廓を構へ丸く堀をほりて其中に十文字に街をつけ是を倡家となし廻りに茶屋を置しとぞ中の通りを十文字にしたるゆへ街(クルワ)町(マチ)

飲酒の十徳夏日七快

肖柏ノ貫賊に逢

㊥の称是より出ると此説の方近からん故

○飲酒乃十徳を禮を正し勞をいとひ憂を忘れ欝をむらき氣を廻らし病をさけ毒を解し人と親しみ縁を結び人毒を延ぶ又夏日の七快とは湯浴して髪を梳る掃除して打水あたる枕の紙を新ふあたる雨晴て月の出たる水を隔く燈火の寫る浅き流をふ魚の浮みたる月のさし入る共ふ柳里恭の詞なりおもしろき文へ

○壮丹花肖柏ハ西山ふ居らるし時百金を賊ふ奪てまこ貫ハ山科の草庵ふく茶器を売たる銭七十貫を盗人ふ取らまたなり盗賊を金銀と衣服を奪ふ物なまバ在俗の人を格別ふして世を捨たる詫人花美乃衣類と金銀を儲ふべからず家の調度もあるだけを兼ふるをよしとす是賊を防

鷹掌

がん弟一乃用意なるべし

○昔鷹掌として公家衆禁野片野辺ふ出らるゝ園とを参議正三位基氏卿の流を云坊門とを権大納言宗通卿の流を云楊梅とを太宰大貳季行卿の流を但園の基氏卿ハ弓馬ふ達し鷹犬好ミ其妙を得く此流を持明院と云鷹犬の古実を記して十巻書と云桊下毛両家を隨身の鷹匠あり此藝を百濟の酒君より傳を文安四年の頃波多野豊後守尚政と云沛所乃鷹飼口訣を記し一色内藏助親行ふ傳ふ又蒙求臂鷹往来乃作者松田左馬助元藤法名宗岑是を下毛野武氏の弟子と云又百濟の米光由光の藝を傳へを出羽守源齊頼無双の鷹飼ふく其藝武家ふ傳なり信濃國諏訪乃贄鷹下野國宇都宮乃贄鷹等の徒皆此齊頼の流を相承

す祢津神平が流を諏訪の贄鷹の派ふて祢津左京つ尉道直乃子を神平貞直其子神平宗直其子神平宗道其子神平敦宗其子神平宗光大官新蔵人と云酒君の流と米光由光の流と祢津の家ふ一統ー相承すと云宗光十五代美濃守信直入道ーて松鶴軒常安此弟子ふ屋代越中守吉田多右エ門家元熱田の鷹飼伊藤清六小笠原某羽根田某横澤某荒井豊前守平野道伯等皆新得發明する所有て各一家せふ是鷹飼流派の大概ふ

太平の腹鼓

○狐を奸智有て疑ひ多き故ふ彼が邪ふ心がめる性を忌く人愛せば狸を癡鈍ふーて暗愚ふもバ人も憎まぐ余先年東都新坊ふ寓居の頃夜陰ふ及びさと面白く太鼓を打音一二町聚ふく聞へり戯場町葺や町堺町を云迄を八町有て鳴物聞ふ屋このゝ又浪華の如く市中ふく鳴物囃子をふす如き

向島の猩囃子

を彼地ハ禁せる物から影間茶屋八丁堀ニ有今ハ廢ーてふー ふく茶番狂言ふく有かと思ふふ毎晩〳〵深更ふ及び聞ふるゆへ或日溪齋英泉画工茅場町植木店ニ住む方ふく此話ふ及ぶ英泉云是狸囃子とて九鬼丹波守屋敷新坊中の格東話の屋敷ふく狸乃囃すこ屋敷の内ふく聞てと屋敷ふ一二丁隔ふく聞ふること太平の民を鼓腹すと古語ふもいへゞ狸囃子ハ則腹鼓ふく目出度例ふや

此後六ヶ年めふ又東都へ行浅草ふ住ふ戯場ハ薄暮ふ果ふて江戸ふて芝居の果るを云ふと云ふり深更ふ太鼓聞ふる様ふー吉原十丁余の道芝居町三丁大手八丁有ふーて中ニ聞ふる筈ふー其上川を隔て隔田川之東ふ聞ゆ向島ニ小梅牛嶋寺島ふふく葛西葛飾郡ふ東西有て云之の百姓ふもば太鼓の囃子深更ふ聞ふん様ふーと怪ーみ

山科の丿貫

乍其音を友〳〵て寐る事とやちりぬ是やとや狸囃子と
と云又此近在ふ廿五座とり唱へ〳〵田舎の神事祭禮ふや
社頭ふ家躰を組古雅ふる假面を着て壬生狂言ふ似たる
事をす其誓古を在しの若き者晴雨を論ぜず夜ふ至まバ
さらへるを向ふ嶋の狸囃子と唱ふと紫ハ町堀を市中ふ
まバ真の狸の業へ向ふ嶋を百姓の囃せる形とんと思ひ
ぬ土地ふ住ものを怪しむ事ふし

○山科の隠士ノ貫ハ利休と茶道を爭ひ利休が媚ひて炎
人ふ寵せらるを諂友き事を常ふ怒り利休人の盛ふるを知
〳〵其衰ふる所を志ふず情欲を限りひて知まバ身を全う
し知らざるバ禍を招ゝり蓮亂ハ蝸牛ふひと〳〵く家を洛
中ふ曳我を蟹ふ似て他のほとる穴ふ宿せり暫しの生涯

301

陶淵明の菊

蝶番

を名利の爲ふ苦しむべきやと丿貫世を終るの年自書た
る短冊を買得く灰とぶし風雅を身とこもふ終るとて没
し如無量居士と号ふ

○葉を双びく離も如物ふ用ふ蝶ハ双び飛ふ鰈ハ双び行褶
と左右の手を通し凡蝶と左右を打合すものへ鍔を大約
一ツハ打ば上下ふ二ツ打てバ蝶番ひと成りて一
ツうつおりハ鍔と計呼事ふ〻ん

○陶淵明ハ菊を翫ぶ祖乃様ふ思ふハ非ずべし菊を東籬
の下ふ採とりもバ摘採て藥用食用ふ充らもしふて桓景
が重陽ふ高きふ登りて呑む酒ふ漬す類ひ成べし元稹が
衆華の中ふ偏ふ菊を愛するふ〻ら〻此花開きく後更ふ
花ふしといへるもとふ賞するふ〻ら〻ぬを云り菊を花

一ノ

301

山科のノ貫

作ら其音を友〳〵て寐る事とをちりぬ是やをの狸囃子と云又此近在ふ廿五座とり唱へ〳〵田舎の神事祭禮ふを社頭ふ家躰を俎古雅ふる假面を著て壬生狂言ふ似たる事をすさらへるを向ふ嶋の狸囃子と唱ふと紫ハ町堀を市中ふきバ真の狸の業と向ふ嶋を百姓の囃せる歟ふんと思ひぬ土地ふ住ものを怪しむ事ふし

○山科の隱士ノ貫ハ利休と茶道を爭ひ利休が媚ひて戈人ふ寵せふを諂ふき事を常ふ怒り利休人の盛ふるを知る其衰ふる所を志ふず情欲を限りひを知きバ身を全うし知らざるバ禍を招ぎり蓮亂ハ蝸牛ふひとしく家を洛中ふ曳我を蟹ふ似て他のほとる穴ふ宿せり暫しの生涯

蝶番

陶淵明の菊

を名利の爲ふ苦しむべきやとノ貫世を終るの年自書たる短冊を買得て友と歟し風雅を身とこもふ終るとて没しぬ無量居士と号ふ

○葉々双びて離も如物ふ用ふ蝶ハ双び飛ふ鰈ハ双び行襍と左右の手を通し凡蝶と左右を打合すものへ鍱を大約一ッハ打ば上下ふ二ッ打てバ蝶番ひと成りて一ッうつおりハ鍱と計呼事ふ成ん

帳

○陶淵明ハ菊を翫ぶ祖乃樣ふ思ふハ非歟るべし菊を東籬の下ふ採とりてバ摘採て藥用食用ふ充らもしふて桓景が重陽ふ高きふ登りて呑む酒ふ漬す類ひ成べし元稹が衆華の中ふ偏ふ菊を愛するふ向ふ比此花開きて後更ふ花ふしといへるもたとふ賞するふ向ふ歟を云り菊を花

折助亡六

の隠逸ふる物と茂叔のいつるも唯叢中ふ交く見ゆるを哀と思ふ那るべし今世乃如く根を分ち一莖數十の金ふ代るハ藝花の主要せるもの之花も隠逸あふ那ぞ戯ぶ人と隠者ありぞ和名ふをからよもぎといひ又翁草とも異名するを

○東都ふく武家ふ仕ふる僕を折助と云ハ折助と呼ぶ者ハ全ての通称那るべし椿乃花ふ詭助の名ハるが如し又一名ガヱンと云を寒の冬も裕一点ふく苦ふあふぬを火焔ふもあるが如しと云心ふやグワヱンを詰てガヱンと云ハ東都の俗語之京摂ふく是をモウロクと云是も仁義禮智忠孝の六を亡といふ心ふく亡六あふんとも云又一説ふ城外へ用ふ出て暮六ッ迄ふ返らずバ門の出入かあるを

文室の石

水尾尽

無藝の大食

ねバもう六ッが鳴つたらゝと耳を立るゆへもう六之といつるハ少しく滑稽者の助言あるべし

湖上李笠翁（李漁）の語ふ机辺乃翫物文室の類ひを清煩惱といつり清の字下し得を面白しと閑田子蒿蹊ハ申さまし

○和歌ふ詠ずるみをはくし常ふ水を濁りくを清て唱ふるを非之是を水尾串といふ事あるしバ水ハ助字成べしさふバ水を清くを濁くみを水ぐゝと呼を音便あふんと云り

○世ふ言行ふ飾ある者を見えをすると譏をども見えを先禮の端之見へあきを不禮ある物之人を自負するをもて吾人ともふ勤るを自負も亦道具之自負ふも見えふも差別あるべし或人大酒を好東坡ハ竹ふ々まバ人をして俗

ぶらしむるといへども我を劉伯倫李太白ふ倣ひ〻一生此世を過さんと思へりとて只酒飲事を一藝と自慢して外ふ何の能もふし能ふしに男ゞ大酒志たりとも何もおとしろき人とをすべかふず劉伯倫李太白ハ唐士ふして天下を治ぐき程の器量ある人あるとゞも佞人上ふ有て賢者を退くる世ふあるとバ用ひらるを知り自避て其國を去る時を憂ふる心より欲息しを忘んとて飲酒あるとバ天下の酒客ともゞふべし只酒好ふて大酒する族を生醉の糟喰ひあり大酒大食を多く無藝の人ふ有り慎しむべし

○古田織部山崎宗鑑ゞ宅へ茶の湯ふ行き暮ふ及迄語らを打くつろぎ寐轉びあどせしまゝ侍裾へ小袖ふてもかゝ上よといひしまゝ石遣ひの者廣蓋ふ小袖をのせて

竊香

織部殿ふきせかゝしふと名木の香すぐれて匂ひしを織部殿申さるゝふを宗鑑の物ずき是ふくらべ香をよき木程稀ふる故以かふと少ゞく大切ふ聞ふて志其誉も有此よき木をか様ふ沢山ふくめらせても香の意ふ叶ずとゝ以ものとし

○或人常ふ坊主共ふ空炷の伽羅をとゝのせらるゝ時四角ふ割て削屑を坊主共ゞ配當志々る事常之或時新參の小姓ふ此木をゝとよと仰らるれバ御用始として次ふ出四角ふ割て四面の割屑微塵も散さゞ割たる木の側ふ乗せゝ沸前へ出しゝれバ法機嫌損じていつも坊主共ゞ割て出しとをかゝを蘿芥の如くむさく汚しき仕方ゝ坊主共割直せとゝる坊主例の如く割屑を配當して美しき所を

金春の太鼓

かゞを差上げられバ是こ甚と仰有て暫思惟して伽の人を召かばうゞふも違ふ物欲と尋給ひられバ伽医者申々るハ坊主衆ゟ屑を包ミ〻次〻この法用ふ為べき段方あふんに新赤ゟ律義真法ふ屑まで差出しゟ事お次法用の心いまゞ到らざるゝと申ふ笑ひせぬひ新赤を召て坊主共ハ屑を盗むあ甚ゟ伽ん古人も竊香と書玉侍ゟ責るふ不及我ゟゆほうゝと法機嫌共ふ宜しかゞゝるとゝ

○金春三郎左衛門ゟ太鼓の上手ゝしが右の目ゟ赤かゞしゝ面ゝ出端見ふくゝ夫面ゝ自然と橋掛りの方へ顔曲りしゝとゝ其弟子真似て皆顔曲〻打觀世新九郎生ゟ付屋ゝ癖面〻是も顔曲るゝ門人同じく曲て打幸清次郎ゟけ聲甚ゟゝ鼓ハ上手ゝ弟子共鼓を似せる事叶ゟず声のゟゝ

宗禪の笛

きをまねる人〻笑へバ流義ゝと名ふ西施が顰を做ふ物ゝ近来歌舞妓俳優ふ此徒甚多かゞゝ

○尾州のお抱ハ笛ふ名を得たる森田庄兵衛（後宗禪と云）尾州ふく法客の笛松風の囃子有ゝ時シテハ喜多七太夫太鼓葛（カド）の一郎兵衛小鼓幸五郎治郎各支度出来ける時庄兵衛見へず法座敷より早く始よと度々仰下さゞれども庄兵衛見ハ所〻尋々る時程過てふら〻と出来まり皆〻せゞ立ふうゞ〻とはもるゞども少しも動ぜゞ二便滞ゞハ業あらバ頻りふ腹もちゝゝくありゝ故隠所へ行しゝゞ只今腹くつろぎ過ゝり是ふてもまゞ笛ハ吹ゞず今少まゞきよと云元来庄兵衛ゟ不足の質ゝへ各弥せきたち法催促〻ふく上ゝ法機嫌甚ゝく弁もあき男かふゝく呵

小人の閑居

り希まバ猶こ騒がゞ各も其せきゐてを氣たらまりて必定
松風乃位ゐを至るまゝ今少し心を落し付て出たまへ尾
張樣の注機嫌ゐ遠いバ御出入止らるゝ計り藝者の一藝
を仕損ずるハ一世のみあらゞ未代迄乃瑕瑾へとゝく烟草
盆引よせけるゐ各ゐきまをあがらも尤へとゝく感じけると
へ此松風殊の外出来ゐゝ尾州侯ゐも委細聽し召庄兵未
ゐ御褒美有しとゝ

○小人閑居して不善をあすと云きども小人あらずとも閑
居して不善をあゞ者すくあからゞきまバ獨居の閑を樂
しむ事ハかゝ大約を按ゐく隱居する輩世間ゐ多く自
得して世塵を避思ひ捨て身を遁るゝ者を稀ゐして隱居
しあがら物を貪り世路ゐ執着するを隱居ゐ似て隱居ゐ

隱居一枚起請

ゐゝゞ隱宅ゐ標札せる抔余是を顯居と呼べり世ゐ顯も
居きバ云へ諸事古語ゐ反して卓男女女ゐまみへずをて
女房のみを貴しとするゝ人も有きバ真の隱居を余のみゐ
く世間有来りの隱居を皆顯居ゐゐべし山端乃念佛堂の
菴主正念坊の行水を淇園が雲萍雜志ゐ見へたまバ此人
の書たる一枚起請と辭世を出ゐ

○隱居一枚起請と称ゐ我朝乃もろ〳〵の智者達の殺し申
さるゝ隱遁乃隱ゐもゐゝゞゞ又学問して道の心を悟りを
殺を隱遁ゐもゐゝゞゞ只不用の者の為ゐも世の妨と成る
まゞとさへ心得まバ疑ひゐく氣樂ゐる樣と思ひとをを
隱居するゐを外別乃子細をきむらまゞゞ但し肝心の世渡
りと申ゐとのゐゝども皆衣食住乃内ゐ籠りゐゝ此外ゐ

欲深きことを存ぜバ諸人の憐ふもまづきゝべし假令薦をかぶり糟糠を嘗人の軒端ふ卧せるとも食てゝ寐食て遊ぶ君ゞ代の有難を忘るゝ身ゝ安樂ふあり方とも生た甲斐もあるまじくゝ穴かしこ」辞世「来て見ても来て見ても皆同じゝと爰らでちよつと死で見ようふゝ

瓢金者

○東都乃俗言ふ物ふゝ戯るゝ俠者を瓢金者と云豊太閤乃出陣ときゝ云ゞ千生瓢簞の指物を一番ふ持ゆくゆゝ滑稽者流を云浪花ふても馬鹿口を敲く者を又云やうもくをゝ云ゝやると不通の老婆ふど云是瓢泊として矢張瓢金と同種ゝ只一漂泊の身ゝ軽きゆゝ軽口として口の軽きと才の軽きをかけゝ云ゝとと思へり

木端の火

○物乃役ふ立ぬを河童の屁と江戸でゝ云へりかわ(カワ)ぱゝ河童の略語ふゝて京摂ふゝ河太郎ゝ此屁を聞ゝ者も見ゝ者もあるまゝ是木端の火ふゝて煮焚する程乃間ふも那るまゝ俗ふ木端石と云ハ誤ゝ木端を木のきゝ端ふゝて時類(頼)記乃浄瑠璃ふも炭乃折ゝ木の端かと云様ふ此坊主と有木の端則木端(コッパ)の事ゝ

医者の看板

○今京摂ふゝ医者といへバ僕ふ看板を着せ家々の印或々苗字の一字を染上る物を着す此始りゝ慶安中ふ由井乃正雪門弟の輩途中ふゝ駕ふ行へバ他行ありとゝ早く知るゝ様ふと由井の由の字を看板ふ染ふませたるとゝ東都ふゝ武家多く駕ふ乗る者も多きがゆへ此事有今時両三軒の病家を見舞最医者僕ふ印付たる看板を着(キス)る事矣ふ拙たり

煮染

杜鵑の薬生

○食物の内煮染といへるを醤油ふく煮きくきをバふしめと心得たるを僻言のよし去る料理家ふ聞り松魚のだしをよく煮出して酒又醤油を化し煮べき品を分量して其汁を其品ふ煮付もバ染るゝ是を煮染といふて十種ばかりバ十遍ふ煮る先の余り汁ふく次の物を焚時を鯉酒醤油の味ひ先の物ふ染て渡水ふく煎るが如し

○信州高遠乃者冬日薪を伐ふ山へ行切たる茅木の中ふ郭公の死したるを見出し是を薬種ふもちゐべき物と持返り箱ふ入置しが其後忘れく翌年三月の末頃ふかの箱を云らきしふ件の郭公飛出て去り布ゆ古歌ふ奚山の朽木ふ籠る郭公夏を待てや子ふを呼ふんとも詠ばバ秋より春迄を朽木の中ふ隠れ居るふや冥途の鳥と云バ再び蘇

雀の集人

木曽の猿酒

岐

飛弾の篠魚

307

りしこのもちる屋ゝ

○高野山ふ時鳥の渡り後をたるゞ木の茅穴ふどふかゞまり居てやゝ寒くふる時を得動かず餌食をもとゆゆを得せぬを雀がつゞひて餌をゆゝく来る年の夏ふ及ぶ迄養ふ以と不思義ふる事ふく是を雀ほいとく云ほゝとを乞食の事ふて雀の為の食客と云事ゝと歟

○岐蘇の猿酒を以前信州乃俳友より到来して呑たるがこハ深山の木乃股茅穴ふどの中へ猿秋の木の実を拾ひ取運び置たる雨露の雫ふ熟し腐るを山賤見出して持返り麻の袋へ入絞りし物ふく黒く濃して味渋ゝふ甘きを兼くゝのさゆ仙薬ともゆふべき物へ

○飛弾の高山の名物篠魚と云魚を三尺余りの笹の茅ふ生

下る魚ふく初夏の頃谷川ふ落る其味鱒の如く美味へと
聞未魚ゝ多ゝざる内を篠の使一枚持返り余ふ見せたる
人有　　か樣ある容ふく二尺七八寸も有る笹の中
程の節ふ三寸計の筍付有自然と魚乃別たる形ゑてよみ
鰤程乃大きさへ筍の先ふを早鱗見へく尾先ふをまた
り溪川を少し隔く高ミふ生ずと云り又外ふ此亜を摸写
しく狂歌一首を筆へ何翁とり落款せし摺物ふ暗記ふが
ら慥高山乃谷間ふ生る篠魚社さゝを進る者ふ侍ふる七
十何才とり書有ハ高山の人へ余考ふるふ雪中ふ谷川も
降り埋もし頃魚此笹の筍へ子を産付亜しが翌春雪解
して谷川を低く流ル笹を逸の岡ふ有篠の子やゝ成長ふ
及んで魚も共ふ成長して初夏ふ筍自然と落る時谷川ふ

鵜鮓

鵜の艸莖

例入く竹の皮を脱で游ぐ那らんと思へり非情の笹の節
ふ有情乃魚の産ずるも珍らしかゞずや愛まべき物あり
○鵜乃艸莖百舌鳥乃早熟ハ度々見し事を鵜ハ虫市ふを取
く餌とすまバ冬虫類の地中ふ入くを不自由ふまバ秋の
末産ゝの虫を爪ふかけて木の先ふ刺亜冬の餌ふ當るを
云余河州暗嶺の禁ふて見しを蛙を梅乃枝ふ貫き也雖
波大黒庵の庭ふ有しを大ふる蛸蜒ふく実鳥類迚も賢し
き物ゝ草莖をいつゝを束る梅の花と奇渕史の句を其
時の唫ふく有し
○鵜鮓を鵜と云鳥沖ふく浮ミ為る魚を爪ふかけ海岸の巖
ふ生たる藻を掻分く埋ミ亜を海士乃子藻乃影を是を
取食を為ゝ藻の上を取る時を重ねず漬る事ふし下ル

ト云魚ハ初夏の頃谷川ハ落る其味鱒の如く美味ニと聞未魚ニ為ざる内を篠の使一枚持返り余ハ見せたる人有　　か樵ある容ハ二尺七八寸も有る笹の中程の節ハ三寸計の筍付有自然と魚乃別たる形あてよみ鰯程乃大きさ之筍の先ハを早鱗見へ尾先ハ[illegible]たり溪川を少し隔て高ミハ生ずと云り又外ハ此面を摸写し狂歌一首を按へ何翁とり落歎せ一摺物ハ暗記ハが ら慥高山乃谷間ハ生る篠魚社さ〻を進る看ハ皆ある七十何オとり書有ハ高山の人ニ余考ふるハ雪中ハ谷川も降り埋もし頃魚此笹の筍へ子を産付至しが翌春雪解して谷川を低く流れ笹を遥の岡ハ有篠の子やゝ成長ハ及んで魚も共ハ成長して初夏ハ筍自然と落る時谷川ハ

鵤鮓

鵤の艸莖

例入て竹の皮を脱で游ぐ形らんと思へり非情の笹の節ハ有情乃魚の産ずるも珍らしかゞずや愛もべき物あり

○鵤乃艸莖百舌鳥乃早熟ハ度々見し事を鵤ハ虫市ハを取て餌とすもバ冬虫類の地中ハ入て不自由あもバ秋の末稔との虫を爪ハかけて木の先ハ刺至冬の餌ハ蓄るを云余河州暗嶺の梺ハて見しを蛙を梅乃枝ハ貫き〻也雑波大黒庵の庭ハ有しを大ある蚰蜒ハて実鳥類迚も賢しき物ニ草莖を[illegible]つゝ至ハ来る梅の花と奇渕叟の句を其時の喰ハて有し

○鵤鮓を鵤と云鳥沖ハて浮ミある魚を爪ハかけ海岸の巖ハ生たる藻を掻分て埋ミ至を海士乃子藻乃影ハ是を取食を為ニ藻の上ハ取る時を重ねず漬る事ハ下ハ

蛸を蝟に灸をすへ

鯖の鮓

とる時を志け日和の食料ふとてらいやゞ上ふも漬置ま
こゝとて海辺の者ふ聞たり

○九州地へ下る者の数日大船ふ乗て風待汐待の徒然ふ絶
無播州路ふ〳〵三里の灸を居る次手求ゆる蛸の頭へ灸を
大きくすへたるゞ熱ふ苦しみてや脚をかけ廻り這廻
りして両足と覚しきを頭へ上〳〵搔落せしを見て興ふ入
又下の関ふくかきみといつる蟹を求め甲へ灸をすへた
きを苦しゝ横這ふ這廻り泡を吹身を峙て鋏ふて泡を切
て甲の灸を消せしと聞しゞ無用の事あゞら其物こふ雑
を避る法あり萬物の長たる者常〳〵おもゝ〳〵の雑を避る
心構へふくても有べかふず

○京師ふくも祇園會ふも鯖の鮨を漬て客ふ出にまゝ鯖の

熊野の大樹

鮓ふも塩加減茅一也加減も米壱升ふ塩目四文目の時
ふ入も飯ふ焚て至極然加減也しを今ふても塩目五文目
入ても水嗅くて加減ゆゑ〳〵諸人辛ひ好ふあり〳〵り又塩
乃きゝの薄く成りしかと云ふ是全く左ふゆゑに近世一
統奢の境あもバ前々の如く辛き塩乃下鯖も用ざるゆへ
也と京師の料理ふ心ゆる人乃話ふくきりたり

○寛政六年の春紀州熊野の深山十里卅里奥山へ伐用木見
立ふ行く榎の木の大木を見出しぬ是まで折ふ来る者も
ゆもど只々山とのゝ思ひしゞ此度大木ある事を見出し則
人夫の杣人等其大さを積り大守へ上覧ふ奉りぬ一榎の
木一株百廿抱ハ六十丈ニ高サ三百廿四五間見尺五十丈余ニ枝三本ふ別
き南の方の枝凡八十二廻り丈ふして四十一丈ニ宿り木一杉長サ

七間半二本有一椎長五間二尺七本有一檜長五間半十二本アリ一黄楊長四間半九本有一松長サ四間半七本有一柳長サ四間半六本アリ一竹十八本有一南天長サ二間半七本有右紀州表ゟ書状ふく申来る字〻書餘り珍愛々き話ゟ種共ふるべき事ゆへ爰ふ出ス

北野の連歌

○北野乃神前祈禱乃連歌有〻時かくあるものゝさすらへの果との前句ふ此神のかへり北野ふ跡たまてと此付句を執筆書と云ると同ゟく社頭震動して暫くやまざりつるハ神も納受〻ふふやと皆感ゟ申たるよ〻或人連歌の席ふ句を出〻ゟ〻からば慢ゟたる顔付を見く照より生天神〻と云て膝を突々きバ餘りあつかきぞ社檀ゟゆるぐとふるき〻ゆへ一座腹をかゝへ〻〻ぞ

閑居の御遊

○昔ゟ茶人ふ志ゞまの法遊と云事有人こゝはどひゟひて種々と談話の中ふ云と度ゟ無答ふく戯きゟふを云へと我志ゞまハ志づまる間と云事を略〻音便の詞ふ〻て閑を守るゝ壺矢五寸乃至一尺を度として物いふ時ゟ鐘を打あゟす今此ゟぎ絶てふ〻とかや我〻の雑談ふくも互ひふ語り図ゟどせる内燈火乃消たる如く話のきるゝ事あゟやゝ暫く無言ふ〻て興尽る事ゝ茶人乃志ゞまの法遊ゟかゝる事の有るまじき為の用意と思ゟる後考をまつのみ

茶人への諷諫

○利休居士ゟ詞ふ茶き價の器物を愛ゟる心利欲ふ走るゟ故ゝ飲たる摺鉢ふくも時の間ふ合ふを茶道の本意とすと以へりきゝバ茶道を好む者の他の手前をも弁へふ

く我習ひたる義のみ心得是も於我流ふ為くて叶ふぬ品
ゝと無益の器を高料ふ求め飾亟も古道具店ふも云も〳〵
くうるさき限り〻数寄咄といふ物ふも主人家居と道具
ふ自負〳〵客ふ云々るも我数寄屋の内ふよ孤〳〵からざる
物ふ〻む詞ふ隨ひ省べ〳〵遠慮ふく云ゑもとゆり々も
も客も謟ふき人ふく家と云器と以ひ行屆ざる所ふ々も
ど只此内ふ其元き人ふかぶ〻〳〵かバ風流雅境是ふ過た
ることもゆゆゞと云りいとおも志ろき訊諫ふ〻

六憎

○六憎とて憎むべき物六ツゆゑ金持く高ぶる程憎きハ彼
く書を見ぐ〳〵して物識顔する程憎きもふく人ふ物をやりて
恩ふきせる程憎きハ彼く吝きほど憎きハ彼く欲深き程
憎きも彼く人を捻ねむ程憎きもふ〳〵

餅磨の搗淖

○餅磨の搗淖も播州餅磨郡餅磨の津細江町ふ紺屋多く昔
より相續の家も有べりもど淖法悉く傳へたる家もふき
より搗淖も只幾度も藍ふ深く臼ふく搗唯厚く淖たる成
べ〳〵仍て臼ふく搗をかゆと云餅を搗飯と云ふく知るべ
〳〵濃き藍淖の事〻

○奥州ふ〻事てぐらと云武家有彼館ふく能ふ鉄輪を志かゝ
ま恐〳〵や御幣と云を行常り俄ふ直〳〵恐〳〵や胯ふ三十番
神おも〳〵ますとも浅猿〳〵き神の居所やと笑ひぬ又或人
三輪の謳ふ有る夜の睦事ふ法身ふ〻ゆる故ふよもとも
作意も彼き作りやうかふ惣ゞて理のつまぬ文章やたゞ
或夜の六ツ時ふ法身いかふある上ふ乗と直〳〵たゞバよか
らふとも作者いかゞ冥慈あるべ〳〵

謳曲の発明

太郎餘一郎

○昔も弟一の惣領子を太郎次を次郎と云夫より三郎四郎
より十郎まで名付十一人めハ餘一郎十二人めハ餘二郎
と次第ふ名付ることなれ十ハ成敗あるべ十郎よりはじまる
と云意あるべ〜盛衰記ふ金子十郎家忠の弟金子與一郎
那須十郎資隆の弟那須與一ゑ餘を與ふ作るを假借ゑ平
惟茂を餘五将軍と云も十五郎ゑ源義経を弟八子あるを
九郎判官といいるを八郎為朝の成行よりかゝるべ八郎
を忌く九郎と志たると云り

曽我兄弟三代御前

○曽我の十郎ハ十男ふ行ゆゑ父河津ふ死別を伊藤九郎祐
清の弟と〜て十郎祐成と呼び弟の五郎を北條を烏帽子
親と頼ゑ四郎義時を兄と〜て五郎時宗ゑ平家の六代御
前を平貞盛忠盛清盛重盛維盛と弟六代めふ當るがゆへ

猪口太郎

然いふとなれ

○昔噺の桃太郎金太郎を惣領ふく狂言乃鈍太郎悪太郎も
是ふおなじ沼太郎川太郎火太郎ハ其品ふまく号し物
ゑ雲ふ丹波太郎ゆるゆ故ふ霧太郎を天狗乃名ふ冠らゑ
めたり東都の料理家ふ葛西太郎を呼砂糖漬ふ太郎梅と
付しを梅を兄ふく太郎と名きたり是惣領を甘ひと云
心より号ゑるべ〜卅年前何ふでも太郎〜と呼て猪口太
郎ゑ〜呼び〜ゆ重猪口の三ツ或を五ツ重の大ゑるも
のを然よび〜ゑるべ〜

慶庵肝煎

○肝煎口入する者を東都ふく慶庵と云遊女の肝煎を女衒と
云慶庵と云を江戸木挽丁ふて大和慶庵と云医師ゑ同じ
比伊達三郎兵衛ハ長谷川助右ゑつと云浪人と三人申合

四方田四方八面

上米刎る

世男女婚姻の媒酌ふどして世を渡りぜゞんと云々女衒乃轉訛ふゝ衒をうると読り三人共寛文中ふ悪事有て江戸を追ひ放さゝ一と云其頃より一て人の世話をするものを慶庵と云肝煎とハ古き詞ふゝ胸上之炎焦心中之肝是らよりいふ事ふゝん

○明智光秀の臣ふ四方田但馬頭ハ四方田但馬頭と読江州ふ四方田と云地名ふるゝ一又四方山の物語りふ及ぶと云も山ふ四方八面と書く八方を八面と読り四方八面の物語をするふど書面一

○物の運上をとるをうハまゝをとるうハまゝを刎ると云も上米取とて口米をとる如く百石積たる船ふゝ壱俵を壱三俵積たる駄荷ふても幾升をとると云が如く住吉

七里けつぱい

313

披露（ヒロウ）

神領と一ゝ調進せ一より云事之と歟

○俗語ふ忌嫌ふ事を七里々つぱいよせ付ぬと云々高野弘法大師行状記ふ七里結界と有るを轉化せ一詞ふるべ一

○商賣往来ふ京師の手習師匠乃作ふ一て商賣尽とも外題を玉べきを庭訓往来ふとを倣ひゝ文通乃往来ふらぬふ呼び来り一と物志る人ふ識き其上端物兼物の兼の字ふ衣の字ふゝ衣通姫と書衣の字ふ織上たる使の物を反物と云裂たる物を衣物と云り一附て云召使の者ふ時乃衣服を給すふを仕着と云も四季施とも書り四季着の約語歟きバ四季着と書をよ一と云へり

○近世戯場の俳優又ふ浄瑠理の會ふどの引ふ進物の目録を送る書附を云ふと云ビラハ披露乃約語ラウを詰て披

手枕の歌

露とを云こゝ以つ幾日よりそ始ると云をひゞらと云を日数
ゝ云事なるべし

○濃州岐阜の片辺ふて人〻或草庵ふつゞひ連歌ふゞ侍
り庵主を六十もやゝ過るゞかりの尼なりしがいとゞく
行ひすまして誠ふ塵を出し心の流石ふ數島乃道を元と
つの癖と恵心僧都のよみおきあひしおと〻捨うねてや
さしき人なりし連歌も満備して因ふ古歌ふどの物語し
なる中ふ一人の若輩乃宗匠ふ問を雪ふまゞバ木毎ふ花ぞ
咲ふ事るいづもを梅と分〻折らまゞといへる歌を梅と
以ふ字を分て木毎ふと上みふよまゝたるよし申ス人待
るハさゝ枝といへを宗匠頭をうちふ是〻否〻左を心得
あふふ成程或説その事いひ出し侍ゞも鑿説ふく歌を

さやうふ入おゞふよむものふつゞひむべ山風を嵐と云
らんとよめる山風を嵐の字ふかよひ又春のよろ爰計ふ
ゝ手枕ふかひ敷くたさんとよめるを手枕ふ腕せいひか
けたるふど一首の上乃自然の逸興ふく是を求めてよ絶
るふをつゞけと語をを満座いづもも服膺の解ふ見へ侍
ゞ〻かくて人〻わかを吸らんとせし折ふし雨ふ至いで
ゝ蓑笠合羽やうの物もてるい先へ出一人二人を雨の具
ふくて行〻侍るを主乃尼見てまづ〻留りて晴間を待ゐ
い宿したまるんとても古稀の老尼ゞ浮名もつるまゞ苔
乃衣を只元と〻りさ袖ばうと〻二人ねんふど戯るゝま
ゝ立どまりて又火桶かきまきぐ至膝うちくつろげて語
るふ尼ぜり云先ふ枝ふたの問ハせらき〻木毎ふ花の歌

ふつきく宗匠乃物語さたなとも思ひ侍もどかひあくた
ゝんの歌を千載集の詞書ふもかひあをみをの下すゑさ
し入たると有て旦ゆの歌の返しふ忠家卿もいかゞかひ
なくとよみぬへバかひあをいひかけたるものと尼を思
ひ侍を夫ふつきく尼ゞ物語の侍る雨水晴間待ぬふ内語
り侍らんトにつゆて恥かし那がら旦を懺悔のため旦を
出離の縁の善知識を尋むゆ事にハへをはゞかゆもいるま
ゞ尼ゞ出生を丹波の国の民乃女ありしゞ十歳許の頃凶
年相後し上疫癘流行し父母うちかきねこまかゆ伯母ふ
るゞ許ふ養を侍るふ此伯母聟情ふきものふくつゆふ都
の人商人ふゆくゝしやり嶋原とふふ傾城町ふ売て小鬟と
ちりつゆつゝ初めハ父母の事のみおもひ出古郷の京し

かゆしばかりこしゞ稚き心を思ふるものふく日毎ふ媚
ふふを花屋ろふる人乃出入たちふるまひも美敷いつし
ろ芝蘭乃室ろゞぬ嬈乱の室ふ入く其香ふ染ぬるぞ浸ま
しき後ふを客をおくゆむかゝ偽て悦び偽く怨むるもも
づかしとだふ心付ぎゆし一夜を限りふ去て再び来らざ
るも多き中ふ年をかさねてゆすまず訪ハをぬるも嬉し
かゆし或下京辺ふ通ひ来く是も二とせ許も馴たりし
人の唐の文字よく書る有しふ一日妾ゞ扇の白くしてさ
うゝしかゆぬる一筆書てあるをといひしを辞するゆフ
もふくさゝゞと書てたまゆぬ固女のよむべき文字那
ら孫む何とゝふ事とたづねしかゞ一双玉手千人枕半点
朱唇万客嘗よゝふ詩のようふる事の心於と問しふ

是をぬ〳〵のおとき遊女を作る詩あり一双の玉手とを
一對といふ心ふゝ左右の手のうつくしく玉をのべたる
おとき腕も夜ごとふかをる口びるも張郎が妻と成李郎
が妾とある身の万客未つく嘗るゝは作りて世ふ浅猿き
ものハ傾城あもバ是を憐て作る詩〻と語らるゝふ初
ゝ心付身のほどの宿世おもをを侍もど今更色ふも出し
と酒汲かを〳〵物語ふどして夜ふかく客人を返ぬるふは
く〳〵思ひつゞくもバたま〳〵人と生をあゞら士農工商乃
妻ともあゞで禮義廉恥を忘るゝ屬と成事よと胸うちふ
さが是ゝ目もつゝずいろにしてら此苦界を出て人倫ふ
立入べきとゝさまかうさまと思ひめぐらせど女の思慮
の白地ふ考得べき事かをかくて其日を引かづきてつを

しゞ夕かけゝ客人の来りぬるとて案内をるまゝ今日を
心地つゝ〳〵髪だふも梳らずあど云〳〵かどつふがちに名
をさゝて對面せんとゝひふしぬつる客人ふて従つるゝと
の家主もつふがちふいさむもバ志ふ〳〵ふ出行ぬ是まで
志をる人ふもつゝびあるも田舍人のふつゝかふ見へ侍
るいと無ふく捨志〳〵ふ酒宴も過ゝ閨ふ入〳〵ふ枕乃ほと
ほに彼の扇の有つるを客人の忘らき見たるふ又胸つぶ
まて顔も紅葉する心地ふもバ奪んとせ〳〵をいかゝゝく此
筆の蹟志ゝいとうるゝ〻も徵明ゞ骨法を傳へ〳〵詩乃
心もつをを深きをゝ書けを誰ゞ筆ふる形どめでたり
〳〵翌朝をゝく別を侍〳〵ふ夕方何心ふくかの扇を開〳〵ふ
いと美き手ふく

枕ふかすとも形ふり捨ふからんおもむかふふき仮の此身を
と書添侍る誰ゞ志をざかと思ふふ夜部の客人の外ふす
べきものも形し去ふても初乃詩の心を引たがへく四大
假合乃此身をすてゝ志を浮むせも行きとおしへたるも
尊く遊女と形きるを宿世乃縁身を変しふぞおのづから
道ふも叶ふふやさゝバ今よりを仮の此身を惜まゞして心
を生死の外ふ出離せんと思ひつきぬ去ふても此奇よめ
る人の心乃尊くやさしかりをん如何形る人ふや尋ね
たく思ひりんどうやにくと其後をよすがふくて二年許過
るふ或夕暮窓内しておとゝしのいはく一たびまゝへ
たるむかりのよすがハ今更云出し難くやと有しふ嬉し
く頻ゝむかへ侍まゝふの事をも語いでゝ其後ハ折ゝ志き

ずとふゝハきぬまバをもも此人を志を経のよすがと頼
む心ふをりまゝ楚のうち長へ約束の年月の過ぬまバ伴
をもて此國加納と云所へ移り侍りて初く荊棘林を遁ま
ゝ一農の妻ゝ成ぬ彼主頗る心有りて情ふかくおしハ給
ゝをを二十年許先ふおくを侍りて後かゝる身とをありて
爰ふ世をふるふり去ふても古へ人の情のほど夫妻のむ
つゝのゝあゞにかくまで身を助けみををぬるも尊く將
詩を書る人もいか形る宿世乃善知識ふやかゝる事ふを
導引ぬひぬゝんと辱ふく忘がたく侍まバ旦暮ふ回向し
ゝ現世ふゝバ安隱穩後世を無上菩提とゝぶらひ侍る形り
と語るふ雨もやゝて道たどゝしかをを夕闇も月待出し
ふを人ゝを又かきねゝを契りてかへりぬゝ形

○享保乃頃室鳩巣翁ハ江都駿河臺ふ住て老後痿痺の疾ふ
てまく起居も心ふ叶ひねバ日夜衾枕をのゝ親しみ日頃問
來る門弟子ふ仁義の道を講ぜらるゝ中ふ世俗の諺ふ燈
臺もと暗しと云ハ世ふ何事ふても而も外ふをかくも非
き事を其もとふく関を却て分明あゝ如様の事ふ云ふゝ
し孟子の道在邇而求諸遠と以ふ意ふもかゝひ申べきか
と座客乃元とてがいひ々もバ又元とて近代日本ふく以
ちゞ織田信長関東関西乃諸國迄手をのゞし討ちゝがへ
らもしかども手本ふ暗ふして明智ふ殺さゝしを燈臺も
とくらきふいとずやと倭漢の故事を元あく云事多を翁
関てすべく比喩の語を義理のとてやうふく色々ふ申さ
るゝ物ふくい此諺も各の申さるゝを燈臺もと暗しを而

志きかとふたとつらるゝふ翁を又此諺をよゝ訳しき方ふ
取ふして韓退之ゞ短檠の歌ふ長檠八尺空自長短檠二尺
便且光と作るごとく燭臺も長きを燭のもと暗く短か
きを燭乃もと而かるし夜中ふ書をよゝ字を写すやうの
事ふを手もと也明らかふかふして其用をかゝふる故ふ短を
貴ぶふくい得ども一二尺の手燭ふくハ此産上ふくもく
まゝのくらきを照しぬる事を難かるべし志かきバもと
を而うるくしてハ遠きをてらすし難く遠きをてらすハ必
もとくらきものと志る歟し翁関尹子を見侍るしふ吾道
を處暗ゞ如しよく明中の事を區畫すと以つり関尹子を
関令尹喜ゞ書之尹喜を老子の弟子ふく道德經五千言も
此人の為ふ而ゞをせるとゝ譬バ吾身くらがるふ居く明

りを見ることを明りの事殘りなく見ゆるこゝ吾身のかゞみふる
く暗を見てハ一せつ見へぬ物ばかりさきバ暗ふ居て明
りを見るやうふ己が智をふかく元ばめ養て暗よゞ明ら
かなるを生ずるやうふすきバ於きたる真の明といふべ
れども己が材智ふほとゞ聰明を尽して只手もとのあ
かるきを專ふせバ但手もとの事のみ見つく下手の碁を
うはが如し未の手ハ見へざる程ふ毎こ是非をあやまる
事も多かるべし

板倉の明断

○近き頃故板倉周防守京師ふ留主たゞし時訴訟をきかゞ
しふ己が材智のきゝぐゞ聲色の動ふで我も於きふ氣象
し彼も於きふ氣奪ゝ両造乃辞をしぜん双方の情を尽
さゞる事なんとゝ必障子を隔ゝ態と手づから茶を元き

那どし只心乃ちらぬやうふして聽きしとこさゝを近代
乃名人とハいひながらおのづから聖人の心ふもかなへ
ゞ於きあへ曲直理を変し聽断神ふ通ド人こ畏服せざる
ハ那し周防守ゝる時京の在家を通らきしふ或家ふ幼少
の子出ゝ遊びしがゝも周防ゝ於通らるきとふひしを周
防守馬上ふゝ聞とがめゝ我不肖とふつど上乃沛代官と
してゝふゝもバ京中村間ふ住ゝる者男女老弱をいも
ゞ我をかくおしくだしてふふ事ゝるべからず志のるふ
此家の児輩かくいふゝ常ふ家人の我を恨こてかくふふ
を聞馴し故那るべし是ゝ定めゝ子細ゝるべしとゝ其家
主の名を問せて通らきしゞ翌日其家主を召よせて汝先
年何ふてゝ訴訟したる事やゝる今尋ぬるゝ少しもきば

かひ形る事ふてハあゝ有ゝ様ふ申べゝといもゝゝが始
ゝ何らと辞退志けるゞ再三問もて此上ゝかくさゞ申上
ゝ其きの年某の月の事ふくゝ父の配分の事ふ就て一類
乃者と爭ひて訴へゝゝゞ某者無実の事を申かけゝへ
ども證人を多くたゝらへゝく申出ゝ故清聽断の上相手
の勝ふ定りゝ其次第かやうゝとくはゝく語るゞ下役人
ふ命じて其年ふ行たゞゝ簿案をくゞせけるふきこゝも
たがひちがりゝかゞ其上ふくゝよゝく尋ねきめく是
ゝたゝかふ某が聽ゆやまゞたるゝゝと殘念ふきどもを
きや年久ゝき事ふれバ今更もべきやうふゝ其配分の程
某償て我過を謝もべゝとく自分乃金銀を出ゝて其者へ
とゞせらきゝとゞ周防守已ゞ威勢をつのらず已ゞ過失

をかくさゞ我ゝ常に晦ふ處て明を衒さゞ我ゝ常ふ愚ふ
處智を先だてず其心公ふゝて私ふゝ誠ふ古今ふ有ずと
き明智と以ふべゝ今是等をもく此該を考るふ燭者ハ長
くゝてもとの晴ふく其明おのづから遠きふ及ぶ君子の
道ゝ闇然ゝて日の明らゝ那るゞ如ゝ若短うゝてもと
ゆかるゝきバ其明るゞらふ近うゝてやらぬふ人の道ゝ
的然ゝて日せほろぶるゞがごとゝ此理を志免ゝて明ら
ふるものゝ必もとをくゞうすとゝふ心ふく煙者もとく
らゝとゝふふもゆゞむかゝ

○又爰ふ其意とゝ同じからねど一話有昔憲廟の清時ゆる
士人乃好学ゆりけゞ其人按察使ふ命せゞきく畿内の郡
縣を巡ゞゝゞ首途ふ臨く学問の師ふ贈言をこゝふ其師

此度道中ふく富士山乃下を通り法ん時よく裾野を見て行きはいつのき程乃山を行き程の裾野ふくてをたもつ程からず都て山を上より里土下りく下の肥厚ふるふてふ程持はい若上ふ嵩ゆるく下細く上大きふして下小さくを忽ふ崩をつべし此度上乃沸落をおぼきを口下を厚うするやうふ法ちゝ法つはい得此外ふ申べき事ハはるずと云しと那ん是易の剥卦乃意ふてはへるふるべし剥の卦上を艮ふす艮ハ山ふ里下を坤ふ伏坤ハ地ふり是地上ふ山ゆる象ふり山を高く上ふ位すを共地ハ下ふ附て放をず是山を地を基本とする之人の上たる人上を剥落して下を厚うすをバ邦安うして山の地上ふ安至をるがごとし下を剥落ふく上ふま劣バ山在地上の象ふ於むく程

円想觀

梓巫子

ふやがく危かるべしとふり

○天王寺のちやし町を梓巫子のすゑる処ふして二季の彼岸ふを在所の人乃ちゝふ来りくふき人の口を寄るとて梓の弓ふ其鬼神をまねき往事を法く殊ふ二季の彼岸ふ云としほゆるとふ覚由かしふのはやし町ふすめる巫子乃名の昔めきておかしあをバ書つく橘屋小女郎、隠居藤黒格子の元家、梅檀の木の姉、薮乃内の亀、升屋女郎、茨屋の小女郎、黒格子の万、黒格子の嫁、此余ふもゆまたゆる中ふ黒格子殊ふ名高し

○津の國天王寺の西乃海つゞきを那古乃浦と云之春乃入日を武庫乃山の北ふ沈ミ冬至乃短き須の日を淡路島乃頭ふ入路へり又二季の彼岸の中日といふふを落日天王

安德帝記

寺乃大鳥居乃中心ふかゝるく須ア明石乃中間ふ入こ是を日想觀の大事と申て昔後白川の上皇と圓光大師とこもふ此岸乃落日を拜ひし所跡を源空庵と申せ〻ば今の一心寺こと申傳ふ又壬生乃二位も此の辺りふ庵を結び名古の浦乃入日を見て七首乃和歌を詠ひし跡家隆塚として遺まり慈鎮和尚天王寺の別當ふありぬひし頃とかやふゝつたへあり

○物の名も所ふよりてくかゝりけり難波の芦も伊勢の濱荻と或人賣用ふ付享和年中長州ふ下り数日滞留しけるが都て上方と替りし事多き中ふもまづ年頭より中元せつ句の袴着ふ銭一二文充紙ふ封ドて上書ふ金百足と我姓名を記し是を家毎ふ置て廻るふ先方も又かくの如く

同前こ禮式を元来節振舞法事髪垂夷講の類何ふても先よりを招かるゝ時をいつふても上下を着て行又其禮ふ行のも上下こ開帳参り抔ふても七分通りを上下着たる有こ扨又赤間が関あゝりを女ふ位有く俗ふ爺嚊と云樋子こ先目上の内義より目聖の妻女迄をおがうさんと云目下を姉さんと云おがうさんをお后さまとふふ事と我是往昔元暦乃戦ひふ平家打負西海乃波ふ漂ひ此八島の沖ふゝ安德天皇を始二位乃尼公公卿官女達ふ至る迄入水有しかども相殘まる官女を此赤間ふさまよひ世を渡る業もまゝざまバ人ふ雇まを或ひを身を賣て世を渡りしかど流石賤しき漁師等ふ採を穢さん事を恥いとふ官女を塩或を漁船ふ釣する鮮魚貫ひ是を緋の袴を着乍天窓

ふいとぐき賣ひまきて営と渡りかどもいつしか仕馴ぬ
業にはかゝらでいかゞして世を渡らんと途方ふく
まていあるを辺りの寡暮しの漁師是を見てかゝる乏し
き仕業ふく乞食せんことと今目前之非を我こが宅へ
来ていろ様共ゑを過し給へとせちふ乞ふて伴ひかへり
御客やら妻やらふして敬ひる是ふよりてお后さま〳〵
といひしより今も内室をお后といひあらはせふ此是
しと拵扨今ふ赤間ゞ関乃遊女を其頃ゑを賣りし官女よ
り始りし之依く毎年三月廿四日ふる安徳帝の正當忌日
あまた家毎ふ遊女爰をもと粧ひ樓姿ふく阿弥陀寺ふ
集り遊女毎ふ焼香を捻りて返り此日年中の大祭日ふ
てつゞく寺を安徳帝其外入水乃公家達の陵石塔ある寺

之文化五年の夏祇園の練物ふ新屋小鶴と云藝子破きた
る裾の緋の袴を履塩を折袋ふ入を頭ふいたゞきし体之
しゞ是かの官女ふ出たちし之

○大雅堂もと嘉左衛つとく貨殖家之其業を悪ミ避て画
工となり池野秋平と云又霞樵とも云其質雅ふして耶も
利ふ引らゞ書もまめやかふ殊ふ象得たり一日書林の
許ふく年頃望ミし一書を見る恍然としてその價を問ふ價
最安し大雅云我ふたくはへ故ふ望を空しうす希ハ
是ゞ為ふ今より生務く金を積み積く後此價ふ足りあバ我
ふたびあん去作賣物の事あらバ其間ふ他ふ望む人もあ
るべし若左ありバ我ふ知らせよと云書林云此書を高價
ふる物也へ容易ふ望人もあるまゞ若あらバその由告申

べしと約してそれより大雅を日頃に替り俄に物事を約
ふして年を経て望の通り金子溜已に價調ぬるとば彼書林
方へ走り行年頃の望に足りぬとく價を出し其書を我に
たまへと云書林大に當惑して実も先年足下へ約せし事
只今存出せず其書を其後望人有て賣遣りぬ其時足下
に約せし事を忘却して告げず罪をく今更如何ともする事
なきまでと悲愧を大雅楽に相遠して愀然として申ける
を我かく迄貧しき中にく金子拵しは此書乃為なり既に
價調て望を果ざるを天く苟も此金を他用につかひ人様
にし不如祇園の地に住からは恩謝乃為に御社へ奉納せ
んにもと右の金子を残らず束ねて祇園へ奉納す是を世
に傳へて大雅の廉潔を称じ倍此人の書画を世に翫ぶ惣

じて常の風俗中華乃唐人に似たり月明らに那る夜近江
乃奇山を過るとく宇野氏が家を深更に敲く主人是を聞
く時四更に及で驚しく門を叩は唯あらず自分起て立出
見るに大雅にいらふや深更の夜行をと問大雅答て近江
の老たしへ所りて月夜の面白さにうかるく夜行せり余
り清明あるを我獨り詠んも無下へ足下を訪ひく夜とと
もに月を賞ぜんが為とく主客内に入く酒を酌興下明
せしと宇野氏が物語に齢耳順に満ぬ歿を其妻玉蘭女も
夫の雅に那ふつく風流に寡婦乃後も扇面を書て鬻て世
を渡るより是も今を没したりと侍

○享保十七年九月竹本座淨瑠理文耕堂長谷川千四作檀浦
塊軍記二の口菊水下河原乃講釋場関原甚内と仮名しく

阿古屋の尼井場の十蔵一幸母を養んが為講師をして其日を送る面体格好悪七兵衛景清ふまく似たるゝ故榛沢六郎組子をもりて召捕画姿ふゝらためるゝ景清ふゝらずよりて榛沢記く縄をとき母を孝養の為辻講釈の業をすと関て感ド殊ふ人立乃商売を妨げしを氣乃毒ふ思ひ金子を母ふ恵むと出す十歳是をい形ミく景清ふ似たる名此身の不幸ゝ何此金子を受んやとて受ゞ榛沢を是非ふと伺る其時十蔵折角乃御志無足ふあゞドゝふ縁日とて清水観音乃賽銭箱菊水の辻ふ有母の無病息才を祈りの為奉納せんとく榛沢乃見る前ふて右の金子を賽銭箱へ打込む脚色有是則大雅の書を求めん為の金子を祇園の社へ奉納せ一一話よりをふる物ゝ大雅を祇園の社地へ

天明京大火

出一店して書画を認井場の十蔵を菊水乃河原ふく辻講釋を景しすと仕組ゆり都て此境軍記を此頃乃名誉の狂言ふ一場毎ふ佳境有今三の口琴責のミを浄瑠璃歌舞ゝも ふ用ゐく名狂言ふる事を志ゝゞふと惜し玉べき事ゝ

○天明八戊申年正月晦日京都大火を平安城開けて未曾聞乃大変ゝ抑平安城を桓武天皇延暦十三年ふ天明八年ふ至暦数九百九十五年其間ふ禁裏炎上数度ふ及び保元平治寿永元暦嘉久元弘建武明徳應仁永禄元亀ふ洛乃兵火ふも京中焼亡の事ふ一就中應仁の乱を前後百十余年諸國乃武士京師ふ出花洛の荒廃此時ふ共兵火の為ふ京洛皆焦土とふり一事を不図其後ふを洛内の老樹乱を避

く存在せる物多し然して法華家沛治世後二百年乃間ふ
百有余年前下京タイウメ焼とやらん余程の火事ありと
聞伝ふきども年久敷事ゆへ當時是を志る人なし其後三
月廿日焼失をだふ慥ふ覚たる人あり近くも八十一年以
前宝永五子年三月八日の大火さ称古今稀有の事ふ申傳
へたり其時禁裏炎上町数四百弐拾九町焼たり又五十九
年以前西陣焼ハ町数百弐拾三町之今茲天明八年乃大火
ハ京洛中十ふして九つの余焼畢ぬ正月晦日暁洛東椽乃
辻子より焼出て翌二月朔日卯の下刻迄昼夜十三時の間
ふ東西九十八九町南北凡一里二三町焼町数凡千五六百
町長延ふして四拾四里余也焼出しより始終并ふ心得
咄ふハ万民千代乃礎初年詣ふどゝく草紙ふ有バ略之今

辻能狼藉

嘉永三まゝ六十三年ふ那る人

○元禄年間京町奉行ふ改乃うゆ京都町数千八百四拾七
町千四百五十町ハ地子免残り八年貢地之家数四万五千八百七十七軒と有其後百
年を経る間ふ新地追ゝ建続當時ゆ凡京町数千軒爰ふ京
都大火の前日正月廿八日和泉式部誠心院寺内ふて堀井
専助辻能を致居けるふ耶鄭乃能半過樂ゆ終る頃常刀乃
壮士四五人ゆり〳〵と這入ゝ舞壇へ上る見物ゆ志いかふ
と見る所ふ能太夫共ふ舞或ゆ着座の大臣の冠を落し理
不盡狼藉甚しゆへふ太夫其外役人ゆ半途ふ樂屋へ逃入
もバ作り物巻抔を踏碎きゆと叫び笑ひて何地とも那
く去り如是何の所意たる事を志らず女童足弱乃類ゆ巷
く逃去ぬきども壮者ゆ去ふてもいかふる事と始終を見

んと皆羣りて見物しけるふ如此是ふ依て其日乃終を非きをふく相止ぬとて則東洞院六角下る町乃某見て返り是を語る大変ふくバ色〻評判をべき事ふまじ〻其又翌日大変故ふ其段ふてをふ〜誰ら是を評をる者ふ〜怪異の事へら〜と幽遠雑話ふ出たり

皇都午睡中之巻終

827

皇都午睡

下

328

皇都午睡下之巻目録

一白氏文集
一淡々乃示教
一十干十二支
一定頼の和歌
一大佛餅屋
一市中ハ中を行
一毛抜鮓
一赫良の狂歌
一百翁の茶會
一長生殿の繪
一紹益吉野を悼
一輕卒者の連歌
一金烏玉兎
一和泉式部
一江島屋其磧
一道路ハ左を行
一曽の笛
一藤公の笑疾
一冨士と達磨の畫
一月見の松

一 饂飩豆腐
一 支考の俳言
一 蕉雨の發句
一 無名乃短策
一 内科外科
一 商人の学問立
一 國姓爺弟
一 大男小男
一 夜詰の太鼓
一 義孝の連歌
一 徂来乃戯言
一 下谷の爭論

一 李白仲麿を悼
一 年中乃雨
一 行脚小句を買
一 光次
一 基俊歌を盗まる
一 短文の書状
一 自鳴鐘
一 兼良の元服
一 不出門行の詩
一 戴塚三所小有
一 磯の浪
一 狐川の名義

一 潘谷橋姫の考
一 名月ハ俳諧の題
一 泊船寺住持
一 大佛の御首
一 芦辺殿の婢女
一 青砥乃續松
一 三船の才
一 重衡盛長
一 六德帳記
一 蔵風の子
一 かんかんの四字
一 馬術小雅ホ

一 北ホくべ殿
一 辻能の道成寺
一 古今傳授
一 七瀬川の秀句
一 故人の句を詠
一 山臥の德政
一 雑波治郎
一 図兩の歌
一 内舎人老黨
一 馬の詠たる歌
一 条平内兵衛
一 羯广乘親の面

一 雅人の傑
一 竹田近江
一 鶯白魚
一 於菊蟲
一 猿蟹を嫌ふ
一 水引
一 放島の試
一 和歌小師ふ〜
一 差合くず
一 三句の渉り
一 餓鬼はむ〜
一 佛々佛師
一 南方鑷
一 春日野の蟲
一 頼政の亡魂
一 鹿の時立
一 置鼓
一 烏貝
一 ちがじ物
一 南面の障子
一 二万堂西鶴
一 記録表帝
一 兄弟の爭ひ
一 運慶の口傳
一 鴟鴞の文
一 日本ふ象を渉
一 師直の歌を譯
一 勢語源語の評
一 西行の哥
一 信西豆
一 楊貴妃櫻
百六ヶ條
一 長範の詠
一 清人發句を譯
一 兼好を評す
一 解脱上人
一 幽齋の狂歌
一 普賢像
一 利休織部の詑

331

皇都午睡下之巻

白氏文集

○嵯峨天皇河陽館ふ御幸有て御製乃詩句を參議篁ふ示し
給ふ閉閣唯聞朝暮鼓登樓遥望往来船所存申べきよし勅
而已有るふ篁が曰聖作いとゞく遊さまゝ但願くバ遥ふ
望の遥乃字をかへて空望と改させ給ハゞまゝ絶唱と
申べくゝゝと申さゝ有るに帝愕然として驚かせ給ひ
汝もとより此両句を知きるやと仰らるゝバ篁謹て聖
作の一聯臣いかゞ而らかゞめ存じゝまゝと答奉る帝重
而くの返まふを此二句を白樂天が句ふてもとを空望と
而ゝを汝が才を試ミんが為假ふ遥望とかへて示せし

紹益吉野を悼む

〇灰屋紹益を智恵小路上立賣ふ住く和歌をたしなく貞徳と友たり亦蹴鞠茶事ふ悉敷析ふを召まて高貴乃席ふと出ある事有とぞ若き時六條の廓ふ遊びよく野を根引せく時父の不興を受轉く下京ふ廬求めく夫婦住ゐ事ぞ父一日他へ行く飯るき雨降出ゐまバ路傍の家ふ走り入く晴間を待此内ふを炉ふ釜を懸て閑雅の人の廬と見ゆ主乃留主と思く〳〵て女房のいと潔しきが此方へと請ドつく薄茶を立く出く〳〵ぬ其妻ちづまよぞ茶乃手前迚所ぞ見馴

ざまバいとゞ心おきせゞを一禮をのべ雨も止ゐまバ立帰りく次乃日ゐりく〳〵のよく人ふ話まバ拾まゐそ令郎紹益乃妾ゐまと其家を子息の隠宅よと告父ちゞめく志ぞて其奇偶を感悟く遂ふ紹益が勘氣をゐるく吉野を引とぞてめあハせく〳〵ぞ程遠からぬ下京よ其子忍び居をと志らざるハ其頃豪富ゐぞく事ゐる屋く〳〵と云り吉野を寛永八年六月廿二日ふ没す本融院妙供と法号す此時紹益哀悼の歌を都をバ花ゐき里と成くふ々ぞ吉野を死出乃山ふ移く〳〵紹益が菩提寺を内野新地立本寺ふ紹益を八十一才ふく〳〵て没く元禄四年十一月十二日古継院紹益と法名す是をもて数ふまバ吉野が没年を紹益が廿歳の夏ふ然まバ吉野紹益が婦とゐり程ぞく十七八才ふく身まか

淡々の示教

まゝ物形るべゝ紹益が玉を矢へるの恨前の歌を吟じて
ヒ志るべゝ吉野カントウと蟹乃盃の事ハ人口ふ膾炙ゝ
く世ふ名高ゝ

○俳諧師淡々（半時庵）門人冨天（テン）ふ贈る示教ふ詩を鑓薙刀和歌
を刀連歌ハ脇差俳諧を相口也並べく短刀ハ利遠く見を
と可をるや然もども一機よく胸を定めゝへゞ時ふ望く
至く功有為氏が館ふく□公を弑ゝ荊軻を始皇乃膝近く
寄たり此時鑓長刀脇差形らバ側へよる事ふるまゝ短刀
を圖ふ巻たまバ古特一念存分を形したり此時秦王の佩
たる劔の長きよりたゞちふ抜事ふとゝ夏無旦が藥嚢
形くバ則絵るべゝ長きとく頼まゝず恐るべからゞ能つ
らぬき心を定めゝ得を藝道何ぞ何をと云事形ゝ唯見性

ゝかふ其的を指べゝ用ひゝへバ俳諧を卑俗ふ
落る事をやゝ嗜て高きふ心を置バ神代乃教へ倭朝の道
をとゞむべきゝさまバ中無俳道乃祖花咲（サキ）社乃貞徳季吟
芭蕉翁其角引下く陋老冨天道統たり時今清得（セイトク）舎此秋押
花（クワ）を以く業を行ふ黙格（ヒ）ミ家説の舊例式新古式本式及
褒貶ミ會摺物三ツ物撰集笠着古式ミ會ふ普く教ゝ上を
能慎ミ克守り遠慮可有之ゝ他門もとより正統有べゝ不
知ゝへバ不論ゝ凡余る程を教ゝなまバ日々執行の外を
有間敷之序跋（ヒ）撰集三章の雪月花おも志ゝ浦くゝ不才乃
病老文章も書忘またり句を一句一稲の穂の如ゝ芦の穂水
かゞみ坐の句初尾花と置さく覚ゆもとゞも若ゝからんと
知ゝ竿秋へ凡領を譲りゝ時を只夜の花雨の芦と申待り

軽卒者の連歌

〜此芦の穂を芦乃芽の穂と祝〜ふや鶯乃人
來〜といとまゞ怠らゞ一道乃清暁梅咲冬春夏乃實秋乃
紅葉のをみ出るがゞ〜東〜かゞやき栄へ多まへ半時庵
ふ斯

○或人連歌一順の月次ふどもやらゞを浦山〜〜思ひ我と
ちと稽古せんと思ひ立宗匠する人ふむりひ大体一句の
仕立ハ〜ふり形る心持ふく工夫致〜ふとんやと尋孫るふ
さまバ此道を学んと思ハゞふと深くも崩きよ〜如和歌
の浦なきバ詞短くきヲ多くバ心をまがふ物衣きま花奢
風流ふはく様ま有べしと云彼人聞と同じ〜早合点赤り
てハ一句申さん首際や二季乃彼岸ふ茶香杵と云たり志
く心をと問きれバ水をゝるふ首際ふ及ぶを深々き

十干十二支

金烏玉兎

バ〜物の衣を二季乃彼岸花奢風流ふるを茶と香つくや
うふを餅はくきふと云きく宗匠返答ふくて腹をかゝへ
ぬ

○甲乙丙丁戊己庚辛壬癸を十干と唱へ〜子丑寅卯辰巳午
未申酉戌亥を十二支と呼ぶを當きり婦女子ハ十二の之
とゝ云り五性ふエトニツ宛有〜十干を云〜兄弟ふく木
の兄木の弟として兄弟〜十二支を別ふ〜て十乃エトふく
十二支をいふふを〜ゞと志るべ〜

○月の中ふ兎を書日乃中ま鴉を畫（木金火水 東西南北 青白赤黒）ふく土と黄ハ
中央〜北を子の方ふく南を午〜東を卯ふ〜て西を酉〜
日月を東西ふ象りて月ふ東方卯乃影移り日ふ西方酉乃
影移るを畫〜ものあり是ふく金烏玉兎乃を弟も明白〜

定頼の和歌

手ずかきおとなきどもを是をふいる人ぶりしを百人禄
といふ書ふ出たるより人志る事を得ぬ

○權中納言定頼歌ふエミふ能書の聞え有し人之一條院大
偃川へ行幸有々る時定頼父乃公任卿とゝふ帝の供奉
ゝて各歌よミ〳〵奉らるゝふ公任卿乃心ふ定頼よき歌
をよまもかしと念ど居らまし〳〵ふ講師次第ふ歌をよみ上
る定頼乃歌を公任耳をとゝ〳〵聞もゝれば水も波く見へ
渡るか波大井川とよみ上々もば余りよ手筒ふる事を云
出さも多ると思ひ〳〵公任卿顔色かちりるふ岑の紅葉
ゝ雨とふもど〳〵詠終ぬ事ゝれば公任卿思もゞうちゐまも
多ぬとぞ

和泉式部

○和泉式部播磨書寫山乃性空上人ふ贈りたる歌拾遺集ふ
入ぬりくゝきより〳〵き道ふ迷入ぬゞきもるかふてゝ
せ山の端の月是ゝ法華經ふ從冥入冥永不聞佛名といふ
文ぬ其心を詠たるふゝ世ふ名高き歌之式部乃本名を
弁内侍と云り

大佛餅屋

○京ふゝ大佛餅流行し爰彼所ふゝ商ふ中ふ四条畷ふ此饅
頭を鬻々る近江上味と云者有或時店先へ乞食来りて饅
頭を十ばかぬ賣りてゐもと云ふ主人出来て非人ふゝ
商ひせゞと云乞食の云るゝ我ホ迚も同ト人之銭をもゝ
買ふふ商ひ物をいかで賣ざるや此理りを聞べしとて詈
うゝも共主人ゝ聊挨拶もゝ〳〵て居たりゝるゝ詈の事の
餘り裂〳〵もば主人店先へ出さゝば其譯申聞すべし下
ふ居もとて乞食ふ向ひ汝ホおとき乞食ふ賣もぬと云其

子細を乞食乃身分とゝてケ様ふ菓子を食んと思ふを不所存之無益なりとも耳ゆゝしバ閑置べゝと乞食が冠ゐるを拭を取らせ我商へる饅頭を尋常の製ふゆゝしず上品ふ造りゝ高貴の方へを奉る菓子也乞食の分際ふゝ食べき品ふゆゝしバ汝若吾家乃菓子を食たくを人並ゝの者と形りゝ後ふ求めふ来るべゝ汝諸人の憐ゝを蒙り僅ふ露命を繋ゝ身を以ゝ銭有を迚上菓子を食事のゆるべきや世を恐まざる不届奴速ゝ行べゝ須臾も店先を塞べからずとゆたく叱りて追立ゝまバ乞食ハ頭を抱ゝ逃去りぬと此商人一見識有人之

江島屋其磧

○余が著述の傳奇作書ふ出せゝ江島屋其磧を八文字屋自笑が代作をせゝ市郎右衛門と云書林ふるが始四条御旅町ふゝ大佛餅を鬻て業とゝなりとなきバ前ふ云近江上味の氣象高き所相似たり江島屋其磧乃菓子店近江上味ふゝを為るまゝくや暇と御旅町と書誤りゝ欲とも思へり其頑自笑と絶交ゝて悋ふ書林をさせ自作の冊子を多く板せゝふ不幸ふゝて賣まゝ其磧が才自笑ふ増まゝも其名自笑が右ふ出る事ゆゝまゝ幸不幸を是乎哉

○

市中は中を行

路乃堅横交りて曲る所を真中を行べゝ然らざまを曲る角ふゝ人ふ行當り牛馬又を荷物ゝ持ゐる者ふ出會思ゝ

道路は左を行

ぬゆやまちをす是互ひふ向ふが見へざまバ之絶二三歩をいとひゝ馬卒販夫乃類ひハ必曲る所を行物之ゝなゝ

よ至心すべゝ

○路を行人互ふ左りふよ至ゝ行を常の禮之斯をまバ牛馬

毛抜鮓

口付の者も其付たる方ふ當まをのやまちの形し薩州ふく
を夏を自日の照方へ行日陰を人ふ讓る冬を是ふ反すと
道路を讓るの禮至まをといふ屋し宮寺の開帳ふ參詣道
下向道と分多るを滞らせぐ怪我のやまちの形きよふ乃
計らひへ

○東都乃鮓といへを皆掘り鮓ふのミして京摂の如く切鮓
ふし家躰店上方ふて云店へ の製を格別安宅の松の鮓安宅ハ御舟藏
の地名松五郎鮓へ 兩國與兵衛ふの製を念の入たる物へ竈河岸
ふ笹巻鮓とく一宛笹の葉ふ巻く賣家有此名を毛抜鮓と
呼ぶ上方者の口ふ合へを毎度求めあぐく毛抜鮓とを魚
の骨をよく抜たる故呼ぶりと思ひしふよく考見まをよ
ふ喰ふとの謎あるべしと悟りぬ

○故一噌又六或諸侯方ふく能有し時融を吹しふ俄ふ雷動
しくまバ盤渉を改めく黄鐘ふ吹ゑり人々如何の事と云
しふ雷の調子盤渉調乃る故吹かへるとへ道ふよりく賢
し

噌一曳の笛

赤良の狂歌

○江戸數寄屋橋辺の或武家を恨ミく其人の形を藁人形ふ
て拵へ眼ふ大ふる釘を打て其門ふ捨しを一のろふとて眼
ふ大釘を打とても耳でちけまバきく笑ハ形しと四方の
赤良祝ひ直しくまバ其後耳へ打く捨しかバ一大釘を耳へ
打くく耳潰まを聾ゑちまバ猶きか必形まと詠ゑり扨其後
又骸中へ惣釘ふて打しを捨しかを一身うち皆釘を打とを
何のきかふ糠ふ縁ふる藁人形じやと赤良ゞ句ふく捨の
此ちを捨を形ゑくゑ

藤公の笑疾

○藤公時平笑疾ありて一時朝廷ふして此疾發りいかふもすべからず其日の政事を菅公ふゆゑ孫く退きゐふとあんふ和ふく權を爭ふるゝ敵手ふあひく如此をさあ於止事得ざるべし五雜俎ふ陸子竜有笑疾古今一人のみといへると同じかなくふくと珍らしきあるべし只世ふ笑中風哭中風といへる物有て是ら實ふおかしきふあるべ悲しきふあるべ内より催して詮かさあきへ藤公も子竜と此甚しき物欲天神記と云淨瑠璃を增補して天滿宮菜種御供乃狂言の時菅公尾上菊五郎祖梅幸流罪とあり時平叶雜助小六玉獨り紫震殿ふ残り玄老の道真と謀るふ手あしをを心地よふと笑ふを幕ふ志さるを此時平の笑疾を脚色志さる物ゝ今ふ笑ひ幕と云作者並木十助並木吾瓶の師ゝ歌舞妓狂言ふを書

百翁の茶會

冨士遠磨の画

838

見だけの力を有る物ゝ

○飛喜百翁ゞ利休を招きし時西瓜ふ砂糖をかあく出しゝを利休砂糖のあき所を食く帰り門人ふむかふ百翁を人ふ饗應をる事を弁へば我ふふ西瓜を出せしゞ砂糖をかあて出せ是西瓜を西瓜の味ゝを持し物を似氣あき振舞ありとて笑ひ侍りき

○有る人淇園ふ画を学ばん事を乞く僕畫を学ばん思ひ立しハ他の物を画く事を求めず多ど冨士と達广とのみを畫きたし扨をも上ふとなくん事を求めず冨士をいふふを冨士と見へ達广をいふふも達广と見ゆる樣ふ畫たしと云り此詞尋常ふ聞ゆきどもふとおもふあし何藝ふよらず此所をよく弁へ知る時を過不及有るべからず

長生殿の繪

○白石先生陸奥洞巖老人へ長生殿不老門乃画を望まし書翰のうちふ長生殿裏春秋冨不老門前日月遲を本朝の人乃句ふくゝ間画乃景色も本朝の如く有度物ふゝ昔本朝大内裏圖のやうふ東廓山乃文珠樓門乃ごとくゝ中ふ門をかまへゝ左右ふ塀も設くゝ中門ふを格子も有之塀も左右ふゝゝ地取繪様のごゝら増如此ある望ふゝ四時をおめゝへバ春乃方を春乃諸木遲速を撰ゝ秋の方ハ下より見梢を見せ何ども雲やりの上下ふ見へゝ様春ふを來燕秋ふを來鴈前ふ白鶴三ツ計但シ雛二ツをかまもゝゝまんゝ畫様を真艸行法交へ細密ふ賑やゝある所もさゝまと仕ゝ所も可有之ゝ其段御筆意ふ任せ色ゝ彩色も同しくハ輕き方ふ可有之ゝ欲俗ふ入俗を脫しゝ望ふゝ額字の幸板をいゝゝふもゝもゝまハ上の方隱し度ゝ泥金可然ゝゝゝ春秋冨日月遲ハ上の方四字ゞゝ隱さゝ心得ふゝ下をはまま〻上の明ゝがおを〻ふく可有之ゝゝゝ雪舟の明朝ふく畫まゝゝ冨士三保乃圖中天ふ冨士をいゝふも根張廣く雲頂より出ゝ体ふく殊外引下ゝて足柄箱根前を三保西を薩埵清見等の山〻浦〻を殊の外小さく書まゝ拵まふく冨士乃三國ふ蟠りゝ躰を其侭ふ見く奇代乃物ふゝ意匠乃程感ゞ入ゝ事ふゝ不老門の圖雲やをゝ隈どりふく中を書切ゝて殿も門もさのみ大からぬ〻して大形る心を含ませ度右の如くふ存寄の圖法目ふ懸ゝ本朝の鴟吻(しふ)をくつがゝと讀來りゝ心得ゝことふ存ゝふ彼大内裏乃繪ふ今の鯱と申ものとを以の外ふ違ひゝて皆乃形ふくゝさを

バさ様クツガタとは中と存ゐ只今を制法を存ゐとめも
是非〳〵不及是非ふ事ふゐり右を要文を摘書画を筆と
る人のみち〳〵ず書する人の意をへと雅俗をかき〳〵恥ら
しき物こ

月見の松

○いはの項ふり有々む殿下の君立入乃去ル画工を召法禊
ふ須广の風景を画書べ〳〵と之即はかふまつを〳〵参らせ
しふ能出来たり但月見の松今二本足らでやと仰ゐり彼
工を須广の近辺辺りふ産ま〳〵者ありきばいかでゐ此処乃
事ゐやまりぬべきと思へども心濟雖く其後國ふ帰り須
广ふ至り月見の松を数ふるふ十一本有我畫て奉り〳〵を
九本こ不思義ふも恐入て御内の衆ふ伺ひ〳〵かどと只打
笑ひ〳〵語らもず年を経〳〵又差り〳〵ふいつの項ふり忍び

の御遊ゐを〳〵よ〳〵思召こめらま〳〵事と密ふ差り〳〵驚入
〳〵と即其画工乃物語形り〳〵と之

餡飩豆腐

○豆腐を太閤秀吉公朝鮮征伐の時生捕〳〵朝鮮人の教へ〳〵
物こ唐土ふ〳〵淮南王製〳〵初〳〵めへ淮南王と云キラズを
雪花菜といふと共其砌を豆腐ふ紅葉の形を付〳〵紅葉(かう)よ
う形〳〵でを遣ゐぬと云〳〵今ハ公用◇ゐ〳〵やゝ思ひ〳〵
ふ付〳〵定る事ふ〳〵餡飩豆腐を細く切ふを双物を左りへ
〳〵と切〳〵行〳〵ゐ〳〵常の通り右へ切てを豆腐双物ふ付碎
くるこ猶々細くせんと思ふ時を心太の如く突出すこ尤
湯を熱立〳〵玉其湯乃中ふ〳〵突出すゝ〳〵と云り

李白仲磨を悼

○遣唐使乃事をよはゐ船と歌ふをよ処ゐ阿倍朝臣安磨を
大使と〳〵藤原宇合を副使と〳〵て唐へ渡かゐさまゝる此

時下道の真備（後ふ吉備大臣と云）安倍乃仲麿を留学生として遣はさる仲麿を唐朝乃風をよ沐あびて唐ふ残留此後藤原清河を大使として大伴古麿と吉備公とを副使としてつかはさるに時仲麿ふ命じて今度の遣唐使を接待せしめらるるに清河日本へ帰らるゝ時仲麿も帰朝せんとて玄宗帝ふ暇をこひて帰らるんとしたる時平生交を結びたる詩人文人ふ書残さるたる仲麿乃詩有文苑英華唐詩品彙ふのせ為り明州と云海辺ふて海上乃月をゝ[illegible]ふまの原乃歌をよまる明州を出船せらるるにたるふまからび海上ふて雑風ふ沐ひ安南國ふ漂着しるるに清河と共ふ再び唐朝ふ入らるぬ此時仲麿日本帰朝の海上ふて雑風ふ沐ひ溺るる死したりと唐土ふ風説有るるに李白を哭して詩を作り

年中の雨

支考の俳言

しに其詩を日本晁卿辞帝都片帆百里繞蓬壺明月不帰沈碧海白雲秋色満蒼梧晁卿とを仲麿唐ふて改名しるに朝衡と云ふる朝の字と晁の字と其音通ずる故乃るべし

○

俳師支考の云月雪花郭公を君ふもいらば父ふもいらば我ふが為乃慰とのゝ糞とも云味噌とも云人参附子とをいがめる四季ふ心易き出入の者とといふべし賞てよき時を[illegible]おかしき時を識てを遊ぶべし心ふ止めざるべ氣一物の人ことに月花と腹を立ぬ物ことなり

○

信貴の毘沙門堂ふ四季連歌乃句合有其中ふ五月雨ふ年中乃雨降尽しと云句有何某乃大納言関しに召るて何者の申たるふか此句の主を尋ぬべしと沐ひたる時高橋某を乃者を問ひたるに沐ひたる村長の申たる句ことに志

き消息して京へ出るあゝバ参るべしとの事ゆへかの村長もさゝ京へ行御館へ上ゞしふ逢ひて物語せんとゝ一間ふ通ト玉いを風流乃面白雲の上迄聞へあんこと社いと有難ゝきと云ふ大納言と四方の話ゑゝ扨尋玉ふゑ年中乃雨といへる趣向乃おとしゆく覚ゆるからゑ其句意を聞度侍きバ逢申たりいかゝ成る故事や有てかく申せしなゞと有ゝきバ村長答へゝ云ゆう別ふ故事と申もいゝなゞず只五月雨のきのふも降ゝふもふゞ續ゝ翌も又斯降くらしふを一年乃雨も降り尽しぬべきと思ゑを申たるよゞ外所存ぬくゆと申あれバ面白く覚ゆるゝとゝ入玉ひぬ村長ゞ帰りし後高橋出ゝ尋ね参らせあれバ大納言の仰ふさゞとてゑ磨ゞ思ひしとゑ違へり五月雨ふゑ四時乃

蕉雨の発句

如く雨のさま色〳〵ふ降りゝるゆへ春雨の淋しきふくらべ夏の夕立ふさぐゝ秋の雨の物凄きふかうち冬の雨乃寒きふも譬へたり此事古き物語りふとゆきバそれを志ゞたる句ふやとゆかしく尋ね侍ゝども左をあくて只雨の降り尽ぬのミ作りし事故此無とゑ思ひ侍りぬと仰らまし

○余ゞ俳友信州乃蕉雨以前四季の句書をたせし中ゑ五月雨や時雨村雨春の雨と云句ゆゞ此殿乃古き物語とゆゑゑ清女ゞ枕乃草紙ふやからん俗師鬼貫の云未熟の人乃俳諧ゑ春雨めと五文字を云出し時春雨先ふ出ゆといへバ秋さめめと付かへ侍らんと云社うたてゝゑ春の月ゑくゝ初るより朧立ゝ物ゑゝ扨ゝし夏の月ゑ灯を遠く

3443

無名の短冊

行脚に句を買ふ

玉〳〵詠め深し秋の月を窓ふ軒ふ海ふ川ふ野ふ山ふ詠有
冬の月を忘とむ〳〵の雲乃雨もぼ〳〵行隙をて〳〵ていはが
し春乃雨を物籠り〳〵寂し夕立を氣晴て涼し秋の雨を哀
ふ〳〵淋し冬の雨を底より淋し鶯乃関部公を待詫るあはゝ
詮ある べゝも四季折〳〵乃草木もとゝ〳〵弁ふべし と有蕉
雨の句を則是ゝり大納言乃詩を古く蕉雨を近世の人ゝ
きバ是非ゝゝもど此句を彼大納言殿ふ見せた〳〵バ無か
し褒美ゝらんとものをふとのゝまゝかし

○余が幼き頃俳友乃一老人有暮三と云てき迄聞へたる句
を吹き人なもど癖物ふ〳〵おかしき人ゝ俳諧行脚一人来
て暮三乃方ふ宿り日毎ふ諸々の詞宗家を訪ひ一日俳席
乃通題ふ五月雨の佳句詠出一座乃評よかまゝきバ帰り
て主人ふ語る其句を降中ふ降出す音や五月雨主人大ふ
感ゞ古人五月雨の句数多ゝもどもかふも打付ふ詠たる
句ゝ此句を我ふ責よといへども行脚をかゝる句を詠
出ん為の修行者ゝれバ責らゞと云折節更衣の時節ゝれ
ど旅の身ゝもバ古着乃侘ゝ〳〵容甚見苦し此句を我ふ責
て新ふ衣を更よと一圓金ふ〳〵求め袷摺物をすらせ是ふ
さる行脚よ望求たる句ふと前書し〳〵降中ふの句を社友
ふ配り此摺物のち〳〵バ望〳〵先だけい我句ゝ他所でも自
身詠たる句ゝもバ自由ふ書給へと 云しとおかしかゝ
らずや是ら風流の上乃滑稽ゝるべし

○源俊頼朝臣を歌をよむふ容易ハよますず心を入〳〵案ゞら
き物ふ感ぜる事ゝ望〳〵よき歌の出来たる時を是を書付

内科外科

光次

ゑ〳〵さもと思ふ時出して人ふと示さきたり又人のいまだ読ぬ新奇の事をよみ出たる人〳〵俊頼常ふいたるゝふを和哥を判ぜる者十徳を備ふるふのうざきバ能てざるへいたゆる徳望門地明弁強記の類〳〵と云り徳望と名人ふめざゝも仰がるゝ也門地を家柄あり明弁をのきらかにゝかつ事強記を物覚へ乃はよき事〳〵或時法性寺殿ふ〳〵會有るゝふ俊頼奏らもたり兼昌講師ふ〳〵歌よみのぐるふ俊頼の歌ふ名を書きざりゝきバ志ゝ〳〵見合せ〳〵打志ぢぶき歌どして御名を以かふと志のびやかふいひゝを只よみ給へと云きゝれバ讀上ゝる其歌はうの花を〳〵なる志〳〵がゝもゝゆるうゆ雨賤が垣根と（後年）（頼寄）よゝ名ふゝ川と書たゝを兼昌志きゝふうゝ歌づき感〳〵ゝりやゝ〳〵此歌乃中ふ我名をよみ入らもたきバゝざと名を書きざゝ〳〵もゝ

○小判寺歩判ふ光次の字有五世後藤徳乗ゞ名乗之四郎兵衛家を世々大判座〳〵徳乗在京の節御用ゆるゝふ〳〵江戸へ召もゝふ病氣と申立名代ふ家来永井庄右衛門をさゝ下に此時初〳〵小判を吹ゆ様ふゝの事〳〵庄右衛門下りて御用承りゆまゝ直ふ庄右衛門を願ゆゝ小判座ふ取立後藤の名字を譲り後藤庄三郎と成今以〳〵相続之徳乗初〳〵承りゆゝと故光次の字を設け今ゝ其侭ふふく〳〵

○医師ふ内科外科有科ゝ志ゝ歌をゝかつ〳〵内外を別ふゝ〳〵療治をゝ〳〵然もゝゝ内外元ゝゝゝ〳〵互ふ志らゝんバ有べからゝ

基俊歌を盗まる

○藤原乃基俊を生得文才ありて和歌をよくし又兼て詩をよくせられど人のほこりて當世を見下しとかくふ人を批難するをとを好まれざるを付てそれ程得らるゝ事なかりし或時人と和歌を詠じあるふ基俊傍ふよりて深く歌を案じ入て我ちゝび聲ふかうしてめざましき迄ある紅葉の角と吟ぜしをたゝを其座ふ有々る顕仲入道是をうも関てかたゝふ居たる右馬助何某が歌出来うねて歌くふさゝやきて以ての早く此上乃句をよみ給へて出さまよと教へらるれば右馬助よろこびておしへのごとく上乃句をよみて我歌としてさし出したり扨一座うめよみ果て披講の時右馬助もと下籠たるふよりて先此歌を講じられば基俊関て大ふ興さ感たるうきまゝを顕仲あゝ云ふ関居らるたり扨次と
ふ講して上座乃基俊の歌を講ずるふ彼右馬助と同じ下乃句ありうをば顕仲さざと志て如顔みて會釈して右馬助をよく思ひよくもたり歌仙たる基俊ぬしと同じ下乃句ある事今日の名誉と申さるれば基俊を我歌を盗み聞もたるとを思ふ〳〵いよ〳〵不請の事しきと是と基俊兼て人くふ中ふ〳〵かりをふ由へ行きむるたるこ

よにせよ

○物を無用とふ詞のかりをよりふせよと云ふ塩と戸ざしもよりや駿河ある清見ヶ関を三保の松原此歌よく心得ぬべし三保の松原の面白きを詠ずれば関ふ及ばず行ばも清見ヶ関をよりふせよとよめり

商人の学問立

○江戸ふ材木商賣の伏見屋戈治郎と云者有常に学文だて
せ〳〵もしてゐる時手代ふ物云付るとき深川松丸太長短下
直調と云しを手代を関則ぬ詞ふ〳〵心得ぎりしを汝文盲
ありとき大ふ呵りしとかやかゝりの心ゐへ材木屋仲
間及び隣家の人とも不和ふ〳〵有しとゝ

短文の書状

○さる強氣乃武士京ふ居て知音の僧へ遣したる書状ふ送
り進ぜる十八本松茸恐惶謹言又國への奥ふ一筆啟上火
の用心子供泣を於馬肥せしとと書おくるもし武夫の実
情ゐ只入用乃専斗かぢへたる是らも俳諧ふとなて是
を上たる働ぶゝずやと大江丸舊國を申さもし〳〵

国姓爺弟

○長崎紙屋町田中七左衛門と云者ハ大明乃鄭一官が子國
姓爺が為ふを弟鈴舎が為ふを伯父ゝ父母とゝふ異朝ふ
〳〵韃靼人ふ殺さもしふよて渡海の訴状奉りて来朝せし
を延宝七年八月の事なて

自鳴鐘

○ゐる人時刻を知らん為ふとて自鳴鐘を求めんとしるを
其妻是を止めて云々るハ自鳴鐘乃為ふかへりて時を失
ふふと多からん止ゐへといへをさゐゞバ庭鳥を飼べし
と云ふ其妻又止めて云々るを時刻を人の上ふゐて汐乃
満干を是とおぼしかるべし自鳴鐘を便りとをるを勤ふ
怠る者の弥を事ゝと夫を諫め終ふ鷄をも飼ずありゆき

大男中男

○南部信濃庵國方より石力雲藏とて丈七尺五寸杉臺右衛
門とて長三尺一寸ゐる男を珍らしとて連玉ひし雲藏が
右の袖口より臺右衛門髣入て左の方へ抜出し誠ふ過不
及の違ひゝ在江戸の中邸ふて人ゝふ見せたまひしとゝ

兼良の元服

○一條攝政兼良公十二歳ふゝ御元服有し時虚空ふ何とゝ
ちまゝず怪しき声有て猿のかしらふ烏帽子著せ市りと聞
へしかゞ頓て縁の方ふ走り出させ給ひて元服を未の時
ふ傾くと附させ給まへるとゝ思ん此公の御顔のかゝ星猿
ふ似させたまへる故ゝとかや幼き時よりかゝる俊才也
へふ社著しゐふ書籍世ふ多く傳へ星

夜詰の大鼓

○牧野長岡候ふ仕へし吉田助六ハ大倉流の大鼓をよく打
鼓年泊り番の節華をよくほうゝきゆ様ふ帛紗ふ包ミ
夜具の内ふ入もしゝ或夜君侯夜詰の節ふと謡を諷ひ給
ひ夜ゞ更ずハ助六ゞ一調を聽べきゞもまや九ツふとゝ
ゝべし今よゞ華ふど取よせゆハ遲くゝるべし残念ゝと
のたまひしゆハ御所望ふ注産ゆハゞ仕るべきよし申上

不出門行の詩

ゝもバ急ゝ華出来まゞきかと所望ゝるまゝ當番の節
ゝ急ゝ市用もまゆ星雜かゞしゆへ常ふ持参仕ると申
て早速取出し打ゝるゞ一段よく出来しとゝ褒美ゝゝる
其後又所望有ゝるゞ一度ゝ市用相立申ハ車故夫よゞハ
泊り番ふとゝ持参不仕ハと申ゝもバ是も尤ゝ所望の為
びゝ間ふ所ゝゞ市つゝ珍らしかるまゞとゝ弥賞美せゞ
まゝよし此助六ゝ和歌も心が市し者ゝもバ常ふ雅ゝる
咄しも有しとゝ

○菅原道真公乃右大臣の官職を停くゝ太宰權帥ふ左遷せら
るゝ乃地ふくも不出門行と云詩を作星くゝ何方へも立出
たまゝず都府樓纔看瓦色觀音寺只聽鐘声此一聯ゝ白樂
天ゞ遺愛寺鐘歌枕聽香炉峯雪撥簾看と作りしふもまさ

義孝の連歌

ぬべしと昔乃博士ども ハ賞ド功へ申さぬ

○藤原義孝を謙德公の三男ふ〻或年一條院の御前ふて人〻連歌しゝるふ秋を只夕間暮社あゞ彼〻ふと云句の出来ゝりゝるを人〻聲〻ふ詠じてたび〻ほめありゝきど是ふ付る人とあゝ申るふ義孝の少將十二歳ありゝるが萩の上風萩の下露と付らもゝれバ人〻驚て賞歎し功へ申中務といふ歌よみの女房上東門院へ申上ゝきバいとさまかゝる下の句ふゝ殊ふ有がゝ聞ゆるハ人丸赤人又昔のめでゝかゝ申し人〻乃再び生きたる彼〻んと仰功〻〻より〻中務もゝゝゝふ申ける萩のを風をとづるゝゆふべふを萩の下露をぞまし〻ける此事を聞伝へゝ其頃を天下ふやゝ〻きゝぎゝと申功へりゝるゝ彼此

義孝を

義孝をのちふ疱瘡の病ふゝ失〻ゝゆひ賀縁阿闍梨と申僧の爰ふ義孝昔契蓮華宮裏月今遊極樂界中風ゝ彼誦したまひゝるゝと之此義孝の御子を能書の名高き侍従大納言行成卿ありゝ

○筑前國濱男と云所ふ耳塚有神功皇后三韓を討たゆひし時其國人の馘を埋ゆひし所是本朝馘塚の始ふ〻此後源の義家朝臣奥州乃戰ひふ打勝河内國ふ馘塚を築き耳納寺を建らる是第二度之豊臣公京大佛ふ耳塚を築かゝ〻を第三度之耳塚を左氏傳所謂京觀之と云り

○正五九月ふ寺より祈禱の札〻〻持来ゝぞ徂來先生其侭いたゞき〻居間ふ張らもし〻と之門人何と〻札をを望ゆふと問へを是も寺の役ふ〻精を入ゝ〻ゝの之簾略ふせ

馘塚三所ふ有

但徠の戯言

磯の浪

んやと云まゝとゝ

○光源院殿京都四條の道場陣を取ほ産有し時夜九ツの太鼓を寝惚七ツの時打々ほ公方よほ御使ほほく番乃僧を召ほ定く折檻ふ及びおんと震ふく参りゝまゝバ様子ほ尋孫有つるふさんゝ深く睡ほ入目覚仰天仕ての故とほほの侍中上々まゝバ案の外ほ機嫌よくて此寺乃時のたいたゝ磯乃浪おきしたびふ我打といふ形ると狂奇を下さまゝとゝ

○三條三光院殿十六歳のほ時禁中ふく懐旧と云題出たりつるふ幼稚乃沸身ふゝ古今の雑題あまゝバ何とと讀ふくしとほまゝども一座皆面白き顔ふゝ形し誰題を取かへよまんと云人ふうりしふ程近き我昔きゝ哀しきふ老ハふ

下谷の爭論

かゝるなみゞ形るらんと遊ぎさまゝとゝ地

○江都下谷ふく或浪人蹲りて小便せしを待二人話し乍爰を通り一人乃侍浪人乃刀ふ行當りしかどきゝぬ体ふく過行浪人思ふふゝ此人見ちゞさまゝバ意恨ほるべき理形しとゝ自分の了簡あるとく跡より走り付只今かゝる事ほひしゞ定く沸心乃ほる事ふゝほほゝゞ但しいゝ形る事もやと尋ねゝまゝバ誠ふあまやり形る仰詞や只ふ沸免ほまと互ふ慇懃ふ禮を述く別まりかの連ゝ一町計り過く相待所へ侍追付件の荒増を語まゝバ連人以の外氣色を形し形まさまの事云せく聞しや何条討捨ざるや汝ゝ腰乃拔しとて散〳〵ふ詈りゝまゝゝ是ハ何事ぞや互ひふ意恨のあき事あまゝバ討果ちべき謂形し夫ふ我を腰拔と云し

狐川の名義

を堪忍ありがてしと双方抜合ひ火花をちらして討戦ひ互ひふ手を負し所へ浪人町中乃騒を聞翔つけて窺ひ見しふ件の人血刀ふすがを有々まばたきいかふる故ふやと近より事の要を問へばたりと答ふ拵を遁さじと追かけ詞をかを造作をふく切伏首を引提立帰り是見玉つと有々まば斜ふ伏よう洛ちび懇ふ禮を尽し我を喧嘩乃相手あまば切腹をべしと云へば浪人が曰はのもとを某ゑ然らば互ひふ刺違んと有しふ町人打より押留奉行所ふ届出一ゑの事訴へしかば委敷聞得させ上へ御伺有しふや是を喧嘩ふハ行ふ伏乱心ゑ何まも神妙の事ゑと仰有て済り

○右ハ新著聞集乃中の一話ゑ此書寛延二己年出板然まば百年餘跡乃話ゑ新著聞集出板より十五年前享保廿年ふ苅萱桑門筑紫轢作者並木丈助の淨瑠璃狂言二ノ口狐川の渡し場ふて玉屋與治兎柳一角との口論を加藤重氏が扱ふて一腰ッヽ刀を遣る場ハ此一話を潤色せしものゑ此狐川乃名義を古くより有て不解余が綺語文草ふ往古木津川（一名泉川）乃流ハ幡の上ふ流まく木津根川とも云爰ふ有る渉しゆへ木津根渉しとも呼ゆんと例の癖考を記せしが如何ゆん

潘谷橋姫の考

○癖考の因ふ京の潘谷を若集滅道と古名を呼び俗ふ渋谷ともいへど蟬磨乃詠是や此行も帰るも別ても去るも去るぬと逢坂乃関と有る去るぬもを潘谷の地名を読込ミしゆやうん又宇治橋三の間の水汲場所ふく

そこにへの殿

川上へ建出せりを往古橋姫宮此橋上ふ有る宮乃舊地と云愚考委しく文草ふ出せりが故人の説ふもまりを如何是も余が淺見ふやうん尋度し

○備前の國岡山ふ於ふふべと云魚有餘國ふを稀ふるよう大守浮田直家より藝州小早川隆景備中笠岡の城ふおを一事る時彼魚を送らるゝ隆景近習乃侍ふ仰夜中ふ備前於ふふべが來し程ふ家老の衆ふ今朝ふるまふべき由申せとの事ば彼者まを望る備前より夜前於ふふべ殿ほ越ふてゝ今朝振舞乃望出仕ふまとぞ申々る各慇懃ふ出立參らるゝふ客迎をふく出る膳部を見まば於ふふべ乃汁なり右の樣子を申さまを大笑ひ乃望しと

名月は俳諧の題

○去る止事ふき伊方乃説ふ名月の文字史記月令ふ雅ふど

辻能の道成寺

ふも見ばとらば又源氏須广の巻ふ さよひ八月十五夜ふても有夕顔の巻ふ八月十五夜月乃ひかりゝ成と乃望詩歌の題ふも八月十五夜と乃望邂逅明月とかゝるハ只月乃清光於るを詠ず按るふ八月十五夜を名月といへる事俗諧の家より云始て本邦の俗稱と於きるふ〻ひろ良夜とをいはふても月乃よき夜といふ事之たゞし中秋乃十五夜を動のとまゝ良夜ふるべし今更是を改りはふるもいりゞ心ふ為めをゝ乃るべしと仰らまりと之

○能太夫橋本何某友人と二人古堀井專助が辻能を見物せらる其日を道成寺こしを見をゝ以りふと感心の躰有しが バ友の曰辻能をよく能ふ似たる事をして間を合す物と ふ於承まいかふかく迄ほめまふやと云橋本の答ふさら

伯船寺住持

〇江戸品川泊船寺住持延宝七年十一月廿四日の夢ふ高僧
来らせ汝を来年二月廿四日ふ身まかる之其心得ゆきと
て詩を賦し示したるふ六十四年混世塵夢中不覚養残身

〈左様ゆる事ふを行ふ〉ば専助が道成寺始て見申せしが
甘心ふ思ふかぬ所ふ今の世ふて口利く太夫のうちふ是
程道成寺をおもあきべき人ゆるまじく覚ゆる之其體をと
も行き一体が我ものふ所ふ濟してゐる之外のものをす
るとかとる事ふ故ふくはろき有て面白し道成寺の場
数専助ほどはと絶し者ゆるゑ誰ふてもゆきすい道成寺
之と心の改まる数者ゆるゑ是くはろぎを失ふ所ふるべ
しと申ききふと他書画を志たゝむるふも詩歌連俳ふて
と其序ふ出て心ゆるたまるべくはろぎ有たきものふり

古今傳授

不来不去是何者二月花開南谷春翌朝より此事を口癖の
様ふ云きて明る庚申の年乃元日の発句ふ見下閑ドいと
ぬがまし所や申の年と云戯きて二月中旬より違例の心
地ふて苦しむ氣もふくせ四日ふ六十四才ふて正念
ふ臨終せらるし此人々常ふ大酒を好て佛道ふ愚ふ見へ
々きバ他の嘲りも多かりしが心中ふいろ程る目出度
事ゆるしやと人ふ慚愧しゆり

〇将軍家光公乃中院通村卿を召て古今傳授ゆるきより
仰らるしかど此義を公家の秘ゆる所ふて容易ふ武家ふ
渡し難き道之思召とまして仮ふ傳へ難いさゞ
しかを御心よからで三年帰洛ゆるし所ふ行方
ふ身をバ誘ゆで夜ふの袖ふ露とふむて月を詠

大佛の御首

どたまへをを閔百くゝと貴こうつくしこを給ひく都ゝ帰
したまへるとかや

○京百万遍回禄しく後其地を東河原ゝ移さまし時釋迦乃
像大佛あもバ法身を取放ち法首を車ゝ牽けるゝ日野
大納言殿折しも格子より顔さし出し見ぬひ只今釈迦の
首を引ハいかゝる咎めさまし給と仰らもしゝ其侭顔格
子ゝ取付く離もされバ大ゝ驚きさゝ詫言志たまひく
漸く離もし忽日蓮宗を改め百万遍乃中養春院乃檀那と
ありたまひし釈迦堂を則大納言殿より建立したまひし
と也

七瀬川の歌句

○西行法師修行乃時津乃國七瀬川ゝく麦粉を喰ふとて志
きりなむせゝもくるを馬上より侍の見つけ此川を形ゝ
勢の河ときくものをお備をゝまバむせゝたるかゝ時ゝ
西行の返歌此川を七瀬の川ときく物を召たる馬をやせ
くるゝと笑ひく別まし

芦辺殿の輝姫

○新古今ゝ道のべゝ清水流るゝ柳陰志ばし立どま
りつまとハ下野國乃芦野と云所ゝく西行法師詠たる哥と
く今も柳ありて古跡と云いはの頃ゝ芦野辺へ京より女
乃宮仕ゝ参りく三ゝせ斗勤く都へかゝる時法餞ども
と無所望く其方乃名をくゝふりつまと脊よと仰らく
きバ女とも所へバ志ばしゝて社と存ゝ法志ゝひかま
く三と勢を立どまりつまと申上ゝるゝ我心ゝるそぢち
乃女形望ゝ刈

故人の句を詠

○古き句を折まく誦し出たしむを行ゝたゝかゝるゝも

854 581—596

風情ありとや淀の侯りの杜宇宗盛乃宇治の奉納ぬど
手柄あくまきためと兼る近頃尾張乃人の妻乃七とせまぐ
腰たゝぐ有しが終ふ身まかりし時[夫]涂しかと思へど別
きかゝと野水が句をはぶやきしハふと表ふして野水が
作せるよりも情ありつかまるると鳴海乃蝶羅が物語へ常
ふ風流の心あき人も物の善悪を感じて思ふべ秀逸の句
ありまるを遠江の國ふ或人の子をうしなひしく其一年の廻り来
し頃[去]年迄呵つと瓜も手向々々千万の衣を含ませ出し
あり

○
北野通夜物語ふ昔青砥左衛門夜ふ入くて出仕しなるふ以
つと燧袋ふ入く持とる銭十文誤つく滑川へ落したりけ
るをよし扨とゆもかしとて社過行べかりしを其辺の人

家へ人を走らせ銭五十文持せやりく後松を十把買ふく
是を燃しつゝ川を浚く終ふ十文乃銭を求め得たりある
が十文の銭ハ只今求めばば水底ふ沈く長く失ぬべし五
十文の銭を商人乃ふふ渡りく永く失ば彼と我と何の差
別ありるべき彼此六十文乃銭を失ハば豈天下乃利ふ有
らばやと云しと扨五十文の銭を費[理]して十文の銭を求る
を小利大損と俗を云べきもど道利ふおいくまべき所を
考くまる事なれバ抜群乃見識ありてを聚るまぢき事之
商人と我と何乃差別ありるべきと云るを楚人得之と以
ふよりも其識量うさ大きなる事之其言行世ふ傳らざる
社遺恨あも

○
将軍天下を治めるふ此御代ふ賢臣義士多き中ふ京都乃

所司代〻て訟を聽理亦を決斷せらるゝふ冨貴の人と
てとへはらふ色なく貧賤の者としてとゝ〻せる躰なり然
る間上下万民裁許を悦んで奇ふる哉妙なるかなと讃嘆
せる人街ふ滿り一滴舌上ふ通じて大海の塩味を志るとも
ゆきを其金語乃端を云ふ餘を知ぬべきや然る時越後ふ
く山伏宿をかまへぬ其節國主乃迎ひふ宿乃主も罷出るふ
彼山伏のさゝ〻る刀拵と云作りと云世ふすぐれたる物
ふを借りて行末宿ふ帰らざる間ふ一國德政の札立あ
ゆを去程ふ亭主汲りても刀をかへす事なし山伏堪へ兼志
きゆをゑふ宿の主返事ふ其元の刀借りたる所實也やさ
き共德政の札立たる上を此刀も流れたるべきゝ〻汲す
まじきと云出入ふありなきバ双方江戸へ參り大相國乃

三船の才

頃前乃沙汰ふあるより其砌京の所司代下向ゆゆを頃前ゑ侍
らきしが此裁許以かふと御錠ゆゆを謹ぐ造作もあき儀
と存ゆ幸ひ札の上ふく亭主が借りたる刀を流しゆハゞ
又山伏がかゆたる家をも皆山伏がに仕べきものこと申
上らきしかバ大相國ゆ感甚かゆゝと然當意即妙の下知
あるり敢以正理之藥治訟之病挑憲法之燈照愁歎之闇
と以ふ金言もゝ然あるべし

○大納言經信卿博學多藝ふして殊ふ和歌をよくせらき
かバ藤原公任と並びく世ふ稱せらる白河院大堰川ふ行
幸ゆゆける日詩歌管絃乃三乃船をうかべく其道〻の人
を分〻めせらきゝるふ經信卿遲參乃間主上乃仰〻き
殊の外あしかゆゝるがゆゑ待きく參らきたり此經信

難波次郎

卿も詩も歌も管絃も三事ふぐ兼ねそなはれたる人ふく河乃汀ふ沁ざまぐきく何もの船ありともよせいへと以をもたるを時ふもまく以ふ[illegible]ぎと遅く参らもたるを以をぐ〜扨管絃乃船ふ乗て詩と哥とを献せらもたり三船ふのると云〜を此事之先ふ大納言公任も三船ふのるもたる事有をもバ此両人を三船乃才人といひ傳へたり

○平氏の士難波次郎が母を小松殿の乳人ふ仕へく厳直大慈二ツあがら全く歳六十ふ〜して故郷摂州難波ふ返り住家極く貧〜かまし〜が次郎常ふ母ふ仕ること恭謹ふ〜して農業乃いとま薪を負て市ふ鬻身を被袴ふ〜と以へども母ふを滋味を尽せり後平家ふ仕へく邸を洛中ふあをを母を迎ふる〜ふ母行ぎ〜く云老嫗歳既ふ六十ふ余もり世ふ在の日少〜汝今官ふ仕へ身を立家を起すの時至ぬ〜獨乃老嫗の為ふ心ぐかもく奉公ふ懈らバ忠を尽し名を昭をの妨ふるべ〜吾飲食だふ足らバ都へ出く栄耀ふほふるの志ふ〜と〜迎への輩を洛ふ返して自害して果たり次郎悲歎ふ堪ぎ〜て暫の暇を乞ひ故郷ふ返り老母乃亡跡を弔らひ洛ふ立返りく清水寺ふ供養乃塔を営ふい〜〜忠勤をを尽を相國ふ仕へりと云り此事平家物語盛衰記抄どふ見へばかゝる忠孝を擧ぎ〜てさせる功も抄き人の中ふふる〜傳へたる社恨ふも無道の君ふ仕へたもバ至孝誠忠二ツふぐく埋ももたるを以と口惜き事ふゝぎや

重衡盛長

○平家盛りの比本三位重衡参内の折から帝より扇の地を
ゑらせなる時郭公を一羽畫たるを折らせ給しふるや
まちく鳥を切もぢち尾のみ残り侍るへ歌よ迄と仰有々
る時さゆやみくらもく山乃杜守姿を人ふ見もる物かも
とよみ多り又後藤兵衛尉盛長ふ平氏没落の時重衡逢を
ひく我馬を射らもたり汝が馬を借せよと仰せ有るを盛
長いかゝ今我敵と戦ふの時ゝ逃のびぬふふを歩ふく
も有ふん是を両夜乃傘ありて備赤らせ給て走り行て戦
へりとぞ

○柳里恭が影法師の文ふ汝吾産も時より吾側ふ在く暫
し間も離るく事ふしと以へども我親ふを行ばく子ふと
あらば主ふも召使ふと行ばく妻ふも行ばく乳人ふも而

らず只朝夕吾ふ対ふとのみして更ふ他の業をふきば悦
ぶ事ふく怒ふふく憐む事ふく楽む事なく思ふる目ふる
たる者を友ともきば是を見せんとをるふ煩らひ耳ふる
ふる者を友ともきば是を聞せんとをるふ煩ひ唖を友と
もきば是をさとさせんとをるふ煩ふ汝今吾有ふるふよ
りく汝が無を守るとも吾又汝が無ふよりく吾有を守る
所をふらずぬもく汝を吾影ふるるとも又人の影ふる
かと問へを返したる奇とく我影を我ぞと思ふ世の人ふ
とのいふ口をもとぬ影法師

○六徳牒記ふ云綾羅錦繡もく夜乃物を造り薄とのきゞし
ふ蚊のとゞらもきを避るハ定紋ふ片意地をもく帝子
ふ浅瀬を渡る事をふらざるべく土焼乃火鉢ひとら

内舎人老黨

を道具買も遺念なく紙もく作きる蚊帳一張帝屑かふ者乃眸をうかがひ人をもうかがひ盗人をして心を動さしむる事なかるべし薄帝一重ふ世塵をさけ濕をのぞきて寒冷せざ風を入るゝ時を水濱ふ向るよりも涼しく書を見る時を螢雪の窓よりも明しねぎたなき姿を人ふ見せぬ斗夏候が妓衣の巧ふとまさるを畫ハ丸めて屏風の後へ投込み折目を正に世話もなし秋去冬来るバ被りて霜雪のもなゞしきをを凌げバ一物ふして六用向を彼太宗が寄舞乃からうとふをよゝ孫ど或是ふ名を子へく六德の牒とよび道こ終なけもど驚きたる山乃奏ふも思ひ入らず只此うちふ延卧しゝやがて出しとを思ひぞこあり

○内舎人を人数なくて約るゝが故ふ其姓を付て源内藤内

巖風の子

平内善内伴内と云こ天野藤内を藤原氏乃内舎人こ紀内行景ハ紀氏の内舎人こ伊賀平内左衛門ハ平氏ふて内舎人と左衛門尉を兼帶したる人こ今世源内平内那どゝ呼名ふはくを僻言こ老黨若黨といふ名目を昔武士の黨紀清兩黨の類の者の中ふ然るべき者を老黨と云其次を若黨と云ハ此余風こと志る所

○東都ふて冬日乃暖きを辻番の布子と云前句附ふ辻番乃布子ハ西へ入給ふと有浪花ふて小春頃ふ幼童の詞ふヲゝ寒小寒猿の尻ゝ借つて着よ猿の甚兵衛とも云甚兵衛羽織とて所謂殿中羽織乃事こ甚兵衛ハ始て着たる人名なるべし辻番の布子と品社かるを對句なるべし又寒風の吹もふとゝもで幼童乃足袋もをかゞ朝乃間ふ門ふ出て用水の氷を割雪を塊(カタ)て兎を拵るなどを見て巖風(ロビカゼ)の子

馬の詠たる歌

と云是壷風の子乃訛ふく風の子とも夫婦乃間の子乃もバへと以へり

○少し假名を讀人乃友ふ云々るを此程徒然草を見く遊ぶが面白ふ侍よとかの〻かバ其座ふ居たる者差出て構へく口當りよしと思ふて多くあ乃つもり草の行へ物を過もバ毒ゝやと申せしかハ樣ふ差出者古今の序を聽きはりく昔を花ふ鳴く鶯水ふ栖蛙を始馬乃ど迄歌を詠ぬもバ人倫たる身せう者乃が〻五文字七文字の〻かちきく〻ぬハ残念ふる事やと欲くを行らやさしの心なくや去ふ〻馬乃讀うる歌とをいまゞ聞ぎ閑たしといへど世の中ふきく〻ぬ別乃乃くもがふちよもと祈る人の子の為是社馬の詠たる哥ゝ否於もハ業平乃歌ふてを

かんにんの四字

乃きり念とふひ湯屋の謠ふ於も此歌と申を長岡ふ住ふ

ふ老馬のよめる歌ゝと云たり

○或人文盲ふる者を異見して世乃交りハ他の事ハ以くび唯堪忍乃二字をよく守るべしといへど文盲人を頭を傾けかんふんとを四字ふく侍らずや侍許ふを思し遠ふるべしかんふんと四字ふく侍ると指をもく數へ乃がらいハバ異見せし人云愚昧の人かふ堪忍とをたゝえ志のぶと讀く二字ゝとゝいへバ又頭を傾ゝく為ゝ志のぶふくバ又一字ふえたり五字と以り侍るべし何と仰有とも我ふハ四字と思ひ侍もバ四字ふくかんふんハ致し侍るゝと云るふ其人又云汝乃如き愚昧乃文盲ハ實ふ諭難し人ふ似く虫同樣ゝ已乃侍ふもべしと大ふいきどほりを〻もバ文

条平内兵衛

○浅草觀音乃寺内ふ条乃平内兵衛乃石像有くよ〳〵人口ふ膾炙をも共ふ津の頃の士何國乃藩中と槌ふ書しものも所し内藤山城守乃家中家富馬も二疋迄を繫志と之剛質ふく力業を好ミ件の石像を存生の内ふ作らせ死後ふ印とあきべしとく庭ふ居ゑしと之歴々の侍あれども石像拙ふ々もバ其跡無し雅を学バざる人の失知べし又品川東海寺沢庵和尚乃石碑の邊りふ丸キ石いくらもまゝ為むしゆり道ふ轉ひ出ふどせしまゝ自往来の足ふかゝ至石ふ銘ふ々もバ他所乃者志らぬといへど寺ふを別ゑ帳有

馬術に雅なし

〇昔より馬術ふ達したる人ふ学問ふる人を稀ふあるゆゑハ條家ふ故實遺りたもども今傳ふる人所し大坪流の馬書を俗所る事多く詞古かゝば雲霞集ふを雅ふある事少しく有ゝ所ミ〔ミさご〕〔遠〕山乃月〔橋〕かけ所どを馬騎の口から ハ出まゞき詞ふり近年ふ至りて〔刎〕ぎり〔ゑ〕〔ふ〕ゆゆ〔ゆ〕り〔放〕し刎ふど云を全く當時の馬乗り詞ふり馬乃目所も〔山合〕ふ松原ゆはゆふ目所甚詞無し馬乗乃内ふも少文字乃讀る者を馬を餘り上ゑ乃沙汰ふし夫より末ふありてを只世間並の馬騎とをあもりと所

鶏广乗親の面

〇鶏广乗親を極て面打乃上ゑ之々もども一年ふ一ツを打

雅人の傑

び性酒を好みて醉て舞ふ事を樂しむ老母乃曰来の櫃蜘乃巣をかきやり勤めて打べきふやとせ色々まバ乗親驚きて行るバ今日よりしてゝ懈らび打べしとて籠るが四五日を經て面を打て誂へたるかゝ持行料を持帰りて母ふ渡しゝまバ母悦びてかく多くの金を得しハ面いくつ打たるやと問ふ面を八ツ打たまども心ゐ叶ひざるが七面ばまバ皆家ふ残ぢりとて取出し見せゝり鬼女乃假面ちりゝれバ見るさへ恐しとて傍ふ置けり其夜盗人入て親子卧さるを伺ふを見て母かの鬼面を顔ふ覆ひて眼乃穴より見ぬゞやふ盗人乃入たる様乗親起よと云事ゐを盗人見て打のときけび驚何國ともなく迯失ぬと様

○遊樂を費ぬるとふ有費を省ぎ樂ふし慰みを無益ふる物ふ有無益をふゝふ時を慰みぬし面白きを危き所ふ有危きを避まぎ面白き事ふし長生を労と食ふ有労せびして食ふ過不及ふりまバ命天然を終る事を得べし調度と人身と同じ多く遣へも損じ遣ひざるも又損ぜひさまバ養生を過不及ぬきを守るべし病を不養生ふ有て世ふ氣を屈託をるもの常ふ病ふきふ病ふらば右を柳澤淇園の詞ふり里恭を文学武術を始人乃師たるふ足る藝十六ふ及び中ふも画を長び近世畸人傳ふ悉しく出ふまバ云び此人ふ對をる人二人有彦根の森川許六是又俳諧ふ達し画を善び次ぐ尾陽乃横井也有ふり此人畫を能ぶ禄ぶども狂文ふを妙を得ふり此三士ともぬを事を達へども大約氣象の同じき所有近世雅人の三傑と云ぬし

南方鎍

○尾州名古屋乃毛抜師乃銘ふ南方と云ひて諸葛亮孔明出師の表ふ深く不毛の地ふ入〻今南方を定むと有〻不毛といふより昔近衛殿下る下さまし名と云其角の附句ふ毛抜ふも名を給ふ君ゞ世と有夏祭浪花鑑住吉の場乃淨瑠璃の文談ふ其間ふ抜さゝた髪抜ふと床乃床机ふ上足打煙艸入から出す鎍も彫んぼうぶときせんさく〻と有るも此南方鎍の事〻

竹田近江

○近松門左衛門國姓爺合戦といへる淨瑠璃を作〻〻大當せし跡を猶面白き趣向とが彫と枕を割て工夫ふ渡る其時乃芝居主竹田近江云ふを作者の心ふを左社存せらるべきゝかく大當り乃跡を大躰をゝ〻とゝ云る事をゝ〻を云るべし國姓爺ふ〻餘程乃德分ありしバ一二年不當り〻たりとも我ホ式ゞ給る程を沢山〻其間を古き物ふて〻を出し〻ハ内ふを自然と能狂言も出ハとん夫よを上夫より上と趣向ふ趣向を重舘たゝむ時を我業を尽果申さん只天然ふまかせまゝと申たるを一道ふ秀たる者の詞諸道ふ通ぜを感ぜべし

春日野の虫

○南都乃人松虫鈴虫を捉ふるふ挑灯を携へて叢中ふ夜行けバ其光ふよつ〻飛来ると云を昔乃事ふ〻當時虫を捉ふ者を竹を二本持畫行〻薄を押分まバ虫共驚〻飛出るを捉ふ又餡を持行〻捉ふとも中ふも黠智者を薄を根ごしふ吾庭ふ植ゆ都てかゝる類を薄の中ふ卵を残せをゝ〻の卵来る年の秋ふ至り〻〻かへり〻声をふゝ吾庭ふ〻生ずたるをとを〻〻籠ふふめ〻責をバふと安し春日野

鷺白魚

ふく虫を捉り簿を根こせは聲格別ふよきと云り

○東叡山の宮江戸め鷺ふを訛有とく京都乃鷺数千羽を取寄く上野の山ふ放さまし〜を年々卵をのふし今ふ上野乃鷺を訛らぬ〜鷺塚め名を是より呼来名の城主白魚乃種を品川ふ取寄らまし〜より今白魚を東都第一の名物とを取ものり往古を嵐山へ芳野乃櫻を移し植させ奈良乃都の八重櫻を取寄せらる抔皆風雅の道を盡せり何とも優ある事ふ非ぬものり

頼政の亡魂

○螢と云虫を腐草化して螢と成るとなもど年〻卵を草乃莖ふ残をを翌年初夏の頃自然とかへり飛かふ〜故ふ石山を早く宇治を遲〜と云萍或を藻ふとまを〜流乃〻ゐへと兎道ふく扇の芝邊ふ飛かふを頼政の亡魂と云

お菊虫

廉の時立

を俚言ふして茅根化〜〜螢と成乃を誤り〜物〻〻成

○駿河の町ふ蚊蜻蛉と云虫弥生半ふ飛廻り往来の鼻口へとをふらんぬかを之是今川義元の亡魂之と里人を以へども風土ふよはく生ぜるを是も茅根化〜〜蚊蜻蛉と成るふやがて〜んお菊虫と〜〜女乃後手ふ括らまし〜姿の蟲生ぜると其土地乃風土ふ生ぜる之播州皿屋舗とく狂言ふをもまど實を東都番町の事ふく小畑孫市の室嫉妬深く針妙乃お菊を井戸へ落し入く殺を其昊祟りをあを故甲州の知行所ふ菊寺とく一字を建るとを新著聞集ふなも共青山の邸ふく〜の事〻故ふ狂言ふ青山鉄山お菊を殺をとも云り何をが實成るや不知

○南都春日野の鹿よく〜寐入居るとむくと起立く誰追を祢

猿蟹を婚ふ

どと久廻り戯るゐへ傍の鹿共ふ狂ふ是を鹿乃時立とく春日明神鹿ふ乗移り遊戯しゐふ事と土人ハ云り雪乃朝ふ久廻る犬の如し猫鼠ふと時々合手おきふ戯狂ふ事まゝ有金魚腹を揺はゝ游バ三尾五尾是を追ふを皆故ゐるべし

○昔話ふ猿が島ハ蟹乃敵討ふ行事を綴る（東都ふてハ桃太郎あり）猿を蟹を嬲ふ事甚しと聞り藝州宮島乃回廊ふゝ猿徒らをする幼童共を蟹ドや〳〵と云ゞゐるゝふためきゝ回廊乃上ふ久登り鹿の通るを見ゝを鹿の脊へ飛来山清水小流を水乃瓣の居ゆふ於る所を鹿の脊ふゝ越ると云思ふふ磯端の小蟹を鳥類乃羽出入間の蚤風ふ應ドゝ嬲ふ於るべし

置鼓

○置鼓ふ四季有〔子〕ノ日〔桃花〕〔ゐめ〕〔七夕〕〔菊重〕ふ之花重と云亟鼓を月見小左衛つ城の御能務むる宵の爰ふ嚴島弁天枕上ふ立せ玉ひ亟鼓を一通り夢裡ふ習ひ奉ると見ゝ夜を明ふ布り感ドゝ一手も忘ぎを翌日打ゝれバ是機嫌斜ふ成り寸何と云置鼓ぞ尋奈もと所上意乃ゝ時昨夜爰中ふ弁天より習ひ申と云申上がゝ花重と申ふと樂屋への上使ふ答へ奉ゆゝるゝ此亟鼓の留ふ〔ハ〕〔ハ〕〔ハ〕と三ツ重ぬるより花重ふと當意ふ申上侍るゝ是ふよはゝ幸乃家ふを今ふ歳為辨戈天を勇む此一名紅葉重ふと云ゝ乱舞を必風雅ふくてを叶ゝゞ謡乃文段をからばゝゝを舞と謡ふも打も離すも形の心づかひふあゞん

か

水引

○秋艸の中に水引草と云物を細く物を括る水引と云物に似たるを呼ぶ之色に赤有白有あやらしき草之扱水引と云を何ふよりく名を付しりと思へば素麺乃名を切麺とも又水引餅とも云よし然らば素麺の形に似たるばなり

鳥貝

○鳥貝を鴉(カラスガイ)に化するがゆへに鳥貝之とも云又衛(ヒラ)乃化したる貝なるを鳥貝之とも以へど其味鳥肉の如き噛ためる所有ゆへ云り然し月令に雀化して蛤となるとつたへばまんざら縁なき名とも以ふべからず

放島の試み

○放島乃試と以ふを学生をおよ海にるふ池の中島あどふく詩文章を作らせる事之人に談合させまゝき名之うつぼ物語に季房試乃題を賜りくひとも船に乗らせて出たりと有是放島のもよ海之

はなゝろ

○古き軍物語にもあしろに付合たるとつるを敵味方思ひもよらぬ出合くに互ひに恟りしく聽したる事を云ふやあしろに聽したる事之聽をもバ梟の白くある之源氏物語におくしがちなるあしろめたる人多かりと見へ侍り

和歌に師なし

○文武乃道もろ〳〵の藝能に至りくも師とする程の人を其藝術をつまねく弟子に傳へんとをもども弟子の修行うをゝをもバ其道を受得ざる之さをもバ物の上に下手にある人を全く師のをる事につゝ弟子の力にく上に成ふもある事之假令孔門乃三千も聖人の弟子なをもバ皆賢人君子と成るべきに終に七十士中にも顔子九哲の如き是皆弟子乃力あり或云京極中納言殿の和歌に師匠あしと宣ひ

南面の障子

差合ら

々るゝ此事より後づめ事ふ渡るべきふや

○權中納言定家卿を五條三位俊成卿の子ふゝ我家ふゝ歌をよまるゝふ必南面乃障子を云らかせゝ遠く外を望ミ衣を整へ正しく座しゝよまゝたり此事せ人ふ申さゝ事るを常ゝ心を清く正しくしてよみ形ゝとさゝバ高貴乃御前ふてよむ時心ゐをたゞちくしてよみゐやまる事ゐゝと申さゝしゝ又申さゝ事るを歌よまんと思ふ時ふを先白樂天が故郷有母秋風淚旅館無人暮雨魂と作まる詩の句と又蘭省花時錦帳下廬山雨夜草庵中とゝふ句形どを吟して歌をよむ時を其歌と自心深しゝ考べと高くよまるゝことのたゞへりゝ形

○晉其角常ふいはゝしを「好氣根稽古のゝはよくらぶゝを

二芳堂西鶴

好ゝ其物の上ゐゝゝを將碁乃師大橋宗桂とつ孫し此歌を誦し申さゝし俳諧ふ差合くゐとふゝゝゝゝ句集形ゐゝゝ合ゝ自由形るべしとを尤乃事ゝたとへを非常乃時鳴物音曲今日ふ御免とゐるを待兼ゝ出さんいよからば一兩日とゝ置ゝ扱可ゝゝむ句者を此処ふ法ゝゐゝゝ外のものを作ゝむゝ所ひくゐハ六句め乾ふ松乃句を出さゝ笑ふ屋し

○井原西鶴を浮世物乃作者ふしゝ俳諧を西山宗因乃門人ゝ淨瑠璃作者近松門左衛門俳諧を西鶴ふ形ゝ〻ゐと云西鶴住吉ふゝ二万三千句を吐ゝ夫よゐ二万堂といゝゐ住吉大矢數を貞享元年子六月五日ゝ此時の矢見を其角ゝとゐゝゝども此年其角十六才ゝ

三句の俳り

○洛々田室曰俳諧一巻乃變化を起承轉乃三ツ又見聞志の三ツを旨ふと〻〻其場乃働きふ所るべしや昔太平記ふいへる楠判官正成が討ふとして六波羅より須田高橋数万騎ふてせ免下りしを正成方寸乃謀ふく散こふ追散らし其跡へ字都宮勢五百騎ふく迎ひしかを楠もやく天王寺を迯こく公綱ふ勝をこゝせ扨近辺の山こ浦こふく篝火を焚疑がこせ又骨折らずふ追かへしたり是程面白き三句のこたりを所〻と話り申さきたり

記録者は

下に五字 月 廟の外を記したもの

○記録の書とゝ大約言を大糸内中将を中月應永を応永元和を元禾嵯峨を山山醍醐を酉酉と書を云之釋家ふくも讀誦を言言瓔珞を玉玉菩薩を井と書類を云我戯場ふく

ムムムムとり外んせ以ア所ど書く通字こせ記録とゝ古く正しき名義ふきどもこざと佐川田昌俊が製ふらんかと俳諧しこ日ふ當る喜六表帝座水仙花と余が戯もしも世年の昔之

餓鬼つぼた

○松江雑舟が犬子集ふ三条殿山崎宗鑑を召こ庭乃杜若々ふ翌と咲り思ふ程折とるべしと御許所る鑑何の心ふく有がこと池乃傍りを望こ花を折公宗鑑がこがこを見よや餓鬼はぐこと仰らるこ宗長やがこ呑むとこきどる夏乃澤水といまど詞もむかぬうち〻ちふいふ追きこいつちかへるらんと鑑つかふまはりこきば殊の外めで笑こせらこ負乃賜物所〻しと我又支考が童平をつきこ芳野山ふ所非び歌壺よりも軍書ふ悲しき吉野山と申せしも貞徳紅梅千句ふ公家々衰ふ元享のこ所正章奇書より

を尺書を専ふりて行ひ可頼此附句を一ツふ〜〜句と
形せり何も風流乃戯も事今世乃人の句を盗む形どの
心とも同日乃論ふ行〜〜古書を常ふよく見て覚悟もべ
しとぞ

兄弟の争ひ

○伊勢二見が浦ふ百性兄弟山を行〜そひく九鬼長門侯ふ
訴へ侍りしふいかに下しもあきべとく兄弟づらうかゝる
非道ふる公事をもるふとゞきこ仕方行るべし〜〜年
経しかど埒明たまもゞ其間ふ双方より賄を運ぶ事数を
ちゝゞ行る時兄が方より物もち来りしを長門侯彼が間
様ふ此公事ふく我を大形る徳付うり只いつ迄も濟もま
じきぞと宣ひしを彼者物越ふ聞く立腹り弟を呼び汝山
ふ望行〜〜ば取べし殿の心かくも然行も然らば争ひく何

佛は佛師

佛は佛の教化

○洛陽本満寺の日蓮の像を霊験ふとふ行〜たふく同宗乃
輩崇敬浅からゞ行る時像もこし損じたまふく佛師を呼
しふ佛師が曰此像を日蓮乃像ふ改めよと乃事ふ侍ふや
と問ゞ住持を留主ふく弟子僧数多寄合扱も文蒙ふる佛
師乃云事が形辱くも此尊影を北山芹生の里乃土中ふ久
しく法華經讀誦乃御聲行ゞ〜〜かゞ此寺の開山声を志る
べふ堅たゞへゞ有難や大聖人の尊像ふくおゝせ〜志ら
ざるを志ゞ顔ふ為せる大悪人やと散〜ふ詞ゞもゞ佛
師かとくて背もを各乃辭事ふく以是をまぎもるき元
三大師乃影也と互ふ口論と形り法師ども佛師が頭をゞ
ゞ内證ふく事納めがとく所司代牧野佐渡侯ふ志り〜乃

乃益り行〜んと云弟實とと思ひ其事止侍りし

事許へしふ佛師ゲ申とこ為證拔有やと宜へゞ佛師ゲ心
とく影乃法首を破りく見たまひ良源とり慈惠とり記し
ゆるべし若日蓮とゆゝバ其ゲ首刎たまへと申せバ又住
持ふいかにと問せたゆへバ一言乃返答形ゆりしゆへ其
方ゲ医師をかけ療養生せさせよ職人乃事ふまゝバ其日数
を積り手間代急度ゝとさまよと捌きゆひしまゝ内證よ
り說言し白銀せ枚送らきしとや

運慶の口傳

○佛師運慶ゲ口傳ふ佛を作るふゝ耳鼻をゝ先大きくまゝべ
し若耳鼻を十分程ふ削ゲ後ふ小さく見ゆる時ふ大き
くゝたくてゝ叶ゝゞ又口と目をバ成丈小さくまゝべし若
口を十分よき程ふゆくまゝ後ふ大きく見ゆる時小さく
ゝたくても叶ゝゞさまバ耳鼻を大きふし口目を小さく

369

長範の涙

鴨鵜の文

まゝ成茅一乃口傳とする〻ゲ是をもと韓非子ふ出ゝ宋
乃蘇頌ゲ云し事之此木偶人を作る意得を何事ふもと為
るべしと駿臺雜話ふ出たり

○或人鴨鵜を畜てそまを囮ふして鳥を捕ゝるふ囮ゞく殺
生をまる友達乃もとよりそゝはくをかゝふ越ゆるゲ其
文ふ鴨鵜を畜してばくと書て其末ふはくとそゝつく
の事ふゝゝゝゝはくと書ゝへゲ文字数多くゝと長ふ成
ゝ故ふはくと書ゝと形ゲゝ粥ゝり夫ゝゝバ始よりそゝ
ゝはくと書かし文字を縮めんとゝ多くの文字をそゝ詞
を短くせんとゝ為りて長くゝるゝを片腹痛し

○高野西谷ふ入ゝ熊坂長範蓮社乃宝を奪ふの夜数多の盜
賊を召連たり長範いゝゞ思ひゝん樹下岩上ふ休ゝて御

日本に象を贈

山の霊妙の光を感じ〻るが寺ふ入る〻黄金を捧ぎりて四面を拜し〻誓ひて永く賊徒此御山ふ入るまゞ没後乃供養ゑど志めやりふ頼み鉄槌を借りて向ふ歯二枚欠く生前死後の思ひ出唯今得たりと筆走らせ〻則〻多りの山峯の嵐を〻げ〻くもきの〻ハ残る後乃かたゝふ強盗長範と書〻るとゝ交るとゝ悟るとゝいまゝめと和歌ふて捨きむ國なり〻る

○南掌國十四年毎ふ象四隻を例貢を乾隆二十八年使を遣し〻大象一小象三ッを進むと秋坪新語ふゝ乾隆二十八年を此方乃宝暦十三年癸未ゝ廣南大泥國より日本へ象の渡り〻ハ享保十四年己酉ゝ大坂を通り京ふ江戸ふ行寛保乃始迄江戸ふ育〻とゝ始渡り〻項を七尺斗ゝ〻

清人養竹を伐

が後を一丈五六尺ふ及びゝとゝ

○東都俳諧師雪中庵蓼太が句ふ〻きみ〻ま〻やゐ乃夜ゝ秋乃月といゑるを清人程劍南が賞てさゝ〻るを爰ふふ松乃月といゑるを清人程劍南が賞てさゝ〻るを爰ふ出す檄密他列耶阿兒要披促革尼麼子那次吉雪中庵蓼太蓼太先生者隱君子也都人士岐為侍從之流亞矣乙未春於崎陽客館得俳諧歌一章言是先生所著僕不能読其國字故就譯士某得解則興在景中意在言外大非俗品可知蓋僕亦有所感也因賦一絶寫其意傚頻舟之誚所不辞也長夏草堂寂連霄聽雨眠何時懸月色松影落庭前乾隆四十年孟夏月望後三日雲間程劍南句乃うへをとまをかくまを俳諧乃道唐土ふ聞へたるハ雪中庵蓉ふるべ〻是安永四年乙未ゝ迄と七十餘年乃昔とを形ゑ〻ふり

師直の歌を譯す

兼好を評す

○高師直鹽冶判官の妻ふ貽るかへすがへすもふやふきもん
と思ふまに我為にかりそめ打もおかまずといふ歌を徂來譯
し〳〵我思美人貽之書美人不見棄庭除吾拾吾書帰十襲心
謂美人手所觸と譯せり

○室鳩巣兼好を評して太平記ふ高師直が為ふ艶書を書し
事を云其後伊賀守橘成忠が招きふ仍て伊賀國ふ赴成忠
が姫ふ通ぜし事園太暦ふ載たるバ世ふ謟らひ色ふふ市
に隱逸を好て名利をいとふといへども隱者の操なる人
ふなりぶさまど徒然ふ載る所佛法のさて好色の事を除
て風景をのべ人情をかたり理趣なる事をたる世に中ふ
も雜念をいましめて我心ふ主なるまじるバ捨たぐ乃
事ふ入來らしと云懈怠をいましめて道を学ぶる人々ふ

勢源氏の評

ふ朝なる事を思ふべ朝ふ夕なる事を思ふべ只今の一
念の上ふおのづからまちまちむべしといひ貝を覆ふ譬
を引て萬の事外ふむきて求むべからぶ多ど愛もとを正
しくして前程をとふ事勿もと云松下乃禪尼の子を張し事を引て世を治る道儉約をもとなる事を
云高名の木登りが云し事を引てやまちを危き程を形
くして安き所ふなりてなる事を云何ぞを簡要の旨ふて
聖賢の教ふと叶ひぬべしと云り

○儒道の人乃口ふかまてハ伊勢源氏の物語を淫乱を導く
媒なれバ年弱なる男女ふを禁じて見せまじき物と然る
ふ薦紳家ふ源氏物語を我國の寶といへるを倭語乃妙を
得たるふ心醉して其事ふ及べし是ふ註釋して毛詩ふ淫

解脱上人

奔の詩を擧勸懲を示す如く人乃戒世乃教とするを俗ふいふ扨子定木ふるべし二南ハ修身齊家乃本之雅頌ハ論道述德の詩之國風をもとより里巷の男女各言情乃詩ふきべ正も邪もいりまじれども其邪と云も媒妁ふよりして淫奔をると云斗之何まろ后妃を盗み継母寡嫂ふ淫をる樣の事やいる伊勢源氏の如く邪淫の事云盡をふをいるべ正を見てを自勸て邪を見てを自ら懲をぞうし伊勢源氏をいまぐ長恨歌西廂記ふどの品ふて其兄長ふして醜悪いる物之然るふ聖人垂教乃書ふ比して云を誠ふ氷炭薫猶を云としふをるふべしと以へり

○山の端ふさ抜まぐいるん我も只憂世乃空ふ秋乃夜の月解脱上人の世ふ隨へぞ望いるふ似たり俗ふ抜むけバ狂

西行の歌

幽齋の狂歌

872

信西豆

人乃如しいなるの世乃中や一身何まの處ふりかくさん

とうまをを右の歌ふ引合せて衣の袖を絞りふきとぞ

○普光院殿乃御詠ふ面影をうはをもやさしとにかくふ命を筆も及ぞ乃ぞ乃憂事も嬉しき事も過ぬまぞ抜の時程を思ひぞ乃ぞ市乃ぞ市乃ぞ乃果てを乃きとめと思へども雪乃降る日を寒くふ抜いまと西行をよめる

○青海苔を煎豆ふ付たる菓子を太閤乃ふ前へ出せしを幽齊公ふむりりをせひ何とうとふ意いりし時君ゞ代を千代ゞ乃ゞ代をさゝまを石のいとわと形乃ゞふけのむを豆と申さまをれバ興ふ入らせをまとぞ

○今新粟豆とて京の町ふ賣るをもと上京信西の辻の尼寺ふのミ粟して大根菜の干葉を粉ふして塩を化して煎豆ふ

まぶして信西豆と云ゞ原抄と余ゞ綺語文草ふくとしく
出せどゝ幽齋公乃狂奇の因ミふ爰ふ志るせる物ゝり是
鑿説ふゝ乃ゝゞる屋

普賢像

○同書千本焔魔堂の前ふ咲く桜を普賢像と云ハ色白く花
形世乃常の花より大きゝるゆへ普賢菩薩の乘給へる象
の鼻ゝ比して普賢像と呼しと云又一説ふゝ焔魔堂乃次
ふ普賢堂有し頃堂前ふ生ひし桜樹ゝるゝバ普賢堂とゝ云
とゝ塩尻ふ出たゝバ京の部ふ出せゞ此桜翌ゝ〳〵と見
る時月の奉行所へ一枝送るゝ奉行所より牢屋鋪へ遣と
ゝ牢前ふ生〳〵科人共ゝ見せ〳〵春を志〳〵せる是を牢屋の
花見と云此盛りの内を焔魔堂ふ〳〵壬生乃如きの狂言を
ゝる事例ゝりと都ゝ〳〵風雅ゝる事乃

利休織部の花

楊貴妃桜

○東山東漸寺ふ泰山苻君と云桜ゝ桜町中納言殿泰山苻君
へ祈誓ゝか志ら〳〵ゆへ号奈良の猿澤池の辺楊貴妃桜
ゝ興福寺乃玄宗と云僧乃寵愛せ〳〵より号ると云都〳〵物
の名ゝ付るふも昔ハふと風流ゝ今時付る名ゝ雅ゝらゞ
唱ふとむつ〳〵し

○何と形く人ふゝとゝをかけ茶碗おしぬぐひつゝ茶をと
のませよまゝ花ゝのみまほらん人ゝ山里の雪間の草乃
春を見せゝや利休ゝゝびの本意ふ〳〵此歌ゝ常ふ吟ゞ心
かくる友ふ迎ひてゝ構へ〳〵忘失せさせゝん一契り何ゝや
志〳〵ぬ深山乃ふ〳〵くぬ木友と形ゝぬる閨乃埋火是ゝ爰
庵の奇ふ〳〵何ゝも古田織部冬の夜つも〳〵ふ吟ぜ〳〵も
しと之

皇都午睡下之卷終